
モンスターハンターズサノオ

金色の鸚鵡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンタースサノオ

【Nコード】

N8841C

【作者名】

金色の鸚鵡

【あらすじ】

ある日、『龍王素戔嗚』が降臨した。圧倒的な力を持つスサノオは、モンスターハンターの世界を自身のいる異世界に転送し、ハンターたちに戦いを挑んだ。この物語は、スサノオと戦うハンターたちの中の、ある4人の壮絶な戦いの物語。モンスターハンターの常識を破る作品です。読んだら是非、評価をお願いします。

プロローグ1（前書き）

初めて小説を書いたので、分かりにくい所があるかもしれませんが、どうぞ宜しくお願い致します。

プロローグ1

「親父さん、昨日渡した素材で足りたか？」

活気に溢れるドンドルマの街の鍛冶屋の前で興奮した様子で喋るハンターがいた。

彼の名前は。ラシユーー

「ああ、ちょうどいい量だったぜ。すげえ武器が出来たぜ！」

鍛冶屋の人が言った。

「よっしゃー！……！」

ラシユーーはさらに興奮して、大声で叫んだ。

「頼むから小さい声で言ってくれよ。恥ずかしいだろ」

ラシユーーの隣で周りを気にしながら言う一人のハンターがいた。

彼の名前はカナハル。

ラシユーーとは旧知の仲だ。

普段から何かと熱くなるラシユーーの火消し役になるのがカナハルなのだ。

そんな対象的なふたりだから、使う武器もやっぱり違う。

ラシューは、その熱い性格と、
「攻撃は最大の防御」という言葉が大好きなので、見た目がかっこよく攻撃範囲が広い太刀を使うことが多い。
一方、カナハルはその生真面目な性格から、ランスを使うことが多い。

「でも本当にふたりが一緒に戦うと凄いやな。あのクシャルダオラをふたりで、しかも大した怪我もしないで討伐したんだもんね」
鍛冶屋の親父が感心した風に言った。

「それより、早く出来た武器を見せてくれよ」

ラシューが言った。

「はいはい、これだよ」

「うわー、すっげえかっこいい！何て言う名前なの？」

「ああ、ちまたでは、業物『エクディシス』って言うぞ」

出てきたのは、鞘が赤く、刀身が鋼色の刀だ。

「ああ、そういえばカナハルさんにも、昨日頼まれた物、出来てるよ」

親父はそう言って、一度鍛冶屋の中に入って行って、しばらくして、鋼色に輝く胴パーツの鎧を持ってきた。

「名前は『クシャナSディール』だ。」

「ありがとうございます」

「ありがとな、親父さん！」

ふたりはそう言って、金を払い、ラシユーは武器を、カナハルは鎧を受け取った、まさにその時だった。

「な、なんだ！」

ラシユーはそう言った。

その原因は、今まで晴れていたのに、急に厚い雲に覆われたからだ。しかも普通の雲じゃない、紫色の雲だ。

【マズヒトツ・・・】

突然声が聞こえたのと同時に、辺りが怪しい光に包まれて、ラシユーたち、いや、ドンドルマの街の人全員の意識がなくなった。

プロローグ2

「村長さん、今どんな依頼が来てますか？」

華奢な女の子が村長に言った。

身長は150センチあるかないかという背丈で、年は16、17だろうと思われる。

「あるにはあるが……。ハルカ、お前さんにとってはちょっとキツイ依頼だぞ。『水竜ガノトトス』の狩猟じゃよ」

ハルカと呼ばれた少女は、たまらず、

「ガノトトスですか？私、それを待っていたんです！新しい武器を作るには、ガノトトスの素材がいるんです！是非、受けさせて下さい！」

と、目を光らせて言った。

ここはポツケ村。

太古より溶けることのない雪で覆われた『フラヒヤ山脈』の懐に位置する。

「しかしなあ、ガノトトスは巨大で、危険なモンスターだからなあ。それに、お前さんのその綺麗な顔が台無しになるかもしれないし……。」

村長は言った。

確かに、ハルカは誰もが羨むほどの美貌の持ち主だ。今は普段着のおかげで、よりいっそう可愛さが出ていて、まるでお姫さまみたいだ。

「別に、傷が付いたって気にしませんよ。狩に危険は付き物ですから」

ハルカは笑顔で答えた。

「仕方ないの。この依頼を受注しとくよ。ただし、無理は禁物じやぞ」

村長の言葉を聞いて、ハルカは

「ありがとうございます！」

と、元気に言って、自宅に戻った。

「弾よし、音爆弾よし、カエルは密林でとればいい」と

ハルカは荷物を確認して、防具を着て、ボウガン『サンドフォール』を掴んだ時、外から何やら騒ぎ声が聞こえて来た。

「何かあったのかな？」

彼女はそう思って、外に出た。皆が上を指差しているので、空を見ると、何やら怪しい紫色の雲が覆っていた。

【フタツメ・・・】

声が聞こえたのと同時に、光が村を覆った。村人は皆意識を失った。

プロローグ3 (前書き)

長いプロローグもこれで終わりです。次話から異世界での話になります。これからもどんどん更新していくので、引き続き読んでくれたら嬉しい限りです。

プロローグ3

「ふあゝあ。ん、ここどこだ？」

コcott村のある民家で目を覚ました男は、知らない部屋にびっくりして、ベッドから飛び起きた。

「ああそうか。俺、ゲリヨス倒した後、気を失ったんだっけ」

彼の名前はギイ。

年はまだ18の彼は、半年前に訓練所を卒業したばかりの新人ハンターだ。

しかし彼には隠れた才能があつて、片手剣を使うと、ベテランハンターもびっくりするほどの腕前を持っている。

まだ本格的にハンターを始めてまだ半年も経っていないのに、昨日、ゲリヨスを倒したのだ。

が、毒をくらったので、倒した後には力尽きたのだ。

ギイが部屋の周りを見てみると、一人の男が入って来た。

「おお、目を覚ましたか。感謝しろよ、倒れてるあんたを助けたのは俺なんだからな！」

「あんた、誰？」

「せつかちだなあ。俺の名前はカルマだ。宜しく」

「ああ、助けてくれてありがとな」

ギイとカルマは握手をして、その後、30分近く、お互いのこと、何を討伐してきたか、苦労話、などを話し合った。

「じゃあカルマさん、俺そろそろ行くな！」

「ああ、気をつけてな」

ギイは防具と片手剣『アッパータバルジン』を手にして、カルマの家を後にした。

自宅に向かって歩いて5分ぐらいたったとき

「ん？」

突然辺りが暗くなった。何事かと思い、上を見ると紫色の雲が村を覆っていた。

【サイゴカ。ククク・・・。コレデ、スベテガソロツタ・・・】

ギイたちは気を失った。

ドンドルマの街の、ラシユー、カナハル。
ポツケ村のハルカ。
ココット村のギイ。

これから起こる、壮絶な戦いの中で、4人の運命が、交錯する・・・

第一話（前書き）

カタカナの文章が多くなってしまいました。根気よく読んでください。

第一話

「う……。何が……。起きたんだ？」

ラシユーは朦朧とする意識の中で、周りを見渡した。

確かにドンドルマの街だ。しかし、ここは本当にあのドンドルマなのか？

周りの建物は皆、無事らしいが、地面からは、瘴気らしき気体が出ている。それに、空の色が変だ。意識を失う前に見た雲と同じで、紫色の雲が覆っている。まるで別世界にいるみたいだ。

「ここはどこなんだ？」

ラシユーがそう言った時、

「う……。」「と言う声が聞こえた。

ラシユーにはその声の主がすぐわかった。

「おい、しっかりしろ、カナハル！おい！！」

「う……。ラシユーか。」

カナハルは起き上がり、周りを見渡した。

「おいラシュー。本当にここはドンドルマなのか？」

「わかんねえ。ただ1つ言える事は、俺達は今ヤバい所にいるってことだ。」

「ああ、見るからにヤバそうだな、ここは」

しばらくして、鍛冶屋の親父さんを始め、街の人たちが目を覚ました。

『何なんだよ、ここは？』

『怖い所だな』

街の人たちが喚いていたその時、

『ゴロゴロドーン!』

辺りに雷鳴が轟いた。

ラシューたちは聞こえた方向に目を向けると、信じられない大きさの龍が立っていた。

「何だ、あの龍？見たことないぞ！」

その雷鳴の主は、体中が白色の鱗や甲殻に覆われた龍だ。その眼は怪しい赤色の光を放っていた。

「あれは・・・まさか・・・伝説の中の伝説の・・・『ミラールツ
か?」

鍛冶屋の親父が体を震わせながら言った。

【ミナ、メザメタヨウダナ】

不意にあの声が聞こえた。

「!!!!。誰だ貴様は!!!!どこにいる!!!!」

ラッシューはその声の主に向かって叫んだ。

「お、おいラッシュー！あそこ見ろよ！あの龍の頭の上だ！……！」

カナハルはラッシューに向かって言った。

ラッシューを見ると、ミラルーツの頭の上に、人らしき姿をしたものが、こちらを見ていた。

だが、やつの中には、巨大な翼が生えていた。そして、見たことのない太刀らしきものを背負っていた。

【オマエガアノオオゴエノヌシカ】

不意にまた声が聞こえた。

【マアイイ。サア、ニンゲンドモヨ、ワガセカイニヨウコソ！トハ
イッテモ、キヨウセイサンカダガナ。ハハハ・・・】

人の気持ちを逆撫するような声が聞こえた。

いや、正確には、奴は喋らず、テレパシーみたいなもので伝わって
来たのだ。

「お前は一体、何者なんだ！！！！」

ラッシューは叫んだ。

【ワガナハ『リュウオウ』、リュウオウ『スサノオ』ダ】

「龍王？」

ラシューは言っている意味が分からず、ただ言葉を繰り返した。

【ワレハリユウオウ。ツマリ、オマエタチガヨブ『リュウ』ノチヨ
ウテンニタツノガ、ワレ、『スサノオ』ナノダ。コノ、オマエタチ
ガヨブ『ミラルーツ』ハ、ワレノ、

チュウジツナシモベダ】

「何？」

【サア、ハナシハココマデタ。カンゲイカイヲハジメヨウ】

すると突然、ドンドルマの街のあちこちで、空間に3メートルくらいの亀裂が走った。そして、まるで口を開けるように開き、空間に穴が空いた。

【デテコイ、ワガゲボクドモヨ】

すると空いた空間から、ゲネポスとイーオスの大群が出てきた。

「なんだこりゃ！」

突然起こった出来事に、ラシューやカナハルたちは驚きの声をあげた。

【サア、ニンゲンドモヨ、タノシモウジヤナイカ。コノ、タノシイ、カンゲイカイヨ。ククク・・・】

第二話

いきなり始まった戦闘に、ドンドルマの街の人々は混乱した。

ある人は、何が起きたか理解出来ずに、ゲネポスに喰い殺される者もいれば、逃げてる途中でイーオスたちに、肉を喰いちぎられる者もいた。

「あ、あ、もう駄目だあ」

一人の少年が今にもゲネポスに喰われようとしていた。

ゲネポスが襲おうとして、少年が目を閉じたその時。

「はっ！！」

少年が目を開けると、ゲネポスは胴から真っ二つになっていた。

「大丈夫か？」

ゲネポスを倒したのは、ラシューだった。

「あ、ありがとうございます！」

「気にすんな。早く逃げろ！」

ラシューはそう言って、ゲネポスの大群に突っ込んだ。

「この『エクディシス』の試し切りに、ちょうどいいぜー！！」

ラシューの回りには、およそ20頭のゲネポスやイーオスが囲んでいた。

しかしラシューは、恐れるどころか、出来たばかりの名刀の見せ場だと思い、張りきっていた。

しかし、彼にはもうひとつ考えがあった。

(少しでも時間を稼いで、皆の準備が出来るのを待つんだ！)

そう思いながら、ラシユーは前方のゲネポスに斬りかかった。

狙われたゲネポスは避けようとするが、ラシユーの剣速が勝った。ゲネポスは上半身を二つに斬られ、絶命した。

「ひゅう、さすがは業物。凄い切れ味だな、っと!!」

ラシユーは、横から毒を吐こうとしていたイーオスを、一瞬の反射神経で避けると、すぐに太刀を横に斬り払った。

その速業に、イーオスはもちろん、その隣にいたゲネポスも、胴体を真っ二つに斬られ、絶命した。

「かかってこいよ。雑魚ども!!」

ラシユーはそう叫んで、ゲネポスに斬りかかった。

しかし、10体ほど倒すと、ゲネポスたちはいつせいに鳴き声を上げた。

すると、その声に反応したのか、辺りから、新しいゲネポスやイースが、加勢に来たとばかりにラシューに向かって走って来た。

「さすがに、この状況はヤバいな・・・」

ラシューはそう言った。

一瞬の隙が出来ていた。

「!!。しまった!!」

ゲネポスに後ろから蹴られて、ラシューは、うつ伏せに倒れる。

ゲネポスたちがとどめをさそうと近づいてきたその時。

「うおおおー！ー！！」

その声が聞こえるのと同時に、ラシユーの側にいたゲネポスが、黒く長い槍の様なもので体を貫かれ、絶命した。

ラシユーは、その者に向かって言った。

「へ……。遅いじゃねえか、カナハル！！」

「無駄口言ってる暇があったら、この状況をなんとかしろ！！」

「ああ、そうだな。よし、いくぜー！！」

そう、カナハルはラシユーが闘っている間に、急いで自宅に戻り、防具と武器を身につけて、戻ってきたのだ。ラシユーとカナハルは互いに背中を託して、援軍も合わせて40頭近くになったゲネポスたちに戦いを挑んだ。

ラシユーが業物『エクディシス』で豪快に斬り、カナハルは大槍『

ブラックテンペスト』で一体ずつ確実に倒していく。

最強の矛と最強の盾が揃った二人には、大群のゲネポスたちが相手しても、まったく敵ではなかった。

【ホウ、アノフタリ、デキルナ・・・】

遠くから眺めていたスサノオがそう思った。

【フ、ソロソロカンゲイカイモオワリカ・・・】

準備を終えたハンターズギルドが、大群でゲネポスたちに向かって突っ込んでいった。

10分近くたったとき、敗色が濃厚になったゲネポスやイーオスたちには、急いで街を抜け出そうとして、走っていった。

ラシューが逃げようとしていたイーオスを斬ったのと同時に、ハンターたちが、一声に勝利の雄叫びをあげた。

「やったぜー！ー！！！」

ラシューが叫んだ。

【ミゴトダ、ハンタードモヨ。タノシンデモラッタカナ？】

スサノオが言った。

【サテ、ワレハコレデシツレイシヨウ。マダ、ベツノムラデ、カンゲイカイヲシナイトイケナイノデネ……。サラバダ、シヨクン】

そう言うとスサノオは、ミラルーツと一緒に何処かに飛んでいった。

「別の村で歓迎会？」
ラシユールはそう思った。

「！！。まずいぞラシユール！アイツ、ポツケ村とココット村でまた騒ぎを起こすらしい！！」

カナハルは言った。

その言葉を聞いたラシユールは

「ああ、そうしか考えられねえ！俺はポツケ村に行く！カナハルはココット村に行ってくれ！早くしないとまずいぞ！」

「ああ、そうだな。行こう！絶対に死ぬなよ、ラシユール！」

「お前もな、カナハル！！」

二人はそう言うと、それぞれの目的地に向かっていった。

第三話

「一体、何が起きているの？」

ハルカは今起きてることが理解出来なかった。

突然意識を失って、再び目を開けると、まるで違う世界に来たようだった。

意識を戻して5分近くたったとき、突然ポケケ村のあちこちで空間に穴が空いた。そしてそこから、ギアノスの大群が現れたのだ。

ハルカは危険を察知して、咄嗟に自宅の中に避難したのだ。

「何だかわからないけど、今、外は危ないから、お母さんとお父さんは部屋の奥に隠れて！」

ハルカがそう言うと、ハルカの父が、

「おい待て、お前はどつするんだ！」

と、たまらず言った。

「私は、外に出て戦う！この騒ぎを早く終わらせないといけないから！」

「駄目だ！そんなこと、俺が許さん！！」

「そつよ、母さんも反対よ！」

ハルカの両親が反対した。

「でも、このままじゃ・・・」

「バリーン！！！！」

ハルカがそう言った時、窓を突き破って、ギアノスが一体入ってきた。

ギアノスがハルカ目掛けて、爪をたてて、襲おうとしたその時。

「ドカーーン！！！」

ハルカが持っていたボウガン『サンドフォール』で弾を打ち出し、見事ギアノスに命中し、ギアノスは絶命した。

「お父さん、お母さん！ここも危ないから、早く奥に！！！」

「お、おいハルカ！」

父の話も聞かず、ハルカは外に出ていった。

「く……ハルカ……」

「あなた。今はハルカの言う通りにするべきよ」

「ああ、そうだな。・・・ハルカ、無事で帰って来てくれ！」

「えい！！！！！」

ハルカのボウガンから打ち出された弾は、1センチの狂いもなく、ギアノスに命中した。

「やっぱり、私って、ボウガンの才能あるわ」

ハルカはそう思った。

実は、ハルカにはボウガンの扱いに天賦の才能があり、狙ったものは逃がさない、なんていう言葉を有言実行出来るほどの腕前を持っているのだ。

ハルカの他、ポツケ村のハンターたちが続々と、ギアノス討伐に乗りだし、退治していく。

数十分後、襲ってきたギアノスたちの7割を討伐して、ハンターたちが勝利を確信したその時、あの声が聞こえた。

【ホウ、ハデニヤツテルナ・・・】

ハルカたちはその声の主を見つけた。いや、嫌でも見えた、と言った方が良いか。

巨大な龍とその頭の上に立つ者は、雷鳴と共に現れたのだ。

【イマノハ、オードブルダ。サア、メインディッシュノトウジヨウダ】

「何、あれ？」

ハルカはそう言つのと同時に、また空間に穴が空いた。そして、200体を越えるギアノスが飛び出して来た。

大群との戦いに、ハルカは死力を尽くした。他のハンターたちも同じだが、数が多すぎて、膠着状態になってしまった。

皆が死闘を覚悟した。その時、

「ヴオオーーーー！！！！！！」

「何、今の音？」

ハルカは言った。

すると一人のハンターが言った

「あれはドンドルマの角笛だ！援軍が来たんだ！」

後ろからの攻撃に、ギアノスたちはうろたえた。

「今が好機だ。皆、奮起せよ！！！！！」

一人のハンターが言った。

前後から挟撃されたら、いくら大群といっても、支えられない。次々とギアノスたちは命を散らした。

ドンドルマの部隊は、ラシユーを中心として、ギアノスに突っ込んだ。

「おらおらおらー！！！」

ラシユーが叫んだ。

戦いは、ラシユーやハルカの活躍により、勝利した。

ハルカは、ラシユーに会った。

「ありがとう。あなたたちが来てくれたおかげで助かったわ」

「へ、困った時はお互い様だろ。それにしても、嬢ちゃん、ボウガンの扱い上手いなあ！」

「ありがとう、あなたも、その太刀の扱い上手だね。私はハルカよ。あなたの名前は？」

「!」。」

ハルカは兜を外すと、ラシユーは動揺した。

(す、スゲエかわいい・・・)

ラシユーがそんな気持ちを持ったことなど知らないハルカは、

「ねえ。名前は何ていうの？」
と、言った。

ラシユーはあわてて言った。

「あ、ああ。俺はラシユーだ！」

「よろしく、ラシユーさん」

ハルカは笑顔で言って、手を出した。

「ああ、よろしく、・・・ハルカ」

ラシユーは恥ずかしそうにしながら、握手した。

それを遠くで見っていたスサノオは、

【ラシュー、ハルカ、カ・・・】

そう思うと、スサノオとミラルーツは、ポツケ村をあとにした。

【ツギノカンゲイカイハ、ココットムラカ・・・。ククク・・・】

第四話

スサノオがココット村に向かい始めた頃、カナハルたちハンターズギルドは、一足早くココット村の側までたどり着いた。

ココット村は静寂に包まれていた。

「良かった、まだモンスターはいないらしいな」

しかし、いざココット村に入ろうとしたその時。

「うおー！」

カナハルは、まるで見えない壁に当たったかのように、弾き飛ばされた。

「何なんだ、これは？」

まるで結界が張ってあるみたいだ。

カナハルはココット村の中を見た。

ココット村の人は、皆倒れたままで、全く動かなかった。

まるで、そこだけ時間が止まっているようだった。

「とにかく、これを破らないと・・・」

カナハルがハンターたちにそう言った時、

「!!!」

突然、辺りに閃光が走った。

次の瞬間、何かが崩れる音がした。

カナハルがココット村を見ると、人々が意識を取り戻し、辺りを見

渡し始めた。

「おそらく、結界みたいなものがなくなったんだろう」

ハンターズギルドの隊長が言った。

「早くココット村に入ろう」

カナハルが言って、ココット村に入った。

その時、空間に穴が空いた。

「!!!!!!。来るぞ!!!」

隊長が言った。

穴の中から、ランポスたちが大量に出てきた。

村人はパニックになった。

「村人を助けるのだ！！ドンドルマハンターズギルド、突撃——！！」

「おおおお——！！！！」

ココットの村は、戦場となった。

そして、その様子を見つめる龍王がいた。

【ククク・・・】

第五話

ココット村は突然、戦場となった。

しかし、それほど被害が多く出ないのは、カナハルたちハンターズギルドのおかげだろう。

「はっ！！！！」

カナハルが『ブラックテンペスト』でランポスを、胴体から突き刺した。

ランポスは断末魔をあげることなく、絶命した。

しかし、ランポスたちも黙って殺られる訳にはいかないと、8体ほどが、カナハルを囲んだ。

しかし、カナハルの方が、一枚上手だった。

「これでもくらえ!!」

そう言うと、カナハルはポケットから閃光玉を出し、上空に投げた。

2メートルほど進むと、閃光玉が破裂し、辺りをまぶしい光が襲った。

「こんなこともあるのかと、用意してたんだ!」

ランポスたちは目が見えず、うろたえていた。

そんなチャンス逃さないと、カナハルはランスで突き刺しまくり、見事ランポスを討伐した。

「よし、これで大体済んだらう」

カナハルがそう言った時、少年のような声が聞こえた。

「誰かー！ー！！助けてくれー！ー！！」

カナハルがその方向を向くと、少年が、3体のランポスに追いかけていた。

「まずい！早く助けないとー！！」

カナハルは少年に向かって、走り出した。

少年の名前はギィ。

そしてこれが、カナハルとギィの出会いでもある。

そしてこの新米ハンターのギィも、運命の中に取り込まれることになる。

第六話

「いやー助かったよ。何せ、いきなり襲われたからな」

ギイはカナハルにお礼の気持ちを込めて言った。

彼らの回りには、3体のランポスの亡骸が横たわっていた。

「でも、君はハンターなのに、どうして逃げたんだ？見たところ、その片手剣はゲリヨスの素材を使った『アッパータバルジン』だと思っけど？」

「ああ、そうだけ。よくわかったな」

「まあ、これでもハンター生活は結構長いんだ。そんなことはともかく、なぜ君はゲリヨスを倒す実力があるのに、たかがランポス3体で逃げたんだ？」

「う、痛い所付くな。実は俺、ランポス系は苦手なんだよ。」

「……。それでよくゲリヨスを倒せたな」

カナハルはもつともらしい一言をギィに言った。

ギィは答えた。

「いや俺、モンスターと戦う時は周りに目がいかなくてな。ゲリヨスの時は、そいつだけ見れば良いけど、ランポスは囲むから嫌いなんだよ」

「なるほど。君は変わっているな」

カナハルは言うと同時にあることを思った。

（ラシューに似てるな。性格だけで、腕はまだまだが・・・）

「そういえば、あんたの名前ってなんだ？俺はギイだ」

「カナハルだ。そういえば、君はハンターを始めて何年たつ？」

「まだ半年だけだ。」

「えっ、半年？半年でゲリヨスを倒したの？」

「ああ、そうだけど？そんなに凄いことか？」

「凄いよ！俺なんか一年かかってやっと討伐出来たんだ！へえ、ギイって凄いんだな！」

「そ、そうかな？」

カナハルとギイが親交を深めていた頃、スサノオは考え事をしていた。

「タチノラシユー。ランスノカナハル。ボウガンノハルカ。ソシテ、カタテケンのギイ。コノヨツツガソロツタトキ……。タガ、マダ、キワミニハトオイ。ダガ、イズレハ……。ククク、タノシミガフ

エタナ】

スサノオはミラルートと共に、ココット村をあとにした。

【ククク、テンメイハ、イマダ、ワレニアリ】

第七話（前書き）

評価してくれた人、どうもありがとうございました。おっしゃった、ご意見を参考にしして、これからも執筆し続けてますので、これからもよろしくお願いします。

第七話

ここは、密林を飛ぶ『古龍観測局』の気球。

ここに、乗組員の竜人族の老人が三人いた。

彼らは、ドンドルマの街が安全になった頃、今の密林の情報を集めるために来たのだ。

今は、密林の入り口から少し入った所にいる。

「ふむ、やはりスサノオの影響で、気が乱れているな」

一人の老人が言った。彼の目に写った密林は、以前のそれとは、全く違っていた。

乱れた気の影響なのか、密林のモンスターたちは、異様な殺気を放っていた。

ある、怪鳥『イヤンクツク』が、別のイヤンクツクと殺しあいをしてきた。密林には殺伐とした雰囲気が出ていた。

(これは、もっと調べないといけないなあ)

乗組員の一人が思ったその時。

【オマエガ、『コリュウカンソクキヨク』ノモノダナ？】

そのテレパシーは、そこにいた三人の老人の脳に、直接届いた。

「!!!。これは……。龍王か！」

彼らは、500メートル前方に、白き巨大な龍と、その頭の上に立っている者がいるのを見た。

【アンシンシロ。オマエタチヲ、コウゲキシニキタワケデハナイ。】

「何・・・？」

【スベテノハンターニ、イマカラ、ワレガイウコトヲ、ツタエロ】

その内容は、竜人族の老人を驚愕させる物だった。

老人たちと、スサノオが接触した日の翌日、ポツケ村と、ココット村の全てのハンターに、伝令が入った。

「翌日の10時までには、ドンドルマの街に集合せよ」

第八話

翌日・・・10時。

ドンドルマの街では、ポツケ村とココット村のハンターたちが集結した。

新米ハンターからベテランハンターまで、ものすごい数が揃った。

ドンドルマの大広間。

「オッス、カナハル。久しぶりだな！」

「ラシューか！本当に久しぶりだな」

ラシューとカナハルは、久しぶりの友との再会に、興奮した様子で言い合った。

「無事に会えたな。まあ、お前は、簡単には死なないから、心配はしなかったがな！」

「俺もだ、ラシュー。お前が殺られる姿なんて、想像出来ないからな」

二人が語り合っていると、ラシューの後ろの方から、女性が近づくしながら、声をあげた。

「ラシューさん、語り合っている所申し訳ないけど、そろそろ大長老さんが話す時間よ」

「ん？彼女と知り合いか？」

「ああ、ポツケ村での戦いの時に、ちょっと知り合ってたな。ハルカっていうんだ」

ハルカは、笑顔でカナハルと向き合った。

「ハルカです。カナハルさんですよ？ラシユーさんから話を聞いています。宜しく！」

「あ、ああ。宜しく」

カナハルは、ぶっきらぼうに言った。そして、

「おいカナハルさん！いつまで待たせる気だよ！」

カナハルの後ろから、男性が近ずきながら言った。

「おお、悪いな、ギイ。よし、じゃあ自己紹介しようか。ラシユーとハルカさん。この男はギイ。まだ新米ハンターだ」

「ギイだ！宜しく！あんたらの名前はなんだ？」

「口悪いな。俺はラッシュ。カナハルとは親友だ」

「ハルカです。これから仲良くしようね、ギイ君」

「あ、ああ。」

四人は親交を深めていた時、辺りに声が響いた。

「私は、このドンドルマのハンターズギルドの隊長だ！これから、大長老から話があるから、静かにしろ！！」

辺りを静寂が包んだ。
大長老が現れた。

「まず、この街に集まってもらった理由を話す前に、今わかってい
ることを話そう」

全てのハンターが大長老をみていた。

「まず、この世界は我らがいた世界とは全く別の世界、つまり、異
世界に来たということだ。その原因は、龍王スサノオと名乗る者が
我々に戦いを挑むためだろう」

(くそ。好き勝手しやがって)

ラシユーはそう思った。

「そして一昨日、密林を飛んでいた古龍観測局の乗組員は、スサノ
オに接触した。そして、全てのハンターに伝える、と言ってきた」

辺りにどよめきが起こった。

「言うぞ。まずスサノオは、当分の間は我らの街やポケ村、ココット村は襲わないと言った。これは、奴の言う歓迎会を楽しんで見れた、そのお礼だからだと言った」

「くそ！奴め、俺達を物扱いしやがって！！」

「あの戦いで、どれだけの人が亡くなったと思ってるんだ！！」

辺りで罵声が起こった。

「まだ話は終わっていない。静かにしてくれ。これから言うことが最も大切なことなのじゃ」

辺りをまた、静寂が包んだ。

「奴は、これから各地のフィールドのモンスターたちを、自分の戦力に加えるために、何かをするらしい。そして、これから奴がする事は、準備期間が必要だ、と言っている。つまり、奴が動けない今がチャンスなのだが、今の状況は良くない。そこで諸君らで、各地のフィールドのモンスターを、ある程度、討伐してほしいと思う」

辺りをまた、どよめきが包んだ。

「だが、奴が何か罫を仕掛けているかもしれない。そこで、この場で四人一組のグループを作ってくれ。そして、これから狩りに行くときは、常にグループ行動してもらおう。ワシの話は以上だ」

「では、今から四人一組のグループを作ってくれ。その後は、どこに行ってもかまわない。狩りに出かけるもよし、ここで待つのも良い。だが忘れるな！スサノオを倒さない限り、この世界から脱出する事は出来ないことをな！！」

ハンターズギルドの隊長が言った。

辺りがグループ決めで騒がしくなった頃、ラシューは、

「まあ俺らのグループは決まっているな!!」

「ああ、そうだな」

カナハルが答えた。

「私も、精一杯、戦います!」

ハルカが言った。

「俺も、出来る限りのことはするぜ!!」

ギイは言った。

「よし、決まったな!準備して、早く狩りに出かけようぜ!!」

「おおー!!!!!!」

四人は、早速、準備に取り掛かった。

だが、このあとの狩りで、思わぬ事態になることを、四人はまだ、知るよしもなかった。

第九話

ラシューたちは、密林に向かうため、船に揺られながら移動していた。

「密林かあ。今どんな状況なんだろうな？」

ラシューが言った。

カナハルがそれに答えた。

「『古龍観測局』の人から聞いたんだが、どうもモンスターたちの様子がおかしいらしいぞ。なんか、殺気が凄い感じたとか」

カナハルの言葉に、ハルカが疑問を言った。

「でも、どうしてモンスターたちは、殺気だつ必要があるのでしょうか？」

「簡単なことだ。いきなり、ここに送られたんだ。動揺して殺気だつのが当たり前さ」

ギイが答えた。

「でも、そういうことは、まだスサノオが、統治してないってことだよな？カナハル」

「まあ、そういうことになるな」

「だったら俺達が、密林のモンスターを討伐すれば、スサノオも、十分な戦力を獲得出来ない、ってことだよな？」

「ああ、そうなるな」

四人が話している時に、前方に密林が現れた。

「よし、上陸だ！」

ラシユールの一言で、密林に足をつけた。

「どつやら、俺達が一番乗りらしいな」

「とりあえず、密林の道は変わってないらしいな。地面から障気
みたいのが出てるけどな……」

ラシユールが辺りを見渡しながら言った。

「まあ、とにかく、浜辺らへんを歩こう。慎重にな。」

カナハルの一言で、まずは浜辺を歩くことに決まった。

浜辺を歩くと、ランポスが二頭現れた。

「早速、仕事といくか。ん？どうしたギイ。そんな怖がっているんだ？」

ラシユーは言った。

確かにギイはランポスを直視したまま、動かなくなっていた。

「俺、ランポス系は駄目なんだ。あんたらで退治してよ！！」

「はあ、何でだよ。ランポスだぞ。あんな雑魚も倒せないのかよ、お前は！！」

「ああ悪いラシユー。説明してなかったな。ギイはちょっと変わっ
ていてな。竜とかなら、結構やるんだけど、ランポスとかの小型類
は、ちょこまか動くから嫌いなんだ」

「お前、そんなんでハンターやっているのかよ！」

「うるさいな！！とにかく俺はランポス類は嫌いだ！！あんたらで
退治してよ！！」

ラシューとギイが口喧嘩していると、ランポスたちがこちらに気づき、走ってきた。

「ここは、私に任せて！」

ハルカはそう言うと、ボウガン『サンドフォール』で、ランポス目掛けて通常弾を発射した。

放たれた二発は、ランポス二頭の頭に命中し、そのまま倒れ、絶命した。

「へえ〜。ハルカさん、上手いですね、ボウガンの扱い」

「それほどじゃないわよ、こんなの」

ハルカはカナハルに笑顔で答えた。

それを隣で見ていたラシユーは。

(う。やっぱり、滅茶苦茶かわいいな〜ハルカさんは。ああ〜ラシユーさんじゃなくて、ラシユーって呼んで欲しいな〜)

つと、そんな淡い恋心を持っていた。

一方、そんなことなど知らないハルカは、ラシユーに向かって、

「ラシユーさん、早く進みましょう」

と、笑顔で言った。

「あ、ああ。そうだな」

ラシユーが慌てて言って、ぎこちなく歩いた。

その様子から、カナハルはラシユーの気持ち察した。

(じりゃ、面白いことになりそうだな)

「カナハルさん？どうしたんだ？」

ギイが尋ねた。

「いや、なんでもねえよ。お前には、まだ分からないことだよ」

「??？」

カナハルの言葉が理解出来ず、ギイは首をかしげた。

「さあ、いくぞ、ギイ！」

カナハルとギイは、前にいたラシユーとハルカを追いかけた。

浜辺を歩いて10分くらいあるいて、離れ小島がある所に来た。
その時だった。

「!!。何か来るぞ!!」

辺りに、バサツバサツという音が聞こえた。そして、50メートル
くらい前に、ピンク色の鱗と甲殻をした、見るからに鳥のような竜
が着地した。

「あれは、怪鳥『イヤンクック』ね。でも、殺気が凄いわ」

「まあ、殺気を持っていても『イヤンクック』だ。楽勝だろ。」

ラシューが言った。

「やっと、俺の活躍の場が現れたか！」

ギイが張り切った様子で言った。

「じゃあ、いくぞー!!」

カナハルの合図と共に、四人はイヤンクックと対峙した。

四人揃っての、初めての戦いが始まった。

第十話

イヤンクツクは鳴き声をあげて、威嚇行動をした。だが、その間、完全に無防備だった。

「おりゃー!」

ラシユーはイヤンクツクの頭に、業物『エクディシス』で、切りつけた。

イヤンクツクの頭に大きな傷をつけ、そこから血が噴き出した。しかし、致命傷ではなかった。

(変だな。手応えはあったんだが)

ラシユーがそう思うのと同時に、イヤンクツクはラシユーに、ついにばみ攻撃をした。

だが、ラシユーは素早くそれをかわして、後ろにまわしこんだ。そして、太刀で横に切り払った。

しかし、イヤンクツクの足に当たったにもかかわらず、イヤンクツクは怯むことはなかった。

(やっぱり何かおかしいな。イヤンクツクって、こんなに頑丈だったって)

ラシユーは考え事をしていて、隙が出来ていた。

イヤンクツクはそれを見逃さず、口からブレスを吐いた。

しかし、それがラシユーに当たることはなかった。

「おいラシユー！戦場で考え事をするな！」

カナハルが、イヤンクツクのブレスを、その巨大な盾で受け止めながら言った。

「ああ、悪いな、カナハル」

「ラシューさん、カナハルさん、離れてください！」

ハルカはそう言うと、『サンドフォール』から、徹甲榴弾を発射した。

イヤンクツクの首のあたりに当たった。

ラシューとカナハルは、イヤンクツクから離れた。

一方、イヤンクツクは、ハルカ目掛けて突進してきた。

しかし、その途中で、徹甲榴弾が爆発した。

その爆音に、耳が痛いイヤンクツクは、たまらず上を向いて直立し、動かなくなった。

「よし、いまだー！！ギィ！今がチャンスだ」

イヤンクツクの耳は、ぼろぼろになっていた。

「さすがカナハルさんだぜ。すげえや！！」

ギイが声をあげたが、その声に気付いたイヤンクツクは、ギイ目掛けて、ブレスを吐いた。

「！！！！しまっ」

ギイは声をあげたが、ブレスをまともにくらってしまった。

幸い、ギイはイヤンクツクの素材を使った防具を全身に着けていたので、大した火傷はおわなかった。

すると、イヤンクツクのぼろぼろの耳が、力なくたおれた。

「そろそろ弱ってきたか、ギイの毒もくらったんだから、当然か」

ラシューはそう言うと、精神を研ぎ澄ました。

「気刃斬り!!」

ラッシューは太刀の奥義、気刃斬りをした。

その太刀は、イヤンクツクの頭に命中した。

「クエエエエー……!!!!」

イヤンクツクは、鳴き声をあげると、その場に倒れ、絶命した。

「よし、やったな」

ラッシューは言った。

「凄いです、ラシユーさん！私、尊敬します！」

ハルカはラシユーに英語で言った。

「へへ、まあな。これでも太刀使いには、絶対の自信があるんだ」

ラシユーは照れながら言った。

一方、カナハルとギイは。

「大丈夫か、ギイ？」

「ああ、大した火傷じゃない。この防具のおかげだな」

そう言つとギィは回復薬を飲んだ。

「さ、剥ぎ取るとするか」

だが、剥ぎ取り終わると同時に、あの声が聞こえた。

【ホウ、ナカナカヤルナ、ハンタードモ】

「!!!。スサノオか!!!どこだ!」

ラッシューはそう言つて、辺りを見渡した。

しかし、それらしき姿はなかった。

【サガシテモムダダ。ワレハ、ソコカラ、トオクハナレタトコロカラ、オマエタチヲミテイルノダ】

「お前は、今何も出来ないはずだぞ！」

ラッシューは叫んだ。

【タシカニ、ワレハ、ナニモデキナイ。シカシ、リュウノチカラヲツカエバ、ハナレタトコロデモ、ミタリ、ハナシタリ、デキルノダ】

「何？」

【サア、ウヌラノチカラヲミセテミロ。デテコイ、ワガシモベヨ！】

スサノオが言うと、辺りに鳴き声が聞こえた。

ラシューたちは、黒紫色の鱗と甲殻を持つ、隻眼の竜を見つけた。

「何、あれ？」

ハルカは言った。

カナハルが答えた。

「あれは、黒狼鳥『イヤンガルルガ』だ。イヤンクックに似ているが、強さが段違いだ。気をつけて」

【ククク。ドコヲミテイルノダ？コウゲキハ、モウハジマツテイルゾ。】

「何？」

カナハルは言った。

その時、後ろから、強烈な殺気がした。

カナハルは振り向くと、何者かが、火球のプレスを出した。

「!!。」

カナハルは、咄嗟にガードした。

火球は、カナハルの盾に当たり、爆音をあげて、爆発した。

「く。。。。」

「カナハル、大丈夫か!!」

「へ、平気だ」

やがて、その火球ブレスを出した者の姿がはっきりした。

しかし、その姿を見ると、ラシユーは言った。

「!!。な、なんだあいつは!」

そこにいたのは、隻眼の竜から、イヤンガルルガとわかった。

しかし、鱗や甲殻の色が違っている。

赤い。紅蓮のように赤いイヤンガルルガだ。

「おいラシューー！あんなイヤンガルルガ、見たことあるか？」

「知らねえよ。あんな色のイヤンガルルガ！！」

【ソノアカイモノハ、コノセカイニシカ、イナイリユウダ。ウヌラ
ノコトバタト、イヤンガルルガノ、アシユ、ミタイナモノダ】

「亜種……。」

ラシューーは言った。

「なあラシューー。俺、奴の火球ブレスを受けてわかったけど、あいつの火球、ひよつとしたら、リオレウスの火球を上回るぞ」

「何だつて！」

ラシューーは叫んだ。

【サア、ハジメヨウカ】

ラシューたちは、戦闘体型になった。

イヤンガルルガと、イヤンガルルガ亜種の挟撃。

未知なる戦いが、始まった。

第十一話（前書き）

遅い更新となつてしまいました。現在、私は忙しいので、更新が遅めになると思いますが、これからもよろしくお願いします。

第十一話

イヤンガルルガとイヤンガルルガ亜種との戦いは、ラシユーたちの圧倒的劣勢から始まった。

二体は、同時に火球を放った。

ラシユーたちは、それを避けた。

すると、どうやら二体とも、ラシユーを狙っていたらしく、火球と火球が衝突して、凄まじい爆音と共に、爆発した。

「こりゃあ、当たるとやばいな」

ラシユーは、たまらず言った。

「はあ……」

カナハルは、イャンガルルガの頭に突きをした。

見事に命中したが、大したダメージにはならなかったらしく、イャンガルルガは、ついにみ攻撃で追い払おうとした。

カナハルは、『ブラックテンペスト』の漆黒の盾で、防御した。

このあたりは、さすがカナハルといった所だ。しかし。

「ギアウ!!!!!!」

イャンガルルガ亜種が、カナハル目掛けて火球を放った。

イャンガルルガ亜種は、側にいるラシユーとハルカには目もくれず、カナハルだけを狙っていたのだ。

「!!!!!!」

カナハルは声をあげること、防御することも出来ず、背中に火球

を受けた。

「ぐわ……！」

カナハルは吹っ飛ばされた。

カナハルは、クシャナシリーズを着けていたので、火球の威力を、完全には防げなかったが、クシャナシリーズは物理攻撃には強いので、地面の衝突による衝撃は和らげた。

「この、俺を無視するな……！」

ラシユーは激怒し、イヤンガルルガ亜種の尻尾らへんをきりつけた。しかし、

「ガン！」と、鈍い音をたてて、弾かれてしまった。

基本的に、イヤンガルルガは、頭以外は、とても硬い。亜種ともなれば、硬さは数段上だろう。

イヤンガルルガ亜種は、ラシユーに向かって、突進してきた。

ラシユーはそれを避けられず、三メートルほど吹っ飛ばされた。

「くそ!!」

ラシユーがそう言ったのも束の間、亜種が火球を放った。

そのあまりの早さに、ラシユーは避けられず、直撃した。

幸い、ラシユーは『リオソウルU』シリーズ一式を着けていたので、大した火傷はおわなかった。

「ラシユーさん！大丈夫ですか!!」

ハルカはラシューに向かって言った。

「ああ、大丈夫。！！。後ろを見る！！」

「え……？」

ハルカは後ろを見ると、イヤンガルルガ亜種が、ついにみ攻撃をしてきた。

「きゃあー！！」

ハルカは避けられず、吹っ飛ばされた。

「く、油断しちゃった」

ハルカはそう言ったが、冷静さは失わなかった。

一方、普通のイヤンガルルガを相手しているカナハルとギイはとうと。

「うりゃあ!!」

ギイはイヤンガルルガの足にきりかかった。しかし、イヤンガルルガは足も硬く、弾かれてしまった。

「ギイ!イヤンガルルガは頭を狙うしかない!!」

そう言うと、カナハルは頭に突きを繰り出した。見事に命中した。しかし。

「カナハルさん、大丈夫か！」

「お前は自分のことだけを考えろ！！奴を見る！！」

ギイがイヤンガルルガを見ると、狙いを変えたのか、今度はギイを
狙って突進してきた。

「うわ！！」

ギイは突進をくらい、吹っ飛ばされた。

「この！！」

カナハルはイヤンガルルガに突進していった。

すると、イヤンガルルガは少し後ろに下がった。

「！！。しまっ」

カナハルは直感で盾を構えた。

そしてイヤンガルルガは、前に一回転した。

この攻撃こそ、イヤンガルルガの厄介な攻撃である、サマーソルトである。イヤンガルルガは尻尾に強力な毒を持っていて、この攻撃をもろに受けると、凄まじいダメージを負うと共に、毒を注入されるのだ。

イヤンガルルガのサマーソルト攻撃を、カナハルは咄嗟にガードしたが、体勢が整っておらず、盾が吹き飛ばされた。

「く・・・」

その衝撃で、盾を持っていた左手に力が入らなくなった。

イヤンガルルガは、カナハルにとどめをさすべく、火球を放った。

だが、カナハルに当たることはなかった。

「ぐわー!!」

ギイがそれを盾で防いだ。しかし、ギイ使う片手剣の盾は小さく、威力を完全に殺すことは出来ず、吹き飛ばされた。

「ギイ!!」

カナハルは急いで盾を拾いにいった。

イヤンガルルガは、カナハルは狙わず、先程火球を止めたギイに腹をたてているのか、ギイに突進攻撃を仕掛けた。

カナハルは、ふとラシューとハル力を見た。

ラシユールとハルカも、キレたイヤンガルルガ亜種に苦戦していた。普通のイヤンガルルガよりも更に速い攻撃をだすのか、ラシユールでさえ簡単には近づけないらしい。

（このままでは、全滅だ！ここは、一度体勢を立て直す方がいいな！）

カナハルはそう思うと、閃光玉を取り出した。

「ギイ！目を閉じる！！」

ギイは、カナハルが閃光玉を持っているのを見ると、直ぐに言葉を察知し、イヤンガルルガに背を向けて、走った。

「くらえ！！」

カナハルは閃光玉を投げると、イヤンガルルガのちょうど前で、強烈な光りを放った。

威嚇行動していたイヤンガルルガは、その光りをもろに見て、目が見えず、混乱していた。

「ラシュー！ハルカさん！一度この場を離れて、体勢を立て直そう！！」

そう言うと、カナハルはイヤンガルルガ亜種に向かって閃光玉を投げた。

「うわ！」

ラシューは咄嗟に目を閉じ、ハルカはイヤンガルルガ亜種に背を向けた。

辺りに光りが走った。

「ギイヤアアアア！！」

イヤンガルルガ亜種も目が見えなくなり、うろたえていた。

「よし、今だ！あの洞窟に入ろう！」

「はあ？何言ってるんだよ！今がチャンスだろ？」

ラシューが後退に反対する。

「このままだとの道全滅だ！今は退くぞ！」

「でもよ！」

「そうね、一度体勢を立て直す方がいいわ。退きましよう、ラシューさん！」

ハルカは言うど、カナハルとギイと一緒に、浜辺の近くにある洞窟に向かって走った。

「お、おい！……。くそ！！」

ラシューは名残惜しみながら、三人を追いかけた。

「どうすんだよ、これから？」

ギイは疑問を言った。

ここは密林にある、洞窟と浜辺を結ぶ所だ。ここは出入口がとても小さく、飛竜種は入れない所だ。

辺りには、ここを住みかに行っているカンタロスが、うろつろしている。

だが、ラシユーたちは疲労感を感じていた。

既に四人は、イヤンクツクを討伐し、イヤンガルルガとイヤンガルルガ亜種を相手しているのだから、疲労するのは当たり前だ。

「今は体を休めながら、作戦をたてるぞ」

カナハルが答えた。

「ふう……。みんな、体は大丈夫か？」

ラシューが言った。

「私は大丈夫。大した怪我はないわ。薬草があるから、すぐ治る」

「俺も大丈夫。ちょっと火傷を負ったが、この鎧が守ってくれた。問題はギイだ」

「へ、俺なら大丈夫だ」

「嘘つけ。お前が一番ヤバいんだよ。装備もまだ下級なんだから」

「……。ああ、本当の事言っと、ちょっとヤバかったな。まあ、回復薬があるから大丈夫だよ」

ギイは言っと、回復薬を取り出し、ぐび、と飲んだ。

即効性の高い回復薬は、すぐに傷を癒した。

「ギイヤアアアア!!!」

外から、イヤンガルルガの鳴き声が聞こえてきた。かなり怒っているようだ。

「さて、これからどうするかだな。本来は、戦うのが辛くなったら、諦めて帰り、大長老に報告して、討伐隊を編成してもらおうのが普通だがな……」

カナハルが言った。

それに対してラシユーは、

「今下がったら、この後くるハンターたちもヤバくなる。それに、大したモンスターも狩れなかったら、スサノオにますます戦力が増えることになる。それだけは絶対に避けないと」

と、戦うことを提案した。

「ああ、戦おうぜ！」

ギイは言った。

「でも、今の私達で本当に勝てるかな？」

ハルカは言った。

「おいカナハル。今の俺達の勝率は？」

ラシユーがカナハルに聞いた。

「……。良くて四割だ。二頭が一緒のやつを攻撃したら、避けるのはほとんど不可能だからな」

みんながうつむいた。ラシユーを除いて……。

「じゃあ、イヤンガルルガを倒して、その後四人で亜種を相手すると、勝率は？」

ラシューの発言に、三人はびっくりして、顔を上げた。

カナハルはしばらくして言った。

「その場合は、最低でも七割だ」

「じゃ、決まりだな！」

「何だ？」

「俺の考えた作戦だ。」

ラッシューは作戦を言った。

「まず、亜種の気を引き付ける囷おとじを作って気を引き付け、その間にイャンガルルガを倒して、その後四人で亜種を倒すんだ！」

「それじゃ囷は誰がやるんだ？まだ経験が浅いギイとハルカさんは無理だろ？でも、二人じゃイャンガルルガは倒せないと思うが」

「だから、俺一人で亜種を相手する！！」

ラッシューの発言に三人はびっくりした。

「あのな。仮にお前が囷になっても、亜種が俺達を狙ったら、それこそおしまいだ！」

カナハルが反論する。

「大丈夫だ。俺が必ず亜種を引き付ける！」

「でもよー!」

カナハルはなおも反対する。

すると、ギイとハルカは、

「ラシユーさんの言う作戦しかないな。今の状況じゃ、罠を使うしかないな」

「私も、ラシユーさんの作戦に賛成です。でも、必ず成功してくださいね、ラシユーさん」

「ああ、なんたって俺は、このグループのリーダーだからな!」

「誰がリーダーだと決めた?」

カナハルは言った。

「ふ。だがこの作戦が成功したら、ラシユーがリーダーとするか!」

四人は立ち上がった。

「今の勝率は四割。だがこの作戦が成功すれば、一気に七割に上がる。だが、失敗したら確実に敗けだ」

カナハルが言った。

ギイが答えた。

「これ、博打はくちだな」

「ああ、だが、悪い賭けじゃない。さあ、行くか。二頭とスサノオが待っている!!」

「よし、行くぜ!!!!」

ラシューは叫ぶと、四人は浜辺に向かった。

残された希望に賭ける四人。今、賽^{さい}が投げられようとしていた。

第十二話

ラッシューたちが浜辺に出ると、約50メートル前方に、あのイヤンガルルガとイヤンガルルガ亜種が、待ちわびたとばかりに、鳴き声をあげた。

【オマエタチナラ、カナラズモドルト、オモツテイタ】

スサノオの声が、耳からでなく、直接脳に響いた。（正確には、声でなく、テレパシーだが）

【サア、カクゴハデキタナ？】

「ああ、だが、死ぬ覚悟じゃあない。俺達は、こいつらを倒すために戻ってきたんだ！！！」

ラッシューは叫んだ。

【ククク、オモシロイ。ウヌラノ、シンノチカラヲ、ワレニミセヨ】

「言われなくてもなあ！！！！！」

「いくぞ！！！！」

ラシューとカナハルは叫んだ。

ラシューはイヤンガルルガ亜種の罠になるために、亜種に突っ込んだ。

カナハルとハルカとギィは、イヤンガルルガを倒すために、イヤンガルルガを取り囲んだ。

イヤンガルルガ亜種は、突っ込んできたラシユーに向かって、火球を放った。

「おらあ！」

ラシユーは亜種の頭に切りかかった。

見事にヒットしたが、気性の荒いイヤンガルルガの亜種なので、すぐに、『ギイヤアアア！』と鳴き声をあげて、口から煙を出し、キレた。

だが、これがラシユーの作戦だった。

ラシユーはカナハルたち三人の目に入らない所まで走った。

「こいよ！俺を倒してみろよ！」

ラシユーの挑発に乗ったのか、顔を切られたことに怒っているのか、イヤンガルルガ亜種は、ラシユーに向かって突進した。

ものすごい速さだったが、ラシユーは横に飛び、そして太刀『エク
デイシス』で翼に切りかかった。

体勢が整っていないなかったので、弾かれてしまったが、イャンガルル
ガ亜種をさらに怒らせることが出来た。

「おらおら、こっちだー!!」

ラシユーはさらに走り、カナハルたちからずいぶん離れた所までき
た。

イャンガルルガ亜種は、ラシユーしか目に入っていないのか、ラシ
ユーに集中攻撃してきた。

ラシユーはイャンガルルガ亜種の怒濤うらたの攻撃を必死に避けては、
『エクデイシス』できりつけた。

イャンガルルガ亜種の、紅蓮に輝く鱗が、ラシユーの攻撃で剥がさ
れ、飛び散っていく。

イヤンガルルガ亜種の気を引き付ける作戦は、ひとまず成功した。

（後は、三人がイヤンガルルガを倒して、ここに加勢に来るのを待つだけだ。その間、ちゃんと引き付けないとな）

ラシユーは思った。

一方、カナハルとハルカとギイは、イヤンガルルガに攻撃を加えていた。

「おりゃあ！！！」

ギイがイヤンガルルガの足をきりつけた。

だが、大したダメージは与えられず、また、ギイの持つ片手剣『アツパータバルジン』の毒も、耐性をもつイャンガルルガには余り効果は無かった。

だが、イャンガルルガの気を引くことは出来た。

イャンガルルガが尻尾を回転させて、ギイに攻撃してきた。

ギイは、素早く後退して、猛毒が仕込まれている尻尾を避けた。

すると、ハルカが、

「はあああ！！」

と、ボウガン『サンドフォール』で、LV2通常弾を放った。

サンドフォールは、LV2通常弾の速射が可能で、一気に数発の通常弾が発射された。

放たれた通常弾全てが、イャンガルルガの頭や翼にヒットしたが、『サンドフォール』はもともとの攻撃力が低く、致命傷にはならなかった。

すると、イヤンガルルガはハルカに向かって、火球を放った。

速射は反動が凄く、ハルカは動けなかった。

しかし、ハルカに当たらなかった。

ドーン！

火球は、巨大な盾を持つハンターによって止められ、爆発した。

「大丈夫ですか、ハルカさん！！」

「大丈夫です、カナハルさん！！」

ハルカを救ったのはカナハル。

彼の持つ大槍『ブラックテンペスト』は、暑い砂漠を生きる黒ディアブロスの素材でできていて、イヤンガルルガ程度の火球は、持ち主に火傷一つ負わせない。

「今度は俺の番だ!!」

カナハルは、その巨大な槍を構え、イヤンガルルガに突進した。

イヤンガルルガはついにみ攻撃で追い払おうとしたが。

「はあああ!!!!」

ハルカが貫通弾を発射し、それが翼の爪辺りにヒットした。

イヤンガルルガは突然の痛みにおもわず怯んだ。

そうしているうちに、カナハルの突進が、頭に当たった。

「ギイヤアアア!!!!」

イヤンガルルガは、足をばたつかせ、怒った。しかし、カナハルの突進は頭から尻尾まで次々にヒットした。

これに続けとばかりに、ギイが足に切りかかり、ハルカも通常弾を速射した。

次々ヒットし、イヤンガルルガも弱ってきたが、敵も『黒狼鳥』の異名を持つイヤンガルルガだ。

直ぐ様、イヤンガルルガはギイに突進した。

ギイは避けられず、盾でガードする。

ギイは体勢を崩したが、イヤンガルルガも前方に倒れた。

このチャンスにカナハルは尻尾に攻撃した。三回攻撃すると、尻尾が切り離され、イヤンガルルガはその衝撃に、また倒れた。

「はあああ!!」

ハルカはイヤンガルルガに拡散弾を放った。

拡散弾は、イヤンガルルガに当たり、三個の爆弾が飛び散り、イヤンガルルガの回りで爆発した。

「ギイヤアアアア！」

イヤンガルルガは悲鳴に近い鳴き声をあげた。

拡散弾は、相手がどんなに堅くても、その爆発は確実にダメージを与える。

イヤンガルルガは、ハルカに突進した。

しかし、弱っているのか、先程の速さはない。

ハルカは横に飛び、かわした。

「いくぜ！」

カナハルはイヤンガルルガの頭に突きをくらわした。

すると、イヤンガルルガのくちばしに大きな傷ができ、そこからおびただしい量の血が吹き出した。

「ギイヤアアアア!!」

イヤンガルルガは、またキレて、カナハルに火球を放った。

カナハルは盾でガードする。

すると、カナハルの側にしたギイがイヤンガルルガに突っ込んだ。

しかし、イヤンガルルガの火球は、一発ではなかった。

「うわ!!!!」

イヤンガルルガは火球を三発放ったのだ。

その内の一発がギイに当たり、ギイは吹っ飛ばされた。

「ギイ!!!!」

カナハルは言った。

幸いギイの防具のイヤンクックシリーズは火耐性があるので、それほどダメージはないようだが、かなり隙が出来ていた。

イヤンガルルガはそれを逃さず、ギイに突進してきた。

しかし、その刹那、カナハルがギイの前に立ち、イヤンガルルガに突きをくらわした。

グシャア、という鈍い音をたて、『ブラックテンペスト』は、イヤンガルルガの頭にめり込んだ。

「くたばれ〜！！！！！」

カナハルは叫び、『ブラックテンペスト』を斜めに引き抜いた。

凄まじい量の血が溢れ、イヤンガルルガは断末魔をあげることなく絶命し、体が地面に倒れた。

「よし!!!」

カナハルは叫んだ。

「やったな、カナハルさん!!!」

「凄いです、カナハルさん！」

ギイとハルカが祝福の声をあげる。

「いや、まだまだ。まだ亜が残っている。ラシューの加勢に行こう！」

三人はラシューのいる所に急いだ。

第十三話

カナハルたちがイヤンガルルガを討伐する少し前……。

ラシユーはイヤンガルルガ亜種の猛攻にさらされていた。

「ギイヤアアアア!!!!!!」

完全にキレたイヤンガルルガ亜種は、ラシユーに向かって火球を三方向に分けて、放った。

「く……く」

そのあまりにも速すぎる攻撃に、ラシユーは避けることが出来ず、火球に直撃した。

「ぐわ!!」

凄まじい爆音と共に、ラシユーは吹っ飛ばされた。

「くそ！」

ラシューがそう言った次の瞬間、イャンガルルガ亜種はラシューに向かって突進してきた。

紅蓮の鱗を持つイャンガルルガ亜種の突進は、巨大な火の塊のようだ。

「やばー!!」

ラシューは咄嗟に横に飛び、なんとか避けた。

イャンガルルガ亜種は前のめりに倒れた。

「おりゃあー!!」

ラシューは、尻尾に切りかかった。

しかし、業物『エクデイス』でも、イヤングルルガ亜種の固い鱗に阻まれ、ガン、という鈍い音をたて、弾かれてしまった。

(くそ！奴の甲殻の固さは普通じゃねえ！！)

ラシユーはそう思った。

すると、イヤングルルガ亜種が、威嚇した。

通常、モンスターが威嚇行動をとるとき、必ず大きな隙ができる。

イヤングルルガ亜種も例外ではなく、大きな隙ができていた。

ラシユーはその隙を逃さず、イヤングルルガ亜種の頭に切りかかった。

ザシユ！

その切っ先は、イヤングルルガ亜種の頭に大きな傷をつけた。

しかしイヤングルルガは、ラシユーが向かって来るのを知っていたようで、咄嗟に咆哮した。

おそらくイャンガルルガ亜種は、咆哮でラシユーの動きを止め、火球で焼き殺すつもりだっただろう。

だが、ラシユーの方が一枚上手だった。

「くらえ!!!」

ラシユーは縦に切った。

イャンガルルガ亜種の頭は、おびただしい量の血が吹き出していた。

そう、ラシユーの身に付けている防具『リオソウルU』は、咆哮を防ぐ『高級耳栓』というスキルを発動する。

このスキルが、イャンガルルガ亜種の咆哮を防いだのだ。

思わぬ攻撃に、イャンガルルガ亜種は動けなかった。

ラシユーは、このチャンスを逃さなかった。

「気刃斬り!!!」

ラシユーは叫び、切りかかった。

だが、イャンガルルガ亜種は、切られている時、少し後ろに下がり、サマーソルト攻撃をした。

攻撃に夢中だったラシユーは避けられず、吹っ飛ばされた。

「くそ……」

ラシユーは体勢を立て直したが、毒を注入された。

「くそ……」

ラシユーは弱々しく言った。

イャンガルルガ亜種の毒は、普通のイャンガルルガよりも強力らしく、運がないことに解毒薬を持っていていなかったラシユーは、回復薬を飲むが、完全には回復しなかった。

イヤンガルルガ亜種は、ラシユーに向かって火球を放った。

ラシユーは避けようとして、横に飛ぶが、普段より、毒の影響が、力がでず、火球が足に当たった。

「ぐわ！！！！」

ラシユーは吹っ飛ばされた。

するとイヤンガルルガ亜種は、とどめをさすべく、すぐさま火球を放った。

(くそ！こんなところで終わるのか！！)

ラシユーは死を覚悟した。

火球が迫る音が、ラシユーに絶望を与えた。

しかし、ラシユーに火球が当たることはなかった。

突然現れた一人のハンターが、火球を、巨大な盾で防いだのだ。

「へ、死にそうだな、ラシユー！」

巨大な盾を持つハンターが言った。

「全くだぜ、あんたはそんな簡単に諦めるのかよ!!」

片手剣を持つハンターが言った。

「でも、安心してください、ラシユーさん。作戦は成功しました！」

ボウガンを持つハンターが言った。

ラシユーは弱々しく、

「おい、来るのが遅いぜ、みんな・・・」

と言った。

ラシユーの前には、カナハル、ハルカ、ギイの三人が立っていた。

「どうやら毒をくらったようだな。これを飲め。」

カナハルはそう言うと、ラシユーに解毒薬を渡した。

「ああ、悪いな、カナハル」

ラシユーは解毒薬を飲んだ。

すると、すぐにラシユーの顔色が良くなった。

「よし！もう大丈夫だ！っていうことは、お前ら、イヤンガルルガを倒したんだよな？」

「当たり前だ。じゃなきゃ、ここに来るわけないだろ！」

カナハルが答えた。

「ああ、そつだな。よし！反撃といこうか！！！」

「ああ！！！！！」

四人はイヤンガルルガ亜種に戦いを挑んだ。

その結果は、目に見えていた。

いくら攻撃スピードが速いイヤンガルルガ亜種でも、四方から攻撃されては、勝ち目は無かった。

みるみるうちに、イヤンガルルガ亜種の頭や翼や尻尾にダメージを受けて、全身から血が吹き出した。

「くっらえー!!」

ラシューが尻尾に攻撃すると、イヤンガルルガ亜種の尻尾が切り離された。

痛みに耐えるイヤンガルルガ亜種は、もう自分に勝ち目は無いとわかったのか、上空に舞い上がり、その場を去った。

「逃がすか!!」

ラシユーたちは、逃げたイヤンガルルガ亜種を追って、広い洞窟に入った。

数分後、ラシユーたちは、弱々しく立っていたイヤンガルルガ亜種を見つけた。

「もう終わりにするぜ!」

ラシユーはイヤンガルルガ亜種に突っ込んだ。

するとイヤンガルルガ亜種は、最後の力を振り絞ったのか、ものすごいスピードで突進してきた。

しかし、ハルカが咄嗟に貫通弾を放ち、それが頭に当たった。

イヤンガルルガ亜種は怯んだ。その隙に、ラシューが、

「おりゃあ〜!!」

と、イヤンガルルガ亜種の首に切りかかった。

すると、イヤンガルルガ亜種の首が真っ二つに切れ、頭と胴体は切り離された。

イヤンガルルガ亜種は絶命した。

「よっしや〜!」

ラシユーは叫んだ。

「終わったか」

「これでようやく休める……」

「もつくとくただよ」

カナハルとハルカとギイが言った。

【ミゴトダ、ハンタードモ】

不意にスサノオの声が聞こえた。

【フ、ドウヤラ、ホカノハンタードモモ、モウスグ、トウチャクスルヨウダナ。コレデハ、ミツリンノセンリヨクハ、ノゾメナイナ】

「どうだ！！スサノオ！！俺達の力は！！」

【ククク……。イセイガイイナ。ミツリンハ、アキラメヨウ。サラバダ】

そう聞こえると、スサノオの声がなくなった。

「さ、剥ぎとって、今日は帰るか」

「ああ、そうだな、ラシユー。いや、リーダーだな」

「ははははは！！」

四人は笑った。

そして、四人はイヤンガルルガとイヤンガルルガ亜種を剥ぎ取り、密林を後にした。

第十四話

ラシューたちがドンドルマの街に着いたのは、午後4時くらい。

ドンドルマの街は、何やら騒がしかった。

「何かあったのでしょうかね？」

ハルカが言った。

カナハルは、前にいた一人のハンターに声をかけた。

「あの、すみません。何かあったのですか？」

「なんだ、知らないのか？突然ハンターズギルドの隊長が、5時に西の広場に集まってくれ、って言ったんだ。なんでも、重大発表があるらしいぜ」

「重大発表？」

「ああ、詳しいことは大長老が話すらしいぜ」

ハンターが答えた。

「そうですね、ありがとうございます」

カナハルはハンターに礼を言うと、ハンターは「ああ」と言い、どこかに行った。

「でも、重大発表って何だろうな？」

ギイが考えながら言った。

「まあ、悩んでも仕方がない。5時に西の広場に集合だったな。じやあ俺は鍛冶屋に行くな」

ラシユーは言ったが、他の三人も、武器や防具の修理をしなくてはいけないという理由があつて、結局四人とも鍛冶屋に行くことになった。

「やあ、親父さん、元気か？」

ラシユーは挨拶をした。

「おうラシュー！俺は元気にやっているぜ！！」

鍛冶屋の親父は元気そうに言った。

「おう、カナハルも一緒か！！ん？その二人は誰だ？」

鍛冶屋の親父は、ハルカとギイを指差した。

「そういえば、まだ紹介してませんでしたね。彼はギイ。そして、彼女はハルカです。四人でグループを組んで、狩りに行ってます」

カナハルが答えた。

「ギイだ！よろしく！」

「ハルカです。よろしくお願いします」

二人は挨拶した。

「おう、こちらこそよろしくな!!」

鍛冶屋の親父が言って、二人と握手した。

「それはそうと、早速、四人の武器や防具を見てくれるか？」

ラシューが言った。

「おう！任せろ!!」

鍛冶屋の親父は言った。

四人は武器や防具を渡した。

するとギイが、

「なあ。このイャンガルルガの素材で、新しい防具を作ってくれないか？」

と言った。

「あ、それなら私もお願いします。私は武器を作ってください。」

ハルカも言った。

「はいよ。ん？この素材は何だ？」

鍛冶屋の親父は、手渡された素材の中にあつた、紅蓮に輝く鱗を手にとって言った。

「ああそれか。何かこの世界には、赤いイャンガルルガってモンス

ターがいてな、そのモンスターの鱗だよ」

ラシューが答えた。

「ふむ、赤いイヤンガルルガか……。やはりこの世界には俺達の知らないモンスターが結構いるらしい様だな」

「親父さん、何か知ってるのか？」

「まあ、他のハンターから聞いたんだが、砂漠で赤いディアブロスが三体もいたとか、沼地では白いコンガがいたとか、色々聞いたぞ。まあなんにせよ、これから大長老の挨拶があるから、そこで分かるだろうな」

「赤いディアブロス。白いコンガ。ここはすげえな」

ギイが言った。

「さて、お前さんたちの武器や防具は明日渡すな。新しい防具や武器も、明日な」

「ありがとうございます」

ラッシューが代表して言った。

「もうすぐ5時だ。西の広場にそろそろ行けよ、四人とも」

「そっだな、行こうか」

ラッシューは言って、四人は西の広場に向かった。

「へえ〜。結構集まったな〜」

ギイは、西の広場に集まったハンターの数に驚いた。

大半のハンターたちは、ラシューたちのようにフィールドに狩りに行ったので、もう戻ってきたのか、とギイは思ったのだ。

「では、今から大長老の話が始まるから、静かにしろ!」

辺りが騒がしかったので、ハンターズギルドの隊長は、叫びに近い声をあげた。

「お、始まるぞ」

ラッシューが言ったのと同時に、大長老が現れた。

「あゝ。諸君。今日ここに集まってもらったのは、重大な情報が手に入ったからである」

辺りが騒がしくなったが、ハンターズギルドの隊長が、静かにしろ、と言って、また静かになった。

「その情報を話す前に、この世界のフィールドは、我らの記憶になり、この世界にしかないモンスターがいるそうだ。狩りに行くときは、細心の注意をはらって行動してくれ」

「やっぱり、密林だけじゃないんだな」

ラッシューがカナハルに向かって、呟いた。

しかし、カナハルは大長老の話を真剣に聞いていたので、言葉を返さなかった。

大長老はさらに話した。

「さて、先日言った、各フィールドのモンスターの狩りは、中止して、諸君らは塔に向かってほしい」

辺りがまた騒がしくなった。

「静かにしてくれ！時間が余り無いのだ。我らは、塔の頂上で、白く巨大な龍と、スサノオとおもわれる人物を発見した」

「お、おい、マジかよー！」

ギイは叫んだ。

辺りが騒がしくなったが、ハンターズギルドの隊長が叫び、また静かになった。

「おそらく、スサノオはフィールドのモンスターを仲間にするには、塔の頂上で何かをしなくてはならないだろう。よって、諸君らは塔に向かって奴の陰謀を阻止、良ければ倒してくれ！もちろん、奴も何らかの妨害をするだろうから、このあと解散したら、参加は自由だ。塔に向かう者はここに残ってくれ。向かわない者は、この街と、ポツケ村とココット村を守ってくれ。話は以上だ！」

「では、解散とする！塔に向かう者は、ここに残ってくれ！」

辺りが騒がしくなった。

ラシューたちは、会議をした。

「もちろん行くよな！みんな！」

ラシューは言った。

「そうしたいが、武器や防具を修理にだしたから、行くとしても、

「明日だぞ」

カナハルが言った。

「そうだったな。じゃ、明日出発で決まりだな！」

ギイもハルカも賛成した。

その後、大長老の詳しい話があり、ハンターズギルドの隊長は、行くなら複数のグループを組んで行動するように、と言って、解散した。

残ったハンターはおよそ百人。どれも熟練ハンターだ。

「まあおれらは明日出発だし、四人で行こうか」

ラシューの意見に、三人は賛成した。

そして、四人はそれぞれの宿に向かった。

だが、彼らは知らなかった。

ドンドルマの街を飛び、大長老の話を、並外れた聴力で聞いていた、姿を消せる古龍がいたことを……。

第十五話（前書き）

今回は、ラシユータちから離れて、龍王スサノオ側の話をあげました。読みにくい文章ですみません。

ちなみに、最初の塔の説明は、『モンスターハンターポータブル2nd』の、情報誌『狩りに生きる』の、塔のフィールド情報の抜粋です。

第十五話

塔……。

広大な密林に隠された、謎の巨大建築物。
雲を突き抜けてそびえる、遠い時代の遺物。

誰が？

いつ？

何の目的で？

それを建造したのか、一切わかっていない。

その塔の頂上に、白く輝く龍と、龍王がいた。

その時、辺りに羽ばたきの音がした。しかし、姿は見えなかった。

龍王は、その羽ばたきの主が誰かわかっていた。

【キタカ……。ミエザルコリュウヨ。ドンドルマノヨウスハドウ
ダ？】

何かを着地する音がした。しかし、姿は見えない。

“ シラベタトコロ、ハンタータチハ、コチラニムカウヨウデス”

(声ではなく、全てテレパシーで話している)

【ナルホド、ワレノスルコトヲ、ボウガイスルキカ、オモシロイ】

すると、辺りに近づく者が出てきた。

鋼色の甲殻をもつ者、深い青色の甲殻をもつ者、赤色の甲殻をもつ者、白く一本の角をもつ者、そして、何も無い所から紫色の皮をもつ者が現れた。

【ソロツタカ、『コリュウ』シヨクン】

龍王が伝えた。

【コレカラ、ハンターたちガ、ココニクル。シカシ、ワレハスルコトガアリ、タタカエナイ。ソコデ、シヨクンラデ、ハンターたちヲ
タオシテモライタイ】

“ ショウチシタ、ワガオウヨ ”

白く一本の角をもつ者が言った。（正確にはテレパシーだが）

“ ワタシハ、ナツトクデキナイ。なぜ、ソレダケノタメニ、コンナ
ニアツメタノダ？ ”

深い青色の甲殻をもつ者が言った。

【カンタンダ。オオゼイデクルカラ、コチラモ、カズヲソロエタマ
デ。ソレトモ、ヤラレルノガコワイノカ？】

“ キサマ！！！！ ”

赤い甲殻をもつ者が、龍王に威嚇し、歯をカチカチ鳴らした。

“ヨシテクダサイ。リュウオウ、ワタシハナニモ、オソレテナドイ
ナイ。ハンターたちガココニクルナラ、ゼンリヨクデアイテスルダ
ケ”

“ソ、ソウダナ。ソレイガイニ、リュウガナイカラナ”

【ククク……。オマエモイイナ？】

“ハイ、スベテハ、ワガオウノタメニ”

鋼色の甲殻をもつ者が、龍王に軽くお辞儀した。

“マア、ワタシハ、ジユウニヤラシテモラウヨ。ムレルノハ、キラ
イダシ”

紫色の皮をもつ者が言った。

【デハ、ハイチニツイテクレ。モトモト、トウニイタ、ガブラスヤ、ギアノスハ、ジユウニシテクレテカマワン】

龍王が言った。

【コノタタカイデ、オオクノチガ、ナガレルダロウ】

龍王はしばらく考え事をして、そして。

【フッフハハハハ、ハーーーーーハッハッハッハッハ………!!】

龍王は、テレパシーではなく、本当の声で笑った。

その声は、深い絶望を与える様な声だった。

【オモシロイ！！ハンタードモノチデ、コノトウヲ、アカクソメロ
！！！！！！】

龍王は叫ぶと、集まった者たちは、塔の頂上を離れた。

“シカシ、ワレラモ、オチブレタナ。ワレラガ、シハイサレルトハ
ナ”

鋼色の甲殻をもつ者が言った。

“シカタノナイコトダ。アノカタニツイテイケバ、カナラズ、ワレ
ラノセカイガヒロガル。ソシテ、ハンタードモハ、キエルノダ。イ

マハタエロ、フウシヨウリュウ”

白く一本の角をもつ者が言った。

そして数時間後、四人一組のグループが三組、合計12人のハンターが、塔にやってきた。

だが、彼らはこれから、想像を絶する恐怖を味わうことになる。

この邪悪な気に満ちた塔で……。

第十六話

そのハンターは、今の状況が理解出来なかった。

塔に入る前の大きく開いた広場。

この地は、おびただしい量の血で、赤く染まっていた。

30代前半といったところであろう、このハンターは今、その惨劇が起きる前の記憶が走馬灯のように駆け巡った。

この12人のハンターたちの隊長である俺は、皆の先頭に立ち、塔に入る前の大きな広場を、大きな岩の間から覗いた。

見えるのは、三体のガブラス。一応飛竜の仲間だが、ランポス並みの大きさしかない、俺にとっては、ただの雑魚だ。

「前には三体のガブラス。俺が思うに、奴らはスサノオが出した偵察隊だろう。奴らを素早く倒し、塔に入るぞ」

俺は後ろにいた11人のハンターに言った。

「分かりました、隊長」

全てのハンターが俺に言った。

自慢ではないが、俺はかつて、『銀火竜』シルバーソルを一人で倒したことがあった。

その素材で作った、ガンランス『ガンチャリオット』を使い、数々の飛竜や古龍を倒した。その功績が認められ、この12人のハンターたちの総隊長に抜擢されたのだ。

他のハンターは、俺に絶対の信頼を持っている。

「隊長、まずは俺のグループがいきます」

一人のハンターが言った。

彼は、俺を含めて三人いる隊長の一人で（四人一組のグループが三組いるので、俺が総隊長、彼は二番目のグループの隊長だ）、俺も彼を信頼していた。

「よし、頼む」

「はい」

彼は一言言い、彼のグループの三人を引き連れて、行った。

彼らは、ガブラスたち突っ込んだ。そして、あっという間に三体を討伐した。

「よし、俺らも行くぞ」

俺がそう言った瞬間、ガブラスを討伐した四人のハンターの上から、何やら滑空してくる者が見えた。

その瞬間、俺は誤解していたと解った。

あのガブラスは偵察隊ではない。注意を引く、ただのおとり囮だ……。

彼らは、上から滑空してきた龍の、その強力な爪の餌食になり、断末魔をあげることなく、絶命したと俺は解った。

それと同時に、その龍の姿がはっきり見えた。

鱗、甲殻、翼、尻尾、顔、全てが鋼色をした龍だ。

その龍は、一体ではなく、合計四体いた。

「クシャルダオラか！しかも四体もいるのか！こんなこと初めてだ！」

「隊長、戦いましょう！！！」

一人のハンターが言った。

確かに、クシャルダオラが四体いるが、こちらはまだ八人いる。勝率はけっして低くない。

だが俺は、それとは別の、嫌な予感がした。

「いや、ここは逃げるぞ。ここにくる全てのハンターに伝えないといけないことがある！！今は退くぞ！！！」

そう言い、俺は塔とは逆方向に走った。しかし。

“ワルイガ、キミラニ、ニゲルトイウセンタクシハナイ”

不意にテレパシーみたいなものが聞こえ、前方に、白く一本の角をもつ者が四体も現れた。

「キ、キリン……」

一人のハンターが言った。

“ワガオウカラ、ココニキタモノスベテ、コロスヨウニ、ツイワレ
タノデナ”

キリンと思われる者が言った。

そして、俺を含めた八人は、この絶望的な戦いを始めることになった。

クシャルダオラと思われる者が言った。

“サテ、ココマデダ。キサマラノアユミハ、ココデ、エイエンニトマル”

その戦いの結果がこれだ。

俺らは、クシャルダオラとキリンを一体ずつ倒したが、こちらは、俺を残して全滅。皆、死んだ・・・。

“キサマガ、コノグループノタイチヨウカ？”

クシャルダオラが言った。

「だとすれば、どうする？こいつらより、もっと残酷に殺すのか？」

俺は、恐怖に耐えながら言った。

俺の武器、ガンランス『ガンチャリオット』は、無惨にも破壊され、その部品が転がっていた。

“アア、クロス。ダガ、ハナシガシタカッタダケダ”

「話？」

“アト、ドレホドノ、ハンターガ、ココニクル？”

「さあな。だが、必ず俺らのかわりに、おまえらを倒し、スサノオも倒して、元の世界に戻るだろうな！！！！」

“ナルホド。デハ、シネ、ハンターヨ”

クシャルダオラが言った、その時。

“マテ、フウシヨウリュウ。コノモノノナマエヲキコウジャナイカ。
ココマデタタカッタ、ソノ、ケイイヲタタエヨウ”

キリンが言った。

“アイカワラズ、アマイナ。スキニシロ”

“ソノモノ、ナマエハ？”

キリンが俺に問いかけた。

「……。カルマ。カルマ・アシユラムだ！」

“カルマ、カ。ソノナマエ、オボエテオク。アンシンシテ、ネムレ”

キリンは言つと、白く輝く一本の角に、雷撃のエネルギーを溜めた。

その間、俺はある一人のハンターのことを考えていた。

（そういえば、ギイ、ていつたかな。

あいつ、大丈夫かな。ドンドルマの広場であいつを見たときは驚いたが、あいつには仲間がいた。今までさけてたから、俺のことなんか、忘れてるかな。あいつをこの塔に行かせたくなかったな。あいつは、近い将来、凄腕のハンターになると思ったからな。あの、この世界に来る前の世界で、あいつを助けた時から……）

キリンが動き出した。

“デハ、ネムレ”

(悪いな、ギイ。俺、先に逝くな)

そのさきの記憶はない。

数時間後、今度は六組、24人のハンターが塔に来た。

だが、あの惨劇の広場の前の大きな橋で、身の毛もよだつ物を見てしまった。

12個の体から外された頭と、カルマ、と鎧に書かれた、心臓の辺りがぽっかり空いた一つの体を・・・。

第十七話

塔の惨劇の翌日。

午前9時。

ラシューは、カナハル、ハルカ、ギイと合流し、鍛冶屋に向かっていた。

「さて、俺の新しい防具は出来てるかな？」

ギイは、わくわくした様子で言った。

「心配ないよ。親父さんは、武器や防具での約束は、絶対守る人なんだ」

カナハルは言うつと、ギイはますます興奮して、

「早く新しい防具、見たいな」

と言った。

すると、その時。

「よお、ラシユー。お、皆揃ってるな！」

「親父さん！どうしたんですか？」

まだ鍛冶屋まで距離があるのに、鍛冶屋の親父を見つけたので、ラシユーはびっくりして言った。

「大長老が呼んでいる。西の広場に向かえ。話があるらしい。早く向かえ！」

「？。わ、分かりました」

カナハルは言うと、未だに疑問に思っているラシユーたちを引き連れ、西の広場に向かった。

広場に着くと、既にハンターたちが60人ほどいた。

（何か起きたのかな？）

ラシユーはそう思った時、大長老の声が聞こえた。

「朝早くすまない。緊急事態だ。諸君らの塔の攻撃計画は、中止だ
！」

大長老の突然の計画中止に、そこにいた全てのハンターは驚きの声をあげた。

「どうしてですか……！」

ラッシューは叫んだ。

「正直に話そう。昨日塔に向かった、総隊長カルマ率いる12人のグループの戦死が確認された」

「カルマ？どっかで聞いたな」

ラッシューは言いつと、ギイが震えていた。

「どっした、ギイ？」

「カルマさんが、死んだ？」

「知り合いなのか？」

カナハルは言った。

「ああ。前の世界で、密林で倒れてた俺を助けてくれたんだ」

「本当か、ギィ。あのカルマさんに会ったのか？今思い出したんだが、カルマさんはココット村の英雄みたいな人だ。ドンドルマでも有名人だぞ」

ラシューは言うと、ギィは

「そんな凄い人なんだ」と、感心したように言った。

「でも、そんな凄い人が、殺られたなんて・・・」

ハルカは言った。

大長老は話を続けていた。

「知つての通り、カルマは超一流のハンターだ。それが殺されたことは、今、塔には強力なモンスターがいるということになる」

辺りがざわめく。

「話はこれだけではない。次に24人のハンターが塔に向かったが、ここに伝令にきたハンター以外の生死は不明だ。おそらく、最悪な結果になっただろう。これ以上犠牲者を出したくない。よって、作戦は中止だ」

大長老は言つと、辺りを静寂が支配した。

すると、ラッシューが、

「でも、何もしなかったら、それこそ奴の思いつきだよ」

と、大長老に言った。

「しかし、今行ったら、二度と戻ってこれないかもしれないぞ！
！そんな状況で行かせることは出来ない」

「ハンターは、覚悟がないと、つとまらないんです。死ぬ覚悟はできています。行かせてください！！」

「しかしじゃな・・・」

大長老がためらっていた、その時。

“ ナンダ、ハナシアイツユウカ、ハンタードモ ”

不意にテレパシーみたいなものが聞こえた。

そこにいた全てのハンターはびっくりして、辺りを見渡したが、姿

は見当たらない。

“サガシテモムダダ。オレノスガタハミエンヨ。オレハ、オオナズチ！”

「オオナズチって、何？」

ハルカは言った。

「オオナズチは、別名『霞龍』っていわれる古龍だ。姿を自在に消せる、厄介な龍だ」

ラシューが答えた。

“アンシンシロ。タタカイニキタンジャナイ。オレハ、ワガオウノメッセージヨツタエニキタダケダ”

「メッセーじじゃと?」

大長老が言った。

“ワガオウハ、コレカラ、ギシキヲスル。シカシ、コレハ、ジカンガカル。ソコデ、コレカラ、ゲームヲシヨウ”

「ゲームじゃと?」

“ギシキガカンリヨウスルマエニ、ヒトリデモ、トウノチヨウジヨウニキタラ、オマエタチノ、カチ。ギシキハ、アキラメル”

ハンターたちは、一言も喋らず、オオナズチのメッセーじを聞いていた。

“ダガ、カンリヨウシタラ、スグニ、オマエタチノ、マチヲオソウ。サア、タノシモウカ。コレガ、ワガオウカラノ、メッセーじダ”

「くそ！どう考えてもあいつに有利じゃないか！！」

「ああ、勝率は、限りなくゼロに近い」

ラシューとカナハルは言った。

「オオナズチ。悪いが、そのゲームは参加できない」

大長老は言った。

“ ナンダヨ、シカタナイナ。イマノ、トウニイル、カズヲオシエテ
ヤルヨ”

辺りがざわめいた。

“イマノトウニハ、オレヲハジメトスル、サマザマナコリュウガイ
ルガ、キノウノタタカイデ、フウシヨウリュウ、ゲンジユウノブタ
イノカズガ、スクナクナツタカラ、キョウハ、タタカワナイソウダ。
イマノカズハ、ジユウグライダー”

「こつちは60くらい。塔には10の古龍。勝率はあるな。別に、
全て倒さなくてもいいんだし。塔の頂上に着けばいいんだから」

ラシユーは言った。

他のハンターも、

「勝てるぞ!!」とか、

「やる価値はあるな!」とか言い、辺りが活気に満ちた。

「大長老。私も彼らと同じです。是非、出撃の許可を」

大長老のそばにいたハンターズギルドの隊長が言った。

「うむ。ならば、懸けてみるか。街や村は、他のハンターで守るとするか」

大長老は、小さく言った。そして、

「諸君！死ぬかもしれない、この戦いに参加したいか！！」

と言った。

全てのハンターは、

「おお　　！！！！！！」

と言い、張りきっていた。

「ならば、わしはもう、何も言わん。存分に戦うがよい！！！！！！」

「よっしょ〜！〜！〜！す〜く〜い〜じ〜ぜ〜！〜！」

ラシューが言った。

「その前に、鍛冶屋に行つて、武器や防具をもらつぞ」

カナハルは言った。すると、四人は、笑い声をあげた。

（へ、イキガリヤガツテ。コレカラアジワウ、ゼツボウモシラナイ
カラ、シカタガナイカ。サテ、オレモ、モドルカ）

そう思い、オオナズチは姿を消したまま、塔に向かっていった。

第十八話

決戦に向けて、ラシユーたちは、鍛冶屋に向かった。

ラシユーとカナハルは、修理に出した武器や防具を取りに、ハルカとギイは、新しい武器や防具を取りに行くのだ。

「けど、新しい防具か。何が出来るかな？」

ギイがわくわくした様子で言った。

「緊張感を持って、ギイ。これから戦いがあるんだぞ」

カナハルが言うと、ラシユーは、

「けど、新しい防具をもらう時って、やっぱり、わくわくするよな。前にカナハルが今の武器の『ブラックテンペスト』をもらった時なんか、こいつの性格じゃ考えられないほど、狂喜乱舞したからな」

と、昔話をした。

「へえ」。カナハルさんも、そんな性格があるんだ」

ギイが言った。

カナハルは、慌てて、

「しょうがないだろ！あれは、本当に苦勞して素材を手に入れたんだ。そういうラシユーだって、『エクデイス』を手にした時は、白昼堂々と大声を出したじゃないか！！！」
と、恥ずかしそうに言った。

「でも、それはラシユーさんの性格のまんまですよ」

ハルカは言った。

「ま、そういうことだ、カナハル。こういう時に、日頃の行動が評価されんだよ」

「ラシユー、貴様にだけは言われたくない！！」

カナハルは性格に似合わず、ラシユーを捕まえようとしたが、ラシユーは捕まる前に、後ろに飛んで避けた。

「捕まるかよ。じゃあ、鍛冶屋まで逃げ切れたら、捕まえるのは、諦めてもらっせー!」

ラシユーはそう言うと、鍛冶屋の方向に走り出した。

「待て、ラシユー!! 今日という今日は、もう我慢できん!!」

カナハルはついに怒り、ラシユーを追いかけた。

「ははは。元気だな、お二人さん。緊張感を持って、とか言ったカナハルさんが、あんな怒るなんてな」

ギイが、笑いながら言った。

「そんなこと言ってないで、早く追いかけてみましょう」

ハルカは言うと、ギイは

「ああ」と言い、二人は走り出した。

「へ、カナハル。おまえ、鈍のろくなったか」

ラシューは、鍛冶屋の前に立ち、後ろにいたカナハルに言った。

おいかけっこの結果は、ラシューの勝利に終わった。

「はあ、はあ……。お前が速いだけだ。なんだよ、さらに速くな
ってんじゃないか」

カナハルは、肩で息をしながら言った。

「まあまあ。オーイ、親父さん！」

ラシユーは言いつと、鍛冶屋の奥から、誰かが出てきた。

「おう、ラシユー！どうするんだ、これから？」

「もちろん、塔に行く！！！」

「そう思ったぜ。ほらよ、昨日頼まれたものだ」

鍛冶屋の親父は、業物『エクディシス』と、大槍『ブラックテンペスト』を持ってきた。

「お、すげえな。さらに磨きがかかってるぜ」

「うん。さすがですね」

ラシューとカナハルは、修理の代金を支払い、武器をもらった。

「さて、防具も持って来るか」

鍛冶屋の親父が言った時。

「はあ、はあ。やっと着いた」

と、後ろからギイの声がした。ラシューとカナハルが振り返ると、ギイとハルカは、見るからに疲労困憊といった様子で立っていた。

「はあ、はあ。全くですよ。まだ私たち、この街はあまり知らないから、見失わないように全力で走ったんですよ」

「ああ。悪い」

ラシューは言った。

「お、ハルカちゃんにギイ君か。二人の頼んだものも、出来てるよ」

鍛冶屋の親父が言うと、ギイとハルカは、さっきの疲れはどこにいったのか、鍛冶屋の前にダッシュした。

「本当ですか！早く見せて下さい！！」

「親父さん！早く！！」

ハルカとギイは、興奮しながら言った。

「はいはい。ちょっと待ってな」

鍛冶屋の親父は言うと、鍛冶屋の奥に入っていった。

そして、数分後。

「ほら、ハルカちゃん。新しいボウガンだ」

鍛冶屋の親父は、ハルカの前に、紫色と赤色の、見るからにイヤンガルルガと分かる形をしたボウガンを置いた。

「何ですか、これ？」

「『ド【鳥】』だ。普通は紫色だけだが、赤いイヤンガルルガの素材も使ったから、性能は未知数だな。多分、世界に一つだけのボウガンだと思うぜ」

「私だけのボウガンか……。ありがとうございます！！」

ハルカは、元気良く言った。

「なあ、親父さん。俺のは？」

ギイが言った。

「おう、ちょっと待ってな。何しろ、頭、胴、腕、腰、脚、全ての防具が出来たからな」

「当然だよ。俺とカナハルのぶんまで、渡したんだから」

ラシユーは言った。

「まあまあ、ラシユー。俺たちは、今の武器や防具で十分じゃないか」

「まあ、そうだけどな・・・」

「ほらよ、持ってきたぜ」

鍛冶屋の親父は、ギイの前に、これも、紫色と赤色の防具を置いた。

「剣士専用の『ガルルガ』シリーズ全部だ。ありがたく思えよ。普通は数日かかるところを、1日で作ったんだからな」

「ありがとうございます!!!。さすが、ドンドルマーの鍛冶職人!!!」

「へ、口が上手いな。お題はただにしてやる。未知の素材を扱えて、俺は機嫌がいいんだ。もちろん、ハルカちゃんのぶんも、ただにするよ」

「ありがとうございます!!!」

ギイとカナハルは、元気良く言った。

「おい、親父さん。俺たちは？」

ラシューは言った。

「お前たちは駄目だ。修理だけだからな」

「そんな〜！」

「おつとを忘れるところだったぜ。お前たちね防具がまだあったな」

鍛冶屋の親父はまた奥に入って、数分後に、ラシューの『リオソウル』シリーズ。カナハルの『クシャナス』シリーズを持ってきた。

「いや〜カナハル。お前が本当にクシャナスシリーズを揃えるとは、本当に驚いたぜ」

「ありがとうございます。凄い大変でしたよ。クシャルダオラの目

撃情報があつたら、すぐにラシューと一緒に、かつ飛ばして討伐に向かったんですから」

「こっちとしては、いい迷惑だったぜ。連れまわされるこっちの身になれってんだよ」

ラシューは、ため口を言った。

「まあまあ。お前だって、クシャルダオラの素材で、エクディシスが作れたんだから」

「まあ……。それはそうだけど」

「はいはい。お二人さん。早く防具を受けとれ」

鍛冶屋の親父が言うと、ラシューとカナハルは、すぐに防具を受け取った。

「よし！準備をしたら、西の広場に集合だったな。じゃ、解散だ」

ラシューが言った。

「ああ！！」

カナハルが言うと、四人は、別々の道を歩きだした。

しばらくして、西の広場に、続々とハンターが集まってきた。皆、緊張した面持ちだ。

同じ頃、塔の頂上では、龍王と、様々な古龍がいた。

【ナルホド、ヤツラハ、ココニクルノカ。シカシ、イマノワレラノ
センリヨクノジヨウホウヲ、オシエルノハ、ヨクナイナ、オオナズ
チ】

“ ダツテ、コウデモシナカッタラ、アイツラ、コナイトオモッタカ
ラデスヨ ”

オオナズチが言い訳すると、赤い古龍が、激怒して、

“ キサマ……。ココデ、ヤキコロサレタイカ！！！！ ”

と、言った。（正確にはテレパシーだが）

【ヨセ、エンオウリユウ。ウヌラハ、ヒキツヅキ、ハンターノ、ゲキタイヲシテモラウ。ケツシテ、ココニ、チカツカセルナ】

“ ショウチシマシタ、ワガオウヨ ”

青い古龍が言うと、他の古龍が、それぞれ飛び立った。

【ククク。ハンタードモヨ。コノゲーム、タノシンデクレヨ。ククク・・・】

龍王は、不気味な声をあげた。

そして、戦いが始まる。

第十九話

ラシューたち、60人ほどのハンターたちは、塔に向かっていった。

塔に向かうには、密林の深くまで入らないといけない。

ラシューたち。いや、そこにいた全てのハンターは、疑問を感じていた。それは、塔に向かう道のりの中で感じた。

モンスターがいない……。

密林によくいる、イヤクックや、ババコング、さらにはランポスも、一体もない。

この異様な雰囲気が、ハンターたちを、さらに不安にさせるのだ。

しかし、ハンターたちはその理由をおのずと理解できた。

龍王の仕業だ、と……。

「なあ、カナハル。塔にいるモンスターって、何だと思う？」

ラッシューが聞いた。

「まあ、オオナズチは絶対いるな。それと、風翔龍と幻獣を除く様々な古龍と言ってたから、考えられるのは、炎妃龍『ナナ・テスカトリ』と、炎王龍『テオ・テスカトル』だな」

「何ですか？その炎なんとかって？」

ハルカが尋ねた。

「炎妃龍『ナナ・テスカトリ』と炎王龍『テオ・テスカトル』は、炎を操る古龍だ。近づくだけで、その体から発生する熱でダメージをうけるんだ。俺とカナハルは一回、ドンドルマを襲ったテオ・テスカトルと戦ったことがあるけど、尋常じゃない強さだったよ」

ラッシューが言った。

「そんなに強い古龍が10体近くもいるのかよ」

ギイがたまらず言った。

「でも、こっちは60人近くもいる。勝率は決して低くはない。もちろん、高くもないけどな」

カナハルが言った。

「そういえば、ラッシュー。お前の父様は、今どこにいるんだ？」

カナハルが尋ねた。

「親父か？さあな、しばらく見てないからな。」

「ラシユーの父さんって、ハンターなのか？」

ギイが尋ねた。

「そうだけ。しかも、ただのハンターじゃない。ギイ、お前『劍聖』
って聞いたことないか？」

カナハルがギイに聞いた。

「劍聖？たしか、ドンドルマ出身の凄腕劍士だっけ。名前はたしか、
ライレルだったっけ」

「もしかして、ライレルさんは、ラシユーさんの、父親なんですか

？」

ハルカが尋ねた。

「そうなんだよ。ラシューは、父様に憧れて、ハンターになったんだよな」

カナハルが言った。

「まあ、親父は俺の目標だけど・・・」

と、ラシューが言っていると、

「塔が見えてきたぞ」

と、この60近くのハンターの総隊長に任命されたハンターが言った。

ラシューたちは前方を見た。

生い茂る木々の向こう側に、忽然と姿を現した、天にそびえる、長い建物。

これこそ、戦いの舞台、古塔である。

「遂にきたか」

ラシューは呟いた。

しばらく歩いて、ラシユールたちは、塔の前に架かる、石でできているであろう、古びた橋の前に着いた。

「いいか、ここからは、いつ襲われるかわからん、戦場だ。気を引き締める」

総隊長は言つと、橋を渡り始めた。

他のハンターたちも続々と、橋を渡り始めた。

やがて、塔に入る前の、大きな広場に着いた。

その時、辺りに、

バサツバサツ

と、大きな羽音が聞こえた。

「きたぜ、敵さんが」

カナハルが言った。

前方の上には、全身が赤い龍が羽ばたいていた。

“キタカ、ハンタードモ。サア、タタカオウカ”

「その前に、いくつか質問に答えろ」

総隊長が、勇敢にも言った。

“ソシナコトニ、ワザワザコタエル、リュウガナイ”

すると、また羽音が聞こえた。

“イイジヤナイデスカ。エンオウリュウ”

と聞こえると、上から、全身が青い龍が現れた。

「ナナ・テスカトリに、テオ・テスカトルか」

ラシューが言った。

「赤い方がテオ・テスカトル。青い方がナナ・テスカトリだよ」

カナハルが付け加えた。

“サテ、ソチラノハンターヨ。タズネタイココトハ？”

ナナ・テスカトリがテレパシーで、そこにいた全てのハンターに伝えた。

「まず、なぜこの世界にきてから、お前たちの言葉が分かるようになったんだ？」

総隊長が尋ねた。

“カンタンダ。コノセカイハ、ワレラノチカラヲ、マエノセカイヨリモ、ヒキダスコトガデキルカラダ。ソノチカラヲ、テレパシーステ、キサマラニツタエルコトナド、カンタンナコトダ”

テオ・テスカトルが言った。

（そっか。道理で、密林で戦ったイヤンクツクやイヤンガルルガが、あんなにもしぶとくなったり、強くなってたんだ）

ラシユーはテオ・テスカトルの言葉を聞いて、考え事をした。

「なるほど。では、我らが来る前にこの塔に来た、ハンターたちはどうした」

総隊長がまた尋ねた。

“カレラハ、フウシヨウリユウタチニヨツテ、シニマシタヨ。クルシマズニ・・・”

と、鳴き声をあげた。

しばらくして、羽音がした。

上空から、ナナ・テスカトリとテオ・テスカトルが三頭ずつ現れた。

「合計8体か。散らばる必要があるな。皆、広がれ!!」

総隊長が言うと、ハンターたちは、左右に広がった。

塔の前の広場は、塔を中心として、円のように広がっているので、密集して戦わないで済む。

“サテ、ハジメルカ”

テオ・テスカトルは、歯をカチカチ鳴らした。

「いくぞー！！！！！！」

総隊長の声で、ナナ・テスカトリとテオ・テスカトルは、それぞれ標的となるハンターを決めると、その者に向かって飛んでいった。

遂に、この世界の支配権を懸けた戦いが始まった。

第二十話

塔の周りでは、古龍とハンターの激闘が始まっていた。

大体は、四人一組のグループが二つ、合計八人が、一体の古龍を相手する形になった。

「さあて、俺らはどれを相手するかな？」

ラシユーは、周りで戦っているハンターたちから離れた所に移動しながら言った。

「どうやら、俺たちは余り物らしいな。周りでは死闘が行われているのにな」

カナハルが言った。

すると。

“ ナンダ。ココハ、ヨニンカ”

ラシューたちが振り返ると、赤い龍がラシューたちの前方に立っていた。

「テオ・テスカトルか。こいつは、手強そうだな」

ラシューが言った。

“ モハヤ、コトバハイランナ。サア、タタカオウカ！！”

テオ・テスカトルは言うつと、体から炎の鎧の様な熱気を出した。

「やあ、いくぜー……！」

ラシューは業物『エクディシス』を抜刀し、剣を構えた。

「勝つしかないな」

カナハルは言うと、大槍『ブラックテンペスト』を構えた。

同時に、ハルカは新しいボウガン、『ド【烏】』の銃口をテオ・テスカトルに向け、新しい防具『ガルルガ』シリーズに身を包んだギイも、毒の片手剣『アップパータバルジン』を手にとり、構えた。

最初に動いたのは、テオ・テスカトルだ。

ラシュー目掛けて、突進してきた。

「やあ！」と、ハルカは散弾を放った。

見事、頭に命中したが、それに構わず、テオ・テスカトルはラシューに突進した。

ラシューは、突進を避けようと横に飛ぶ。

しかし。

「く!!」

ラシューはギリギリでかわしたが、足にテオ・テスカトルに纏う焔が当たり、火傷をおってしまった。

苦痛の表情を浮かべるラシューに、テオ・テスカトルが近づき、口

に炎を溜め始めた。

ハルカはそれを防ごうと、テオ・テスカトルに向かって散弾を放った。

しかし。

ガキイーン!!!

と、テオ・テスカトルの翼に当たる直前に、何かに弾かれる音がし、弾は下に落ちた。

227

「嘘!!!」

ハルカは驚きの表情を浮かべる。

その間にも、テオ・テスカトルは、ラシューに向かって炎のブレスを吐こうとしていた。

「やばー!」

ラシューは動こうとするが、火傷した足が思いつきに動かない。そうしてるうちに、テオ・テスカトルは炎のブレスを吐いた。

しかし、

「ラシューー!」

と、カナハルがラシューの前に立ち、巨大な盾で炎のブレスを受け止めようと、盾を構えた。

「ぐううう!」

テオ・テスカトルの炎のブレスは、至近距離ということもあって、砂漠を生きる黒いディアブロスから作られた盾でも、その熱を完全

に防ぐことはできず、カナハル自身にもダメージを与えた。

しかし、ラシユーを守ることはできた。

「すまん、カナハル!!!」

ラシユーは言うど、回復薬を飲みながら、走った。

“ニガサン!!!”

テオ・テスカトルは、ラシユーをしつこく狙い、ラシユーに飛び掛かるうとした。

「くられ!!!」

テオ・テスカトルがカナハルを飛び越えようとした、その刹那、カナハルが大槍を上突きだし、テオ・テスカトルの腹部に当たった。

飛び掛かりの速さも重なって、大槍は、腹部を切り裂きながら外れた。

“グウウウ・・・”

テオ・テスカトルの腹からは、おびたたい量の血が吹き出した。

「うおりゃー!!」

ラシューは叫び、テオ・テスカトルの頭に切りかかった。

“グオ!”

と、テオ・テスカトルは横に倒れた。

「今だ!!!」

カナハルは言うど、火傷で痛む手に鞭をうって、テオ・テスカトルに突進した。

カナハルの突進と同時に、ギイも『アツパータバルジン』でテオ・テスカトルの足に連続攻撃し、毒を注入する。

そして遠くから、ハルカは三人に当たらないように、通常弾を翼に当てる。

だが、その連続攻撃も、テオ・テスカトルが起き上がった時に終わりを告げた。

グオオオオー！！！！

と、テオ・テスカトルが怒りの雄叫びをあげた。

その咆哮に、カナハルたちは耳をふさぐ。

しかし、『リオソウルU』シリーズを身につけ、高級耳栓をつけているラシューと、新しい防具『ガルルガ』シリーズを身につけ、耳栓をつけているギイは動けた。

その咆哮の間に、引き続き攻撃を加える。

しかし、テオ・テスカトルが上げていた前足を地面につけると同時に、古龍が起こす特殊な風圧『龍風圧』によって、四人は吹き飛ばされた。

“キサマラ!!!”

テオ・テスカトルは体に焰を纏い、激昂した様子で、ラシューたちに怒りの声を伝える。

ギイの武器の毒は効いておらず、連続攻撃も大したダメージを与えられなかったようだ。

「くそ！やっぱりこの世界のモンスターは強さが増している……！」

ラシューは言う。その刹那、テオ・テスカトルは辺りに粉塵を撒いた。

「粉塵爆発だ……離れる……！」

ラシューは叫ぶと、テオ・テスカトルから離れた。

他の三人も、急いで離れた。

だが、ラシューは知らなかった。

攻撃を加えている時に、テオ・テスカトルは密かにラシューに鱗粉をつけていたことを。

“ハゼロ”

テオ・テスカトルは牙を、カチン、と打ち付けた。

と同時に、辺りで爆発が起こった。

そして、その爆発に反応して、ラシユーについた鱗粉も爆発した。

「ぐわー!!!」

超至近距離で受けた粉塵爆発に、ラシユーは吹き飛ばされ、しばらく転がり、やがて横たわった。

「ラシユーー!!!」

カナハルが悲痛の声をあげる。

しかし、ラシユーは動かなかった。

“ マズハヒトリ・・・ ”

その光景を見たテオ・テスカトルは、ニヤリと笑った様な表情を浮かべた。

それは、ラシユーを仕留めた、と確信させる様な表情だった・・・。

第二十一話

(あれ……？俺、どうなったんだ？)

ラシューは、テオ・テスカトルが起こした爆発を食らい、吹き飛ばされながらも、意識を保っていた。

ただ、ショック状態だった。

「ラシュー！！！」

遠くからカナハルの声が聞こえた。

(へ……。心配すんな、カナハル。すぐいくぜ)

ラシューは言葉を発しようとした。しかし、口が動かない。

(あれ？口が。あれ？体も動かないや……。指一本動かせないや、参ったな……。)

ラシューは、意識を失わないように耐えるので精一杯だった。

（頼むよ。動け……。動け、俺の体！！）

しかし、そんなラシューの願いとは裏腹に、指一本動かなかった。。。

三人となったカナハル、ハルカ、ギイは、テオ・テスカトルの猛攻にさらされていた。

“フハハハハハ。ノコリハ、ザコノヨウダナ”

テオ・テスカトルは、ギイに飛び掛かった。

ギイは、咄嗟に盾でガードする。

だが……。

「ぐ……!!」

テオ・テスカトルの突進の衝撃は凄まじく、体が宙に浮き、2メートルほど吹き飛ばされた。

突進後のテオ・テスカトルに、ハルカは散弾を撃ち込む。しかし。

ガキイン!!!!!!

と、やはりテオ・テスカトルに当たる寸前で、鈍い音がして、弾かれた。

「そんな！何が効くの！？」

ハルカは動揺した。

その隙をついて、テオ・テスカトルはハルカに飛び掛かった。

「！！！！！！」

ハルカの足は、動かなかった。

ガーーーーーン！！！！！！

と、鈍い音がした。

次の瞬間にハルカが見た光景は、テオ・テスカトルがカナハルの盾に噛みついていてる光景だった。

「ぐっぐっぐっ……」

しかし、カナハルとテオ・テスカトルの力比べは、当然、テオ・テスカトルが強く、カナハルの体が後ろに下がる。

「ハルカさん！早く逃げて！！」

その声で、ハルカは正気に戻り、後ろに走った。

“フタリメカ”

テオ・テスカトルは、噛みついていてる口から、メラメラと炎を溜めた。

「やば……」

カナハルは、死を覚悟した。

しかし。

ドス！！！！

と、何かに突き刺さる音がした。

“グオオオオ！！！！”

テオ・テスカトルは、苦痛の表情を浮かべた。

カナハルが前を見ると、テオ・テスカトルの脇腹辺りに、桜色の大剣が突き刺さっていた。

「これは、一体？」

カナハルが突然の出来事に混乱した。

「どうやら、間に合った様だな」

不意に横から声が聞こえた。

カナハルが声の方向を見ると、全身を深い青色の防具に身を包んだハンターが、凜々しく立っていた。

カナハルは、そのハンターが誰なのか、知っていた。

「総隊長！！！」

カナハルが驚きの声をあげた。

“クソ。クソ！！”

テオ・テスカトルは、外れた後に吹き出した大量の血と共にきた激痛に、苦痛の表情を浮かべたが、その眼は怒りに満ちていた。

「どうやら、あのテオ・テスカトルは、弱っている様だね。後は私に任せなさい」

と総隊長は言いつと、大剣を拾い、構えた。

テオ・テスカトルは、総隊長の方を向いた。

「私の名は、レギンレイヴ。君に最後を与える者の名だ」

総隊長は言いつと、ゆっくりとテオ・テスカトルの方に歩み出した。

“ シヌノハ、キサマノホウダ！！！！ ”

と、テオ・テスカトルは総隊長に向かって飛び掛かった。

総隊長とテオ・テスカトルの距離が僅かになった、その刹那。

ガキイン！！！！

と、何かを断ち切る様な音がした。

“ グワーーーー！！！！ ”

しばらくして、テオ・テスカトルは倒れた。

カナハルには全て見えていた。

あの一瞬の間に、テオ・テスカトルの攻撃を避け、大剣を凄まじいスピードで横になぎ払い、テオ・テスカトルの象徴的な二本の角を切断したのだ。

事実、倒れたテオ・テスカトルの角は、無惨にも切断されており、辺りを転がっていた。

「凄い……」

その光景を見ていた、カナハル、ハルカ、そして遠くから見ていたギイは、揃って呟いた。

総隊長はテオ・テスカトルに追撃し、テオ・テスカトルの翼がぼろぼろになり、あちこちで出血した。

“クソ！！”

テオ・テスカトルは起き上がり、後ろに大きくジャンプした。

“オノレ……。ハンターフゼイガ、コノセカイデ、ワレニカツダト？”

テオ・テスカトルは、全身からおびたたい量の血を流しながら、敗北を予感した。

しかし、炎国の皇帝の異名を持つテオ・テスカトルは、直ぐ様払拭し、

“ミトメン。ミトメンゾ！！キサマラハ、ココデ、シヌノダ！！！！”

そう言うのと、テオ・テスカトルは、全身からものすごい量の粉塵を巻き上げた。

「粉塵爆発です！逃げて下さい、総隊長！！」

カナハルが叫ぶ。

“モウオソイ！！ハゼロ！！”

テオ・テスカトルは牙を、カチン、打ち付けた。

と同時に、

ドドドドドーーーーン！！！！！！

と、テオ・テスカトルの周り、約半径5メートルで、凄まじい爆発が起こった。

「総隊長ーーーー！！！！」

カナハルは、爆発で見えなくなったテオ・テスカトル辺りを見て、叫んだ。

“フッフ。コレデ、ヤツノホネヒトツ、ノコラナイナ”

テオ・テスカトルは視界が狭い状況ながら、勝利を確信した。

その時、目の前に大剣が現れた。

“ナ!?”

「アーメン。テオ・テスカトル」

不意に総隊長が現れ、一言言うと、大剣を振り下ろした。

グシャア!!!

と、鈍い音がした。

大剣は、テオ・テスカトルの頭に突き刺さり、頭蓋骨を粉碎した。

“ コノ、ハンター、フゼイ、ガ。ク・・・ソ・・・ガ”

テオ・テスカトルは断末魔をあげると、横に崩れおち、そのまま動かなくなった。

周りの土埃ちいぼがひいた時、カナハルたちは、総隊長の勝利を確信した。

「やった。総隊長が勝った！」

ギイは叫んだ。

一方、カナハルは勝利を確信すると、急いで倒れているラシューに駆けつけた。

「おい！おいラシューー！！返事しろ！！！！」

カナハルは叫んだ。

「カ、カナ・・・ハル・・・か」

ラシューは、囁き声のように小さな声で、友の名前を言った。

「しっかりしろー！ラシューー！！！！」

すると、総隊長がラシユーのもとに駆けつけた。

「これは酷いな。これを飲むといい」

総隊長はアイテムポーチを開き、何やら赤い薬を取り出した。

「まさかそれは、『いにしえの秘薬』ですか？」

カナハルが言った。

「ああ」

と一言言うと、ラシユーに薬を飲ませた。

「……」

とラッシューが言った。

「我慢してくれ。直ぐに効果がでる」

と総隊長が言い、再び薬を飲ませた。

時間はかかったが、ラッシューは薬を飲み干した。

すると、数分後。

「あ……。動く。体が動く!!!」

と、ラッシューは言いつと、起き上がり、立ち上がった。

「ラッシュー。大丈夫か？」

と、カナハル。

「ああ、大丈夫だ。もう痛くない。凄い効き目だな」

と、ラッシュー。

「もう大丈夫な様だな。よかった」

総隊長は言った。

「ありがとうございます、総隊長！……！」

ラッシューは元気に言った。

「どういたしまして。それより、早く塔に入ろう。これからは、私も共に行こう」

「え？いいんですか？総隊長のグループはどうするんですか？」

カナハルは疑問を言った。

「今は、早い内に塔に入るのが先だ。それに、私のグループのハンターたちは強い。私が居なくても、大丈夫だろ」

総隊長は言った。

「さ、行くぞ！……！」

と総隊長は言うと、ラシューたちは

「はい！！！」

と言った。

五人は、塔に向かって走り出した。

第二十二話

「私の名はレギンレイヴ。君たちの名前を覚えてくれないか？」

総隊長はラシユールたちに言った。

ここは、塔の入口に入って直ぐの、薄暗い部屋だ。

階段を降りると、水溜まりの道があり、上には、雷光虫が異常に巨大化した『大雷光虫』が部屋を照らし、怪しく浮かんでいる。

五人は、この階段の上で、しばらく休憩をとっていた。

五人とも、先のテオ・テスカトルとの戦いで、疲れていたからだ。

「僕はカナハルです。ランスを扱います。これからの道中、宜しく

「お願いします！」

カナハルは言うと、総隊長と握手をした。

「私はハルカです。ボウガンを使います。宜しくお願いします！」

「ん？君のボウガンは変わっているな。見た所『ド【鳥】』のようだが、赤い所が幾つかあるな」

総隊長はハルカのボウガンを指差し、珍しい物を見るような目をしてしながら言った。

「はい。これはですね。密林で出会ったイヤンガルルガと、この世界にしかない、赤いイヤンガルルガの素材で出来ています。これは、私だけのボウガンなんですよ」

ハルカは笑顔を見せながら言った。

その横で、ラシユーはハルカにみとれていた。

(やっぱり、ハルカは、か、可愛いな)

実際、薄暗い部屋の上で『大雷光虫』が明かりを灯していて、ハルカの長く赤い髪型『ナナストレート』も、よりいっそう輝きを増し、ハルカが少し動くと、髪がサラサラ、と靡なびいて、美しく見えるのだ。

そんな様子を見てみると、ラシユーは突然、自分の、茶色の髪型『レウスレイヤー』を整えようと、手を髪に伸ばし、少々いじくった。

もつとも、これから頭パーツである『リオソウルヘルム』を被るので、意味はないのだが……。

「俺は、ギイ、つていいいます。武器は、片手剣です。宜しくお願ひします!」

「はい、宜しく。君の防具も、赤いイャンガルガから作ったのかい？」

「はい、そうです。」

ギイは元気よく言った。

「俺は、ラシユーです。このパーティーの隊長です。武器は太刀です。宜しくお願いします。」

「ああ、宜しく。あの、ラシユー君。一つ質問してもいいかな？」

ラシユーと握手していた総隊長、レギンレイヴは尋ねた。

「はい、何でしょうか？」

「君はもしかして、あの『剣聖』ライレルさんの、息子さんか？」

「え……？は、はい。そうですが、どうして知っているんですか？親父は、世間には公表していないはずですけど」

ラシユーは不思議に思った。

ラシユーの父親は、ハンターのみならず、前の世界では知らない人はいない、と言われているほどの伝説のハンターだが、彼は息子に迷惑をかけたり、罵られたりしないように、ラシユーの名前は伏せていたのだ。

「ああ、すまない。実は、君のお父様とは、一時期だが、パーティーを組ませてもらっていたんだ」

「ほ、本当ですか！！それは」

ラシユーは驚きを隠せない。

「ああ。ライレルさんは、本当に凄い人だよ。私は、ほとんどサポート役だったよ。あの人のおかげで、私は成長出来たし、今の防具の『暁丸・皇』シリーズを揃えたのだから。私がライレルさんとパーティーを組んで1ヶ月くらいたった時に教えてもらったよ。自分には20そこらの、ラシユーという息子がいる。いずれ自分を超えるハンターになるだろう、ってね。本当に凄い人だよ。もう40歳を超えてるのに、ばりばりの現役だったからね」

と、総隊長は、昔話を言った。

「あの、総隊長。ライレルさんは今、どこにいるのですか？」

カナハルが尋ねた。

「すまない。私にもわからない。半年前にライレルさんはパーティーを解散して、彼曰く、『世界を見る旅』に出掛けたまま、行方がわからない。だが、今でも何処かで戦っていると思うよ」

「そうですね。ありがとうございます」

「さて、そろそろ行くこうか」

総隊長が言うと、五人は立ち上がり、階段を降り、水溜まりの道をバシヤバシヤ音をならし、先に進んだ。

やがて、開けた場所に着いた。

先には、ギアノスが五体ほどいる。

その先には、螺旋階段への入口が見える。

「ギアノスたちは無視して、先に進もう」

総隊長が言うと、ラシューたちは

「はい！」と声をあげた。

前に走ると、ギアノスたちが

ギャー、ギャー

と鳴き声をあげ、威嚇した。

五体は、それを無視し、先に進もうとした、まさにその時。

「……………」

突然総隊長が立ち止まった。

「どうしたんです、総隊長？」

ラッシューが声をあげる。

「……。殺気を感じるな。ギアノスじゃない、別の何かの……
まさか」

総隊長は考え事をした。

だが奇妙にも、ギアノスたちは襲ってこなかった。まるで、誰かに
統率されてるみたいに。

「……。いるんだろ！！そこに！！姿を現せ！！！！」

総隊長は螺旋階段への入口を指差しながら叫んだ。

すると。

“チ……。バレタカ”

と、突然テレパシーのような声が聞こえた。

すると、螺旋階段への入口の前に、突然、全身が紫色をした、一風変わった龍が、何も無い所から突然、姿を現した。

「何ですか、あれ？」

ハルカが驚いた様子で言った。

「あれは、おそらく、『霞龍』オオナズチのようですね」

カナハルが言った。

“ ナンデココニ、オレサマガイルト、ワカッタンダ？”

「姿を隠していたとはいえ、その殺気は完全に消せなかったようだな」

“ チ……。マアイイ。ドノミチ、キサマラハ、ココデ、シヌノダカラナ”

「来るぞ！！」

ラシューは太刀を構えた。

“ マアマテ。スコシ、ハナシヲシヨウカ”

「何？」

カナハルは不思議そうに言った。

“ サツキ、トウニハイルマエノヒロバニ、アラタニ、オレタチ、オオナズチガ、サンタイ、ムカッタ ”

「何だと？だとしたら、下の皆が危ないな。だが、私達は、進むしかない！」

総隊長は言った。

「戦いましょう、総隊長！！！！」

ラシユーは言った。

すると、総隊長は、

「いや、君たちは、先に行ってくれ。ここは、私一人が相手する」

「総隊長？」

ラッシューは驚きの声をあげた。

“キサマヒトリ？ワレラモ、ナメラレタモノダナ。キサマヒトリデ、アイテニナルト、オモツタカ？”

「そつだとしたら？」

総隊長が挑発声をあげた。

“へ。ソノコトバ、コウカイサセテヤル！！”

「どつやら、君たちは通してくれるようだね。早く行きなさい」

「でも、総隊長！」

「ラシュー。総隊長の言う通りにしよう。早く塔の頂上にたどり着かないといけないんだ。ここで足止めされる訳にはいけないんだ」

カナハルがラシューを説得した。

ラシューはしばらく黙ったが、総隊長に、

「勝って、すぐに頂上に来てください！」

と言うと、螺旋階段への入口へと走った。

カナハル、ハルカ、ギイも、ラシューの後を追い、走った。

それを妨害しようと、ギアノスたちはラシューたちに飛びかかろうとした。

“ウゴクナ！ギアノストモ！！”

オオナズチの命令に、ギアノスたちは立ち止まった。

そして、ラシューたちは螺旋階段への入口に入り、視界から姿を消した。

「簡単に通してくれて、感謝する。オオナズチ」

“カンチガイスルナ。ヤツラハ、コノサキデ、ジゴクヲアジワツテモラウ”

「だが、彼らはそれを払い退けるだろう。彼らの絆は頑丈だからな。私は、彼らを信じる」

“コンナニ、オモシロイヤツハ、ハジメテダ。キサマ、ナマエハ？”

「レギンレイヴ。それだけで十分だろ」

総隊長は、ニヤリと笑った。

“ ジャア、ハジメルカ!!!! ”

オオナズチは言うところ、彼らの能力である、ステルス能力、つまり姿を消せる能力を使い、総隊長の視界から姿を消した。

（さて、オオナズチか。面倒になりそうだな。まあ、大丈夫かな）

「本当に一人にして、よかったのでしょうか？」

ハルカは、さっきの行動が正しい判断かどうか、分からなかった。

ここは、最初の螺旋階段。ここには『蛇竜』^{ガブラス}がいた。

ガブラスは、ランポス程度の大きさながら、厄介なことに空中を飛び、毒液を吐く、近接武器では苦戦必至な飛竜である。

「総隊長が言ったんだ。俺達は、それに従うしかない。それよりも早く頂上を目指さないと」

ラシューはそう言うと、螺旋階段を上り始めた。

後の三人も、後続く。

ガブラスはラシューたちに気づき、威嚇行動をとる。

「構うな！突っ切るぞ！！」

ラシューの命令通り、皆ガブラスを無視し、螺旋階段をかけるのぼった。

そして、二つ目の螺旋階段も、ガブラスに攻撃される前にかけるのぼり、無傷で頂上の前の開けた場所にたどり着いた。

ラシューたちの前には、頂上への扉があった。

「いよいよだな。よし、行くぞ！……！」

ラシユーはそう言うと、扉に向かって走り始めた、その時。

“キタカ”

突然テレパシーのような声が聞こえた。

「……！。誰だ！……！」

ラシユーは叫んだ。

すると、柱の後ろから、白銀に輝き、象徴的な一本の角を持つ、馬のような生物が現れた。

「『幻獣』キリンか！！だが、この戦いから手をひいたと言っていたぞ。何でいるんだ？」

ラッシューは疑問を言った。

“ワレハ、マエノタタカイデ、キズツイタ。モハヤ、ナガクハイキラレナイ”

ふとキリンを見ると、確かに切り傷のような跡が幾つもあった。

「だったら、なぜ戦おうとするんだ！！」

“スベテハ、ワガオウ、スサノオサマノタメニ。コノイノチハ、オ

シクナイ”

「何だよ！何であいつのために、そこまでするんだ！！」

“キサマラガシルヒツヨウハナイ。サア、タタカエ！！！”

キリンは言うと、角に雷撃のエネルギーを溜め始めた。

「ラシュー。先に行け。ここは、俺達が相手する」

カナハルが言った。

ラシューは心配そうな顔を作ったが、すぐにその言葉の意味を知ると、

「すまない！」

と言い、扉に向かって走った。

“ ココハトオサン!! ”

キリンはラシユーに向かって雷撃を放とうとした。

「 やあ!! 」

その刹那、ハルカはキリンに向かって散弾を放った。

その弾道は、ラシユーには向かわず、キリンの角や体に向かっていった。

“ グ!! ”

キリンは散弾を受け、おもわず怯んだ。

その隙に、ラシューは扉にたどり着いた。

「頼むぞ、ラシュー!!!!」

カナハルは言った。

ラシューは言葉は言わなかったが、その後ろ姿は、
「まかせとけ!!」と言っているようだった。

「さて、お前の相手は、俺達だ!!」

カナハルは言うと、大槍『ブラックテンペスト』を構えた。

ハルカとギイも、同じように武器を構えた。

“キサマラ……。ワガライゲキノ、エジキニナレ！！！”

「スサノオ！！！！」

ラシューは塔の頂上にたどり着き、その中心に立っていた、龍王を見つけると、おもいつきり叫んだ。

しげらくしげ。

【ククク。キタカ】

龍王は言つと、今まで背を向けていたが、振り返つた。

その直後、ラシユーに戦慄が走つた。

今まで龍王の体を近くで見えていなかったたので、この間近で見たとき、自分の記憶にある人物が出てきたのだ。

龍王の姿を見たラシユーは、たまらず驚きの声をあげた。

「お……、親父……」

第二十二話（後書き）

いつも僕の小説を読んでくれて、ありがとうございます。

実は僕、現役の受験生で、12月中に、なんと試験があるんです。
（そんな大事な時期に小説を書きまくっている自分（^ー^；）（

なので、今後の更新は、しばらく開くと思います。（暇な時にちよ
くちよく書くかもしれないので、ひよっとしたら・・・）（

第二十三話

「お……親父……」

ラシユーの目の前に立っている龍王の容姿は、まさしく自分の父親だとわかる体をしていた。

体の筋肉、作り、顔、全てが、ラシユーの記憶にある父親にそっくりだ。

【オヤジ？アア、コノカラダノアルジガ、キサマノオヤジ、トイウコトカ】

「どついつ意味だ？お前は、親父じゃないのか？」

【フ……。コノキヨリナラ、ヒトノコトバデハナシテモ、イイナ】
すると龍王は、口を動かした。

「ああ……やはり、人の言葉は話しにくいな」

今まで聞こえていた声とは違い、龍王の肉声が聞こえた。
かなり渋い声だ。

「お前は、親父じゃないんだな？」

ラシューは龍王に問いかけた。

「さて……。そうとも言えるし、そうではないとも言えるな」

「何？」

「それよりも、お前に、絶望を与える報告がある」

ラッシューは龍王の言葉を聞いて、疑問に思った。

「言おう。お前たちハンターの敗北が決定した」

「何？どういう意味だ。……。！！！！。まさか！」

「そのままかだ。儀式は成功した。各地のモンスターに、私の言葉を伝えた。やがて我に協力するだろう」

ラッシューは絶望した。

「くそ！間に合わなかったか！！」

「だが、惜しかったぞ。お前がここに到着する数秒前に終了したんだ」

「世辞はいらない。くそ!！」

「だが、お前は今、我がお前の親父とやらだ、と思っているのだから? その迷いがあると、我を切る決心がつかないか? ならば、チャンスを与えてやる」

「何・・・?」

「今からお前には、ここで、あるモンスターと戦ってもらおう。勝利すれば、お前の問いに正直に答えてやろう。そして、お前たちの街の攻撃は、中止しよう。だがお前が死んだら、お前たちの街を襲う。直ぐにな」

「何だと?・・・。だが、悪くない話だな。・・・。だが、俺の戦うモンスターって、何だ?」

「安心しろ。古龍ではない。『火竜』リオレウスだ」

「何だよ。簡単じゃないか。タイムン勝負だよな？」

「タイムン？・・・ああ、一対一という意味か。そうだが」

「じゃあ、受けてたつぜ！！」

ラシューは太刀『エクディシス』を抜刀し、構えた。

「わかった。では、モンスターを呼ぼう」

龍王は言うつと、何かテレパシーを発しているようだったが、ラシューにはその言葉を聞き取れなかった。

「すぐに来る。我は安全な所に行こう」

と言うと龍王は、背中にある翼を広げ、羽ばたき、上空を飛んでいった。

「ああ、大事なことを言い忘れていた。お前の戦うモンスターは、リオレウスだが、お前の知るリオレウスではないぞ」

龍王の突然の言葉に、ラシューは

「何？」

としか言えなかった。

やがて、何かが滑空してくる音がした。

ラシューは滑空してくるモンスターを見た。

「!!!!!!。な、何だ、あいつは」

ラッシューが見たのは、間違いなくリオレウスだった。

しかし、体の色は、通常種の赤色でも、亜種の青色でも、滅多に現れないと言われている希少種の銀色でもない。

黒い……。

頭部、身体、脚、尻尾、全てが漆黒に染まっている。

その漆黒は、光を浴びると光沢を放ち、まるでクシャルダオラの黒き鋼色を、さらに黒くしたような姿をしていたが、瞳の色だけは、紅蓮色をしていて、まるで悪魔を連想させる。

その漆黒の飛竜は、ラシユーから5メートルほど離れた所に着地すると、

グオオオオウ！！！！

と、威嚇の咆哮をあげた。

「近くで見ると、やっぱりすげえな。普通のリオレウスよりも、かなりでかいな」

ラシユーは漆黒のリオレウスを見ながら言った。

「この者は、この世界でも特別な進化をした竜だな。貴様が今まで戦ったりオレウスと同じだと思うな」

龍王の声が、塔の頂上に響く。

「この者の名を教えよう。『漆黒のリオレウス』という意味の……」

『エベニーソル』

「エベニーソル……」

ラシューは漆黒のリオレウスの名を繰り返した。

【サア、ハジメヨウカ】

龍王は、塔の頂上にある、さらに高い所にある高台に着地し、言った。

すると、漆黒のリオレウス、『エベニーソル』は、

グオオオオウ！！！！

と咆哮し、ラシューに戦いを挑んだ……。

時は遡^{さかのほ}り、ここは塔にある最初の螺旋階段の前の開けた場所。

「はあ……はあ……はあ……」

総隊長は、大剣『ブラッシュデイル』を地面に置き、地に足を着け、肩で息をしていた。

「ま、まさか……これ程とは……」

“ワカッタカ？コノ、オレサマトノ、チカラノチガイヲ！！！！”

何も無い所から、声を発する者がいた・・・

第二十四話（前書き）

あけましておめでとございます（＾―＾）v

無事に大学合格が決まりました！！

これからは更新を早めていこうと思います。
これからも、僕の作品を、宜しく願いますm（―）（
m

第二十四話

「力の差・・・か。確かに、この状況は・・・私に不利だな・・・」

力のない声で、総隊長は言った。

現在、総隊長レギンレイヴは、螺旋階段の前の開けた場所の中央にいる。その周りには、ギアノスたちが取り囲んでいる。

ギアアア、ギアアア・・・

ギアノスたちは、頭を下げ、両手を前にだし、威嚇の声をあげていた。

そして、姿は見えなくても、『その者』はギアノスたちに交じって、悠然と立っていた。

“ナススベナシカ？マア、ソリヤソウダナ。オレサマヲサガスコトハ、フカノウダカラナ”

「『パーフェクト・ステルス』・・・か。よく言うよ・・・」

総隊長は、大剣を拾い、ギアノスたちを睨んだ。

正確には、ギアノスたちではなく、見えざる者に向けてだが・・・。

“ダガ、ソノコトバドオリダロ？”

「この世界では、貴様らに有利に働く何かがあるらしいな。そして、それが著しいのは、貴様ら『古龍』か・・・。前に戦った『陽炎龍』は、身に纏う焔を強化した様だが、貴様ら『霞龍』は、姿を消す能力、ステルス能力を強化したのか？」

“ククク。ソウダ！ユエニ、ワレラ『オオナズチ』ハ、サイキョウウノチカラヲ、テニイレタ！！ソノシヨウコガ、コノジヨウキョウダ”

「確かに……。この世界の貴様らは、光の反射でも見えなくなり、攻撃の時も、うつすらとしか見えない。加えて、このギアノスたちが取り囲んでいる状況では、気配も殺気も感じとるのが難しい。『パーフェクト・ステルス』か……。大した能力だな」

“ コノスウフンデ、ソコマデワカッタノカ。タイシタモノダナ。ダガ、ナススベナシカ？”

「そう見えるか？」

総隊長は微笑みをあげると、前にいたギアノスを大剣『ブラッシュデイルム』で一刀両断した。

肝心のオオナズチの姿が見えない以上、周りにはいるギアノスたちを片付ける。

今出来ることはこれくらいだろう。

総隊長はそう考えての行動をした。

だが、オオナズチにとっては、つまらない行動としか見れなかっただろう。

突如、薄く現れ、総隊長に向かって舌を勢い良く伸ばした。

もともと姿さえ見えないオオナズチの攻撃を避けることなど出来るはずもなく、総隊長は

「ぐ……!!」

と、苦しみの声をあげ、吹き飛ばされた。

“ナブリゴロシテヤルゼ……!!”

と言うとオオナズチは、また完全に姿を消した。

「まだまだ!!」

総隊長は再びギアノスたちに斬りかかった。

“クドイゾ!!”

オオナズチは、再び舌を伸ばした。

だが、吹き飛ばされた総隊長はまた、

「はああ!!」

と、ギアノスたちに斬りかかった。

いい加減ウザくなったオオナズチは、

“マダヤルカ!!!”

と言つと、薄く現れ、口に何か溜め始め、やがて、

バアアアア!!!!!!

と、気体のブレスを吐いた。

だが、溜めてる時間が長く、その間うつすらと姿が現れていたのが、総隊長は瞬時に横に跳びはね、間一髪で避けた。

そして、オオナズチが再び姿を消そうとした、その時。

キーーーーーン!!!!!!

と、高音が響いた。

“グオオオオウ!!!”

オオナズチは、明らかに怯んだ声をあげた。

“キサマ、ナニヲシタ!”

オオナズチが言うと、総隊長は、うつすらと笑い、

「これを使ったんだよ」

と言うと、手に黒い玉を持った。

「これは、音爆弾、と言ってな、爆発すると快音を発する手投げ爆弾だ。貴様らオオナズチは、姿を現した時、高音に弱くなる。その反応を見ると、どうやらこの世界でも効くらしいな。私は、隙の大

きい、その攻撃を待っていたんだ」

そう言うと総隊長は回復薬を飲んだ。

“ダガ、ソレデナンニナル？”

「気付いてない様だな。貴様の身体、見えてるぜ！」

“ナニ！！！”

オオナズチはびっくりし、自分の身体を見た。

先ほどとは違い、完璧には消えていない。

“キサマ……。なぜ、オレサマガ、コウオンニヨワイト、シッテイル？”

「私は、ある人のパーティーに入っていた。その人は、ハンターなら必ず知っている程の、英雄だ。貴様ら『古龍』とも戦ったよ。お前たちオオナズチの特徴や弱点も、その戦いで知った。さて・・・反撃といこうか!!」

総隊長は言つと、光の反射で、くつきりと見えているオオナズチに斬りかかった。

“ ナメルナヨ!! ”

オオナズチは頭を下げ、総隊長に突進した。

だが、オオナズチの角が当たったのは、総隊長の大剣だった。

「ウオオオオオ!!!!」

総隊長は、オオナズチに力勝負を仕掛けた。

だが、オオナズチの角は、大剣の衝撃に耐えられず、砕けた。

“グオオオオウ!!”

オオナズチは角を失い、苦しみの声をあげ、怯んだ。

総隊長はとどめをさそうと、大剣を構える。

しかし、

ギヤアア、ギヤアア

と、ギアノスたちは声をあげると、その場にいた十体全てが、総隊長に向かって飛び掛かった。

「くそ!!」

総隊長はオオナズチの追撃を諦め、ギアノスたちの攻撃を大剣でガードし、攻撃を加えた。

だが、ギアノスが残り一体になったその時。

総隊長は、完全にオオナズチを忘れていた。

突如オオナズチは、飛び上がると、その身体から毒ガスを発生させた。

「ぐ!!!!」

総隊長は急いで毒ガスの及んでいない所まで走った。

同じく毒ガスをくらったギアノスは、もともと総隊長の攻撃を受けて弱っていたので、そのまま動かなくなった。

総隊長が起き上がろうとした、その時。

“クラエ!!!”

と、オオナズチは言うと、球状の液体を吐いた。

「ぐわ!!!」

総隊長は液体を受けてしまった。

総隊長は回復薬を飲んだが、鎧の異変に気が付いた。

(このプレスは、防具を機能を低下させるのか！)

総隊長がそう思った時、オオナズチは突進してきた。

総隊長は大剣を構えた、その時、突如オオナズチは舌を伸ばした。

不意打ちに総隊長は軽くのけ反る。

それはオオナズチの計略だった。

「ぐわ!!!」

オオナズチは突進を総隊長にくらわせ、そのまま壁に激突させた。

オオナズチが壁から離れると、総隊長は地面に落ちた。

するとオオナズチは、その特徴的な形をしている尻尾で総隊長を押しさえ付けた。

“コレデオワリダ！！！！”

オオナズチは、尻尾に力を加え、総隊長に気体のブレスを吐こうと口に向かき溜め始めた。

(まずい！！！！)

総隊長は大剣で尻尾を切ろうとした。

だが、横たわっている状態では力が入らず、弾かれた。

(くそ！！！！)

やがて、気体のブレスで、総隊長の体は見えなくなった……。

“オワツタカ”

オオナズチは勝利を確信していた。

自分の球状の液体ブレスは、防具の機能を低下させ、気体のブレスは、相手の力を出させなくする。

これをくらったのだから、生きていたとしても、戦える状態ではない。

そう思って、オオナズチは尻尾を退けた、その時。

「はああ!!!」

突如、総隊長が現れ、大剣を尻尾に向かって振りおろした。

“グオオオオウ!!!”

オオナズチの尻尾は、身体から切り離され、大量の血が吹き出した。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

“ドウイウコトダ！ナンデマダ、ソレホドノチカラガ、ノコッテイル！？”

「はあ……はあ……そのブレスが強力でも、お前の尻尾に顔を覆えば、ある程度は防げる……だが、体はぼろぼろだ……」

総隊長は、ふらふらしながら大剣を構えた。

“ク、クソ！！”

オオナズチは、再び気体のブレスを吐いた。

だが、それは自分の視野を狭めるだけだった。

総隊長はブレスを避けると、オオナズチの顔に斬りかかった。

“グオオオ!!”

オオナズチは怯み、頭を下げた。

そのチャンスに総隊長は逃さなかった。

渾身の力を込めて、大剣をふりおろした。

グシャア!!

と鈍い音があがった。

“クソ……”

「アーメン……オオ……ナスチ……」

総隊長は地に足を着けた。

“リュ……リュウオウ……サマ……バンザ……イ……”

そう言うとオオナスチは、動かなくなり、絶命した。

（くそ、体が動かない!!）

総隊長は立ち上がろうとするが、動かない。

(ラシュー君たちは、大丈夫だろうか……。早く行かないと！)

すと。

「総隊長！！！！！」

後ろから声が聞こえた。

見ると、八人のハンターが、こちらに向かって走ってきていた。

(伝えないと！ラシュー君たちのことを！！)

だが、無情にも、目の前が霞んできた。

(くそ……。伝え……。ない……。と)

そして、体は倒れ、意識を失った・・・

第二十五話

塔の頂上に行くための扉がある、少し開けた場所……。

ラシューが扉を開き、見えなくなった時にさかのぼる。

カナハル、ハルカ、ギイの三人。

これに相対するのは、古龍種に属するが、その生態はほとんど知られていない、幻の生物。体は白銀に輝き、象徴的な一本の蒼角を持つ、『幻獣』キリン。

だが、その体には、幾つかの古傷がある。

この戦いは、カナハル達に有利に思われた。

ゆえに、先に動いたのは、カナハルだった。

カナハルは、大槍『ブラックテンペスト』を構え、キリンに向かって突進した。

するとキリンは、蒼角に雷撃のエネルギーを溜め始めた。

(何をやる気だ?)

カナハルは疑問を思いながら、キリンに突進していった。

すると、キリンの角が光りだし、前足を高く上げ、高音の鳴き声をあげ、前足を地面に着けたのと同時に、キリンの前方に落雷が次々と落ちた。

カナハルは突進中だったので、避けることが出来ず、落雷に当たった。

「ぐわ……！」

と声をあげ、吹き飛ばされた。

カナハルが着用している『クシャナスシリーズ』は、雷耐性が低い。ゆえに、ダメージは、見た目より重くなる。

だが、キリンとカナハルの距離が空いたので、ハルカはライトボウガン『ド【鳥】』で、散弾を打ち込んだ。

散弾は、キリンの体に命中した。

すると、キリンの体はより一層輝きを増した。

普段とは違う姿。つまり、キリンはキレたのだ。

“ マズハ、キサマカラダ！！！！ ”

キリンはハルカに向かって突進していった。

ハルカは避けようとするが、スピードが速く、突進をくらってしま
った。

「う！！！！」

ハルカは苦しみの声をだし、吹き飛ばされた。

ハルカが立ち上がろうとした、その時、側にキリンが立っていた。

“ オワリダ！！ ”

キリンは角に雷撃のエネルギーを溜め、その角をハルカに向けた、
その時。

「うおおおおー！！！！」

ギイが突然、キリンの前に現れ、そしてハルカを抱え、横に跳んだ。

キリンの角突きは、誰にも当たらなかった。

“キサマ！！！！”

キリンは次にギイを狙い、雷撃を溜め、ギイに突進しようとした。

しかしその時カナハルが、ギイとハルカの前に立っていた。

カナハルは、キリンの突進からギイとハルカを守るため、巨大な盾を構えた。

「来い!!!」

カナハルが叫ぶ。

“ミセテヤル。ワレノ、サイキョウノウザヲ!”

キリンは言っと、身体全体に雷撃を溜め始めた。

バチ!!!バチ!!!バチ!!!

キリンの身体からは、電流がほとばしり、より一層白く輝いていた。

(な、何が来る!?)

カナハルは、そう思い、咄嗟にガードする体勢にはいる。

“フラッシュ・オブ・ライトニング”

キリンはそう言うと、カナハルに突進した。

いや、これはもはや、突進というレベルではなかった……。

地面を蹴るのではなく、大気そのものを蹴り、身に纏^{まと}う超高压電流が空気抵抗を低くすることで、初めて出来る、超高速突進。

キリンは一回の跳躍で、凄まじいスピードでカナハルまでたどり着き、雷撃がほとばしる角を巨大な盾に突き刺した。

そのスピードは、まさに『フラッシュ・オブ・ライトニング』、直訳すると『稲妻の閃光』……。

(!!!!!!)

言葉にすることが出来なくなるほどの衝撃がカナハルを襲う。

しかし、カナハルは退かず、キリンと力勝負を挑んだ。

すると、キリンに蓄えられた雷撃のエネルギーが一気に解放され、それが全て衝撃波となって、カナハル、ハルカ、ギイ、そしてキリン自身にも襲いかかった。

「ぐわ!!」

カナハルや、側にいたハルカ、ギイのみならず、キリンも吹き飛ばされた。

カナハル、ハルカ、ギイは螺旋階段の方に、キリンは頂上に入るための扉の方に吹き飛ばされた。

カナハルは、ふと、盾を見た。

盾の中央に、ぽっかりと穴が空いている。

カナハルは体を起こそうとするが、さっきの衝撃のせいで、体がいうことをきかない。

(くそ！動け！！)

カナハルがそう思った時、キリンは身体を起こした。

“ド、ドウダ。ワレノ、ヒッサツワザハ・・・”

しかしさっきの攻撃は、キリン自身にもダメージを与えるらしく、暫く動こうとしない。

その瞬間を狙って、ハルカは起き上がり

「はああ……！」

と、散弾を打ち込んだ。

“グ……！”

散弾はキリンの角や身体に命中し、怯んだ。

もともと先の戦いで弱っていたので、キリンの体力は、残り僅かとなっていた。

キリンは、最後が近いと見るや、雷撃を溜め始めた。

「そうはさせない!!」

ハルカは引き続き、散弾を打ち込む。

だが、キリンは怯まず、雷撃を溜め終わると、いまだ横たわっているカナハルにとどめをさすべく、突進した。

先ほどの閃光の如くの突進ではないが、かなりの速さがあった。

カナハルに角が直撃する、その刹那。

「おおお!!!!」

ギイがカナハルの大槍『ブラックテンペスト』を持ち、その先端をキリンに向けた。

バギーーーーーン

突進のスピードも重なって、大槍『ブラックテンペスト』は吹き飛ばされたが、キリンの角が衝撃に耐えられず、折れてしまった。

“グワーーーー！！！！！”

キリンは突進の勢いを止めれず、壁に激突し、横たわった。

ギイも衝撃で吹き飛ばされたが、大したダメージを受けなかった。

“クソ……。オワリカ……”

「カナハルさん！大丈夫ですか！！」

ハルカはカナハルに向かって走りながら言った。

「大丈夫だが・・・体が動かない・・・」

カナハルは立とうとするが、動かない。

“フフフ・・・。ワレラハ・・・フミダイ・・・”

突如、キリンがメッセージ染みた言葉を言い始めた。

“ワレラハ・・・ステゴマ・・・。ダガ・・・ソレデモワレラハ・・・
・アノカタノモトニ・・・ツドウ。アノカタノ・・・テンカノタメ
ニ・・・。ソシテ・・・ワレラノ・・・ラクエンノ・・・タメニ・・・
”

キリンはその後、動かなくなり、絶命した。

「……つと、感傷に浸っている暇じゃない！早くラッシューさんの所にいかないと！！！」

ギイが言った。

「カナハルさんが動けるようになるまで待ちましょう！」

ハルカは言うと、カナハルに回復薬を飲ませた。

だが、まだ動けない。

カナハルは、顔を扉に向けて、

「ラッシュー……無事でいてくれ……」

と、祈るように言った。

カナハルたちの激闘が始まる十分前……。

ここは塔に入る前の広場。

ハンターたちと『炎妃龍』 ナナ・テスカトリと『炎王龍』 テオ・テスカトルとの戦いは、突如現れた『霞龍』 オオナズチの乱入のせいで、ハンターたちが危機的状況に陥っていた。

見えないオオナズチに苦戦し、殺られるハンターたち。

すると、広場に架かる橋に、三人のハンターが現れた。

「不味いな・・・」

紅蓮の様に赤い防具に身を包んだ、身長160センチくらいの男が言った。

背中には、黒い双剣がある。

「け！！雑魚ハンターどもが！！」

金色の防具に身を包んだ、身長2メートルを超える大男が言った。

背中には、群青色のハンマーがある。

「そんな言葉は言つものではない」

白い防具に身を包んだ、身長170センチくらいの女が言った。

背中には、白い大きなボウガンがある。

「やっぱり、レギンレイヴのような若輩者には、総隊長は務まらない！…！なあ、ローラン！…」

大男が言った。

すると、ローランと呼ばれた男は、

「レギンレイヴは悪くない。彼は我らのギルド『太陽の樹』のメンバーの中でも、ハンターを統率する力は、リーダーの『剣聖』ライレルさんに次いで二番目に優れている。そんな彼が苦戦するということは、戦力にあまりにも差がある、ということだ。ゆえに、彼を助けるために、我らはここに来たんだ。行くぞ！アルマーズ、ハノン！」

と言った。

アルマーズと呼ばれた大男は、

「よっしゃー!!血がたぎるぜー!!!!!!」

と、大声で言った。

一方、ハノンと呼ばれた女は、

「さあ、いくよ。相棒、『クイックキャスト改』」

と、小さな声で言った。

「『封龍剣【超絶一門】』。あの古龍どもに、死を与えよ!!!!」

ローランと思われる小さな男が言った。

「敵を粉碎するぜ!!!」『龍壊棍』!!!」

アルマーズと思われる大男が叫んだ。

「行くぞ!!!」

。小さな男が言うと、三人は散らばり、古龍たちに戦いを挑んだ……

第二十六話

塔の頂上……。

ラシューは、ドンドルマの街の人々のため、そして真実を知るために、前方にいる、漆黒のリオレウス、『黒火竜』エベニーソルと戦う。

頂上にある高台にいる龍王スサノオが、認めたくないが、自分の父親であり、『剣聖』の異名で知られるライレルであるのか、それを知るために……。

先に動いたのはエベニーソルで、ラシューに向かって突進してきた。

(まずは、様子を見るか)

ラッシューはそう思い、横に跳び、突進を避ける。

エベニーソルは、通常のリオレウスの突進と同じ動きで、勢いを止めるために、前のめりに倒れた。

しかしラッシューは攻撃をしなかった。観察のためだ。

エベニーソルは立ち上がると、ラッシューのいる方に向き、口に火球を溜め、ラッシューに向けて放った。

ゴーーーーー!!!

という火球が迫る音がした。

ラッシューは再び横に跳び、攻撃を避ける。

すると、火球は塔の頂上の壁に当たり、

バーーン！！！！

という音をたて、壁を破壊し、近くの壁も火球の高温で、焼けて黒ずんでいた。

（火球の威力は凄まじいな。でも、当たらなければいい。そろそろ攻撃するか）

ラシューはそう思うと、エベニールが突進してきた。

ラシューは避けると、エベニールソルの尻尾に、太刀『エクディシス』で、切断しようと振り下ろした。

しかし。

ガキーーーーン!!!!!!

と鈍い音をあげ、弾かれた。

「くそ！なんて硬さだ！！」

ラッシューがそう言った時、エベニーソルが、口に火球を溜め、両翼を上下に動かした。

(バックジャンププレスか!!!)

ラッシューは咄嗟に横転した。

ガアアアアウ!!!!!!

エベニーソルは後ろに跳びながら、火球を放った。

ラシユーは間一髪で避けた。

(リオレウスの動きはだいたい分かる。後は、どうやってダメージを与えるかだな)

ラシユーの持つ太刀『エクディシス』は、鋼龍クシャルダオラと竜リオレウスの素材で作る業物。そしてラシユーの身につける防具、『リオソウルシリーズ』は、リオレウス亜種の素材で作れる。リオレウスの戦いに慣れているラシユーには、エベニーソルの動きを察知して、行動することが出来るのだ。

エベニーソルは次にラシユーに向かって火球を放った。

「うおおお……！」

ラシューは火球を避けると、エベニール頭の頭部に斬りかかった。

ザシュー!!!

弾かれることはなかったが、傷口からの出血があまりない。

(頭は大してダメージを受けないか。あとは、翼か！)

ラシューは続けて、翼に踏み込み斬りをした。

グオオオオウ!!!

翼は他の部分に比べて非常に柔らかく、傷口から血が吹き出した。

(翼が弱点か!!!)

ラシューは続けて攻撃を加えようとした、その時。

グオオオオ！！！

エベニーソルは怒りの咆哮をあげた。

しかし、ラシューの着ている防具は、聴覚保護能力が非常に優れていて、普通なら耳をふさぐほどの爆音も、気にすることはなく、ラシューは引き続き翼に攻撃した。

エベニーソルは、ラシューの攻撃に怯む。

「おらおら〜！〜！！」

ラシューは連続攻撃をくり出すが、エベニーソルは攻撃から逃れるためか、空中に飛び上がった。

(リオレウスの空中攻撃は、厄介なんだよな)

ラシユーはエベニーソルから離れようと、走った。

エベニーソルは空中で火球を三個放った。

(やばー!!--!)

ラシユーは二つ避けたが、最後の火球が地面に当たり、爆発した時の衝撃をくらい、吹き飛ばされた。

「くそ!!--!」

ラシユーが言って立ち上がった時、エベニーソルはラシユーに近づき、猛毒が仕込まれている足で、ラシユーを蹴ろうとした。

「何!!!!!!」

ラシューは回避しようと横転するが、片足が当たり、エベニーソルの爪が鎧を突き破り、腹部にくい込んだ。

「ぐ!!!!!!」

エベニーソルの爪が離れると、ラシューは腹をかかえながら、解毒薬を飲んだ。

343

するとエベニーソルは、再び火球を三発放った。

「やっべ!!!!!!」

ラシューは連続して横転し、全て避けた。

エベニーソルは続けてラッシューに爪を向け、襲いかかった。

「なめんなー!!」

ラッシューは太刀を前方に突きだし、エベニーソルの翼に突き刺そうとした。

グオオオオウ!!!

太刀はエベニーソルの翼膜を貫き、地面に墜落した。

「回復しないとー!!」

ラッシューは回復薬を飲み、傷を癒す。

するとエベニールは立ち上がり、突進した。

(速い!!!)

ラシューはエベニールの突進を横転して、かろうじて避けた。

だがエベニールは、急激に方向転換し、ラシューに再度突進した。

「な……!!!」

ラシューは避けることが出来ず、もろにくらった。

「がは……!!」

ラシューはエベニールの頭部に激突し、吹き飛ばされ、壁にぶつかった。

「くそ！なんて強さだ！！」

ラッシューが言い、立ち上がろうとした、その時。

ガアアアアウ！！！！

エベニーソルは、既に火球を放っていた。

ラッシューに避ける術はなかった。

「ぐわ！！！！」

ラッシューは再び吹き飛ばされ、爆発の衝撃で、崩れた壁の破片の石が、ガラガラと音をたて、ラッシューに降り注いだ。

ラシューの姿は崩れた石で見えなくなった。

グオオオオオ!!!

エベニールソルの咆哮が、勝者と敗者が決まったのを物語っていた。。

(何だ……ここは……)

ラッシューは、夢を見ていた。

周りは暗く、自分の姿以外、何も見えない。

(そうか、俺・・・負けたんだ。じゃあ、ここは、天国に行く前に通る道なのか?)

ラッシューはそう思った。

すると、前方が明るくなった。

そこには、30代後半とおもわれる男性と、10代前半とおもわれる少年が、何やら細長い骨を持っていた。

(何だ、あれ・・・?)

ラシユーはそう思った。

「じゃあ、稽古を始めるぞ、ラシユー！」

男が言った。

(ラシユー？何で俺の名前を？いや、これは……、知っている？
あれは、昔の俺？！)

ラシユーはびっくりした。

前方にいる少年は、十年近く前の、自分であった。

(じゃあ、あのでかいのは、親父か！?)

ラッシューがそう思った時、前方にいる少年が、

「はああああー！ー！ー！」

と、『大骨』とおもわれる太刀で、素振りを始めた。

「よし、型は大分出来てきたな。じゃあ、勝負をしようか！」

ラッシューの親父、ライレルが言うと、少年のラッシューが、

「よっしゃー！本気でいくぜー！ー！」

と、無謀とも思われる言葉を言った。

（そついや言ったな。そんなこと。確か、一本もとれずに、疲れ果

てて倒れたっけ)

数十分続いたが、ラシユーの予想通り、一本もとれず、倒れた。

「くそ・・・やっぱり親父はすげえな」

「これでも、ハンターたちの憧れの的だからな。負ける訳にはいかないよ」

ライレルが言うと、急に改まって、

「なあラシユー。お前の『夢』って、何だ？」

と、真顔で言った。

「夢？そりゃ、親父のように、英雄になることだ！！」

「はっはっは。叶いそうにない夢だな」

「何だと!!」

少年のラッシューが怒った様に言った。

「まあ、英雄になれるように頑張れ。ところでラッシュー、英雄になるために必要なものは何だと思う?」

「そりゃ、誰にも負けない強さだろ?」

「それも必要だが、俺が思うには、夢と誇り、だと思っんだ。夢を叶えるために強くなり、誇りのために戦う。それが大切じゃないかと、俺は思う」

ライレルがそう言った後、見ていたラッシューは考えていた。

（夢……。俺の夢は、変わらない。でも、護るべき存在が出来た。カナハル、ハルカ、ギイ。いや、皆、護りたい。そうだ、今そのために戦っていたんじゃないか。俺が勝たないと、みんな死んじゃう！）

そう思った時、辺りが光りに包まれた。

グオオオオオ！！！！

遠くで竜の咆哮が聞こえた……。

身体中が痛みに襲われた。

（あれ、俺、生きてる？）

瓦礫の隙間から、漆黒の竜が見えた。

漆黒の竜、エベニーソルは、とどめをさすべく、口に火球を溜め始めた。

（まだ終わっていない！俺は、みんなを、護る！！俺の誇りを賭けて、みんなを護る！！！！）

ラシューは武器を持ち、力をこめ、瓦礫を吹き飛ばした。

ガラガラガラガラ

音をたて、瓦礫が崩れ、ラシユ一の姿が現れた。

エベニーソルは、びっくりしたのか、一時的に動かなくなった。

ラシユ一の姿を見た龍王は、

【ナンダ、アレハ？】

と、驚いた。

ラシユ一の全身と、太刀『エクディシス』の刀身に、赤いオーラみたいなものが纏まとっていた。

それはラシユ一自身も驚かせるものだった。

(なんだこれ？だけど、体が軽く感じる)

ラシューがそう思った時、エベニーソルは正気に戻り、突進してきた。

前と同じほどの、凄まじい速さだ。

(見える。アイツの動きが、はっきり見える!!!)

ラシューは素早く避けると、前のめりに倒れたエベニーソルの尻尾に斬りかかった。

ズザーー!!!!

今まで弾かれていたが、この攻撃は違った。尻尾をエベニーソルの体から切り離れた。

グオオオオウ!!!!!!

エベニーソルは苦しみに悶えた。

(不思議だ。痛みを感じなくなった)

ラシューはそう思いながら、エベニーソルの翼に斬りかかった。

グオオオオウ!!!!!!

一発ごとに、エベニーソルの翼から大量の血が吹き出した。

だが、エベニーソルは一瞬の間をつき、上空に飛び上がった。

だが、翼はぼろぼろで、おぼつかない。

その時、頂上にある扉が開いた。

「ラッシュー！！！」

ラッシューが見ると、そこにはカナハル、ハルカ、ギイ、そして黒い双剣を持った、赤い防具に身を包んだ男が立っていた。

【ドウヤラ、コイツノマケノヨウダナ】

不意に聞こえたと思うと、龍王がエベニーソルの近くまで飛んできた。

「あれは……ライレルさん!？」

カナハルが龍王の姿を見て、驚きの声をあげた。

「まさか！！ライレル様！？」

赤い防具に身を包んだ男が言った。

【キサマラノイウ、ライレル、トハ、コノカラダノアルジノコトカ
？】

「答える龍王！貴様は、何者だ！！！」

ラッシューが叫んだ。

「くくく。我の名は龍王スサノオ。龍王というのだから、我の真の体は龍。だが、今、我は人の体をしている。それは、貴様らが言うライレルの体を支配したからだ。では、ライレルとかいう奴は、どうなったと思う？」

「ま、まさか！！！」

ラシューは信じたくない事実を出した。

「さて、ここまでだ。しばらくは休んでくれたまえ。我も戦力を集めないといけないのでね。さらばだ」

そう言うと龍王とエベニーソルは、何処かに飛び立った。

「何なんだ。やつは？」

カナハルがそう言った時、ラシューに纏っていた赤いオーラみたいなものが消えた。

その瞬間、ラシューは口から血を吐き、ドサツ、と倒れた。

「おいラシュー！しっかりしろ！！」

カナハル、ハルカ、ギイはラシューに駆け寄った。

ラシューの姿を見て、赤い防具に身を包んだ男は、

（まさかこいつ。ライレル様の息子か？いや、それよりも、さつきこいつは、『鬼人化』状態だった、太刀使いなのに？いや、ひよつとしたら・・・）

その男はしばらく考え、そして。

「とにかく、塔をおりよう」

と言った。

カナハルたちは、エベニールスの尻尾と、前の広場に横たわっているキリンの剥ぎ取りをして、降りていった。

この塔の激闘は、結論から言つと、龍王たちの勝利だった。

しかし、龍王は小声で言った。

「ラシューー。極みに近づく、か。これは、勝利であり、また敗北かもしれないな……」

グウウウウウ……

エベニーソルが悔しそうに鳴いた。

【ククク。オマエニヒメラレタチカラハ、アンナモノデハナイ。モット、ヒトヲコロシ、ニクヲクラエ。ソウスレバ、ミエテクル】

と、語りながら、心の中では、この竜に対する興味が沸くのを感じていた。

（しかし、我も恐ろしい竜を見つけたものだ。自身で殺したものの肉を喰らうたびに強くなる。『進化する竜、エベニーソル』、か。これからが楽しみだな）

塔の入り口の前の広場には、生き残ったハンターたちが立っていた。彼らは、塔にいた古龍を全て倒したのだ。

赤い防具に身を包んだ小男、ハルカ、ギィ、そしてラシユーを背負ったカナハルが塔の入り口から出てきた。

「さあ！！剥ぎ取ったら、帰るぞ！！我らの街、ドンドルマに！！！！！！」

小男が言うと、辺りから歓声が沸き起こった。

それは、この古塔の激闘の終わりを告げる歓声のようだ。

だが、龍王との全面戦争は、更に奇烈を極めることになる・・・。

第二十六話（後書き）

今回で『古塔』篇は終わりになります。

次回から新シリーズに突入します。

ちなみに次回から前書きに登場人物のプロフィールをのせたいと思います。

今頃になっての説明なので、イメージが出来ている人もいますが、宜しくお願いしますm()m

第二十七話（前書き）

【登場人物紹介第一回】

ラシュー・クルトイオン

年齢：23歳

身長：180cm

体重：70kg

使用武器：太刀

顔：28番

レウスレイヤ

髪型：10番

髪色：茶色（赤191 / 緑122 / 青89）

防具：リオソウルU

血液型：O型

本作品の主人公。『剣聖』の異名で知られる英雄ライレルの息子。一度決めたら決して曲げない性格だが、仲間思い。カナハルとは旧知の仲。ハルカに恋心を抱いているが、声には出さない。

作者コメント：当初は周りに目がいかない、突っ走る性格にしようと思っていたが、物語の進行上、変更を余儀なくされた。武器の『エクデシス』は作者がよく使うので、これに決めたが、今になって『ラスティクレイモア』にすれば良かったと後悔している。また、髪色も青色にすれば良かったと、これまた後悔。

第二十七話

塔の激闘を生き残ったハンターたちが凱旋した日の夜……。

ラシューは依然として意識が戻らず、ドンドルマの街にある病院で診察されたが、命に関わるような外傷はなく、実家で安静にさせるように、と言われて、カナハルに抱えられて、帰っていった。

また、同じように、塔で気を失った総隊長レギンレイヴも、自宅で安静に、と言われた。

この日、大長老から緊急召集がかかり、夜遅くに集会が行われた。

それは、龍王の思惑を止めることが出来なかったこと、しばらくの間、街に攻撃はこないこと、引き続き、各フィールドのモンスターを討伐するよう、といった内容だ。

ハンターたちは、集会が終わると、意気揚々とフィールドに向かっていった……。

二日後・・・。

上位ハンターのみに入ることが許されている、大老殿。

コンコン

扉をノックする音が響く。

「レギンレイヴです」
「入れ」

中から渋い声が聞こえると、レギンレイヴは扉を開けた。

そこには、大長老と、八人のハンターがいた。

「怪我は大丈夫かな？」

大長老が言った。

「日常生活には支障はありません。しかし、まだ痛みは消えませんが、狩りに行くのは難しいかと思えます」

369

「そうか。さて諸君。ここに集まってもらったのは、他でもない。ドンドルマ最強の猟団、『太陽の樹』を復活する」

大長老の声が大老殿に響く。

ちなみに猟団というのは、ギルドを拡大したようなものだ。

「一ついいですか？大長老」

「なんじゃ、バリガン」

「復活するのはいいのですが、カルマさんと、リーダーのライレル様がいません」

バリガンと呼ばれた者が言った。

「カルマは、先の古塔の戦いで戦死した。ライレルについてだが、気になることがあると、ローランが言っている」

大長老が答えた。

「はい。私は塔の頂上で、龍王の姿を近くで見ました。その姿は、ライレル様そのものでした」

「何!？」

レギンレイヴは驚きの声をあげた。

「しかし、塔の戦いの前に、密林を飛んでいた『古龍観測局』の気球に乗っていた乗組員の竜人族の老人が三人いたが、彼らは龍王の姿を近くで見たが、そのことについては言っていません。おそらく、ライレル様の姿ではなかったからでしょう」

「焦らすなよ。早く結論を言えよ、ローラン!!」

「私語を慎め、アルマーズ」

レギンレイヴが、アルマーズに注意すると、アルマーズは怒って、

「ああん？オオナズチに殺されかけた甘ちゃんが、よく言っぜ!?!」

「アルマーズ、黙れ……」

「お前もレギンレイヴの肩を持つのかよ、アイク!!」

アルマーズは大声を出して怒り狂った。

「アルマーズ！静かにしろ！！話しはまだ途中だ!!」

大長老がアルマーズに注意した。

「ち……わかったよ」

「話しを続ける。あくまで私の推測だが、龍王は精神を自分の本来の姿の龍から、人の体に移ることが出来るのではないか、と思う。そしてその人間の体の持ち主の精神は死んでいる。つまり、ライル様はもう、生きていない」

「まさか。ライレル様が、殺られるなんて・・・」

レギンレイヴは悲しそうに言った。

「とにかく、事態は最悪じゃ。だからこそ、『太陽の樹』を復活させる必要があるのじゃ。リーダーがいない以上、わしが指示する。メンバーはお前たち九人。よいな！」

「はい！！！！」

全員が言った。

「さて、これからじゃが、レギンレイヴは回復したら砂漠に向かってくれ」

「わかりました！」

レギンレイヴが言った。

「ローランは火山に向かってくれ」

「はい！」

ローランが言った。

「ハノンは森丘に向かってくれ」

「承知した」

ハノンが答えた。

「ラーチェルは沼地に向かってくれ。君のライトボウガンの腕、期

待しておるぞ」

「まっかせなさい！」

ラーチエルと呼ばれた女性が元気よく答えた。

「ブルーニヤ、アイク、バリガンは、最近新たに発見された、『樹海』という所に行ってくれ。ここにはどんなモンスターがいるのか分からないせいで、ハンターが行かないのじゃ。そこで君たちに調査及び討伐をしてもらう。まあ、ブルーニヤの片手剣と、アイクの狩猟笛と、バリガンのランスの腕があれば殺られはせんじやろう」

「期待に答えられるよう、頑張ります」

「はいよ」

「承知！」

ブルーニヤ、アイク、バリガンが、それぞれ答えた。

「そしてアルマーズ、ジャファルには、ある特別任務をやってもら
う」

「特別任務なあ？」

アルマーズが首を傾げる。

「ライレルの息子を知っているか？」

大長老の問いに、ジャファルが小声で答えた。

「ラシユー・・・」

「そうじゃ。彼は古塔の戦いに参加し、一番早く頂上にたどり着いた。そして一時的じゃが、我らの街への襲撃を遅らせた。彼の尾行を頼みたい」

「ちょっと待てよ。何でそんなやつを尾行しなくちゃなんねえだ！？」

アルマーズが言うと、ローランが答えた。

「彼はもしかすると、太刀使いなのに『鬼人化』を発動出来るかもしれない。いや、それ以上の奥義を出す可能性もある」

「奥義ってなんだ？」

アルマーズの質問に、ローランが答える。

「神の力。『鬼人化』ならぬ、『鬼神化』。読み方は同じだが、効果は断然違う。この『鬼神化』を発動出来たのは、一人だけ。我らのリーダー、ライレル様だ」

「そうじゃ。あれが発動出来れば、大きな戦力になる。だが、死んでしまつては意味はない。そこで、そんな危険を取り除くために、お主らで守ってもらいたい」

大長老が言い終わると、アルマーズが激昂した。

「けー！！んなもんにつき合ってられるか！俺はやんねえぞー！！」

「アルマーズ！！大長老の命令だぞー！！」

「なんだよレギンレイヴ！！俺は古塔の戦いで、古龍を四体、倒したんだ！！俺はてめえなんかと違うんだよー！！！！」

「そう言うお前は、あの人数のハンターを仕切れるのかー！！！！」

レギンレイヴとアルマーズが一触即発の状態になった、その時。

「静かにしてくれないか・・・」

ジャファルが二人に近づきながら言うと、二人は震えあがった。

（こ、こいつ・・・さっきの、本気の殺意だったじゃないか！）

（私でさえ動けなくなるとは・・・『黒衣の暗殺者』の異名は、だてじゃないな）

アルマーズとレギンレイヴはそれぞれ思うと、二人は離れ、言葉を言わなくなっていた。

「大長老。その任務は俺一人で出来る。それに、こいつがいると任務に支障が出る」

ジャファルはアルマーズを指差して言った。

「そうか。なら、その任務はジャファルに任せよう。アルマーズは雪山に向かってくれ。好きに暴れて構わない」

「まあ・・・それならいいぜ」

「はい……」

アルマーズとジャファルがそれぞれ言った。

「では諸君、頼んだぞ。解散する!!」

大長老が言うと、九人のハンターは大老殿を出ていった。

一人になった大長老は、

（さて……問題は龍王が、いつ街に攻撃を仕掛けるかじゃないかな……）

と思った……。

翌日……。

ラシユーは意識を取り戻し、すっかり元気になっていた。

この日、ラシユー、カナハル、ハルカ、ギイは鍛冶屋に集まっていた。

「どうですか。『ブラックテンペスト』は直りそうですか？」

カナハルが尋ねた。

「まだ時間がかかる。何しろ盾に大きな穴が開いているし、槍自体も損傷が激しい。まったく、キリンの攻撃はすげえな」

鍛冶屋の親父が言った。

「そうですか……。あれが俺の最強の武器なんです」

「そうだな……。代わりの武器は、何かあるのか？」

「ええつと……。『ガトリングランス改』なら、自宅にあります」

カナハルが言った。

ちなみにガトリングランス改とは、火属性のランスだ。

「まあ、当分それを使うしかないな。こっちも、なるべく早く直すからな」

「はい、お願いします」

カナハルは頭を下げた後、四人は鍛冶屋を離れた。

「さて、これからどうするか・・・」

ラシユーが言うと、カナハルが答えた。

「ラシユーは、まだ万全じゃないし、俺の『ブラックテンペスト』も使えないからなあ。危険なことは出来ない」

するとハルカが、

「あの・・・ポツケ村に行きませんか？」

と言った。

「ポツケ村？確か、ハルカさんの故郷ですよね？」

カナハルが言った。

「はい。両親に会いたくなって……。無事なのか、心配なんです」

「うん、わかった。ポツケ村に行こう」

ラシユーが言った。

「おいラシユー。無理はするなよ」

カナハルが気遣うが、とうの本人は、

「大丈夫だつて！早くモンスターを討伐したい、って体が言ってる
ようなもんだぜ！！よし、じゃあ準備するか！！」

と、のんきに話した。

「まあ、いいけど・・・」

カナハルは小声で言った。

四人は別れたところで、黒衣に身を染めた男が路地裏から現れた。

「ポツケ村か。じゃあ雪山に行く可能性があるな。アルマーズと同
じか・・・。先が思いやれるな」

黒衣の男は小声で言うと、その場を離れた。

黒衣の男に全く気付いていない四人は数時間後、集合した。

「さて、行くか。ポツケ村に！！」

ラシューが元気よく言った。

その後ろに、黒衣に身を染めた男が立っていた。

「さて、行くか。俺の相棒、『プロミネンスボウ』」

背中にある赤い弓に語ると、ラシューたちに気付かれないように歩き始めた。

第二十八話（前書き）

【登場人物紹介第二回】

カナハル・ムーンスフト

年齢：23歳

身長：175cm

体重：67kg

使用武器：ランス

顔：31番

髪型：23番 ボボロンゲ

髪色：青色（赤0 / 緑0 / 青255）

防具：クシヤナス

声：15番

血液型：A型

生真面目で、しっかりと意見を出したりするが、ラシユーのいい加減な行動に悩まされることがある、苦勞人。本作品の脇役。ラシユーの行動で本心が分かるようで、それはラシユーのハルカに対する思いも瞬時に理解したほど。

作者コメント：武器と防具を見る限り、こいつが一番強いのではないかと思う人がいるかもしれないが、これは作者の後先考えずに設定したことが原因の重大ミス。もうちょっと下げれば良かったと後悔している。

今思うが、作者は最初の設定が甘すぎる・・・

第二十八話

一年中、白銀の雪で覆われた大地、《雪山》。

この雪山の近くに位置する《ポツケ村》に、ラシユーたち四人は夜に到着した。

「やっと着いたか」

ギイは背伸びしながら言った。

「今日は私の家でお休みしてください。案内します」

ハルカは先頭に立ち、歩き始めた。

「はい。お願いします」

カナハルが言った。

四人は歩き始めた。

コンコン

ドアをノックする音がする。

「どちら様ですか？」

中から女性の声が聞こえた。

「お母さん、ハルカだよ」

ハルカが言うと、すぐにドアが開いた。

「ハルカ！ああ、無事だったんだね。あの騒ぎの後、すぐ出発したんだから、心配したのよ」

「ごめんなさい、お母さん。でも、私は大丈夫よ。お父さんは？」

「雪山に『雪山草』を摘みに出掛ける。朝までには帰ってくると思うわ。おや、後ろの三人は、どなたかしら？」

ハルカの母親は、ラシユーたちを見て言った。

「私が所属しているパーティーの人よ」

「ラシユーです」

「あら、あなたは知っているわ。この村が襲われた時、ドンドルマから来た人ね。凄い活躍だったらしいよ」

ハルカの母親が言うと、ラシューは照れながら、

「いやあ。当然のことをしたまです
と言った。」

「はじめまして。僕はカナハルです」

「俺はギイ。よろしく!」

「こちらこそ。私はハールといいます。いつも娘がお世話になって
おります」

「お母さん。今日この人たちを家で休ませたいの。いいでしょ?」

「もちろんよ!ハルカが世話になっているお礼をしなくちゃ。待つ
ててね、夕食を作るわ」

ハルカの母親、ハールは家に入っていった。

「早く入ろうよ。寒い！」

ギイが体を震わせながら言った。

「そうね。たしか『マフモフ』シリーズが何枚もあったはずだから、
それを着るといいわ」

ハルカは言うと、三人を家に入れた。

ハールが出した夕食は、ポポの肉と『ポポノタン』を使ったシチュ
ーだった。

ポポの肉は栄養価が高く、『ポポノタン』は珍味として有名で、美
味しく、なおかつ温まれる、シンプルな料理だ。

「うまいー!」

ラシユールとギィが揃って言い、ガツガツと食べるように食べていった。

「お前らなあ。もっときれいに食べるよ」

カナハルは少しずつ食べながら言った。

「ハルカ。彼らに迷惑をかけていない？」

ハールがハルカに言っていると、代わりにカナハルが答えた。

「いえ、彼女はよくやってくれています。ボウガンの腕もありますし・
」

「まあ、凄く助けられてるけどね」

そう言っている間にも、ラシューとギイはどんどん食べ進め、すぐにおかわりした。

そんな団らんが続いた・・・。

夕食後、夜も暮れていたので、ギイとカナハルは眠りについた。

ラシューは家の外で、スクワットをしていた。

「早く、体を、直して、戦える、ように、しないと、な」

スクワットをしながら言ったので、言葉が途切れ途切れになっっている。

しばらくスクワットをしていると、ハルカが現れた。

「まだ寝ませんか？」

「ああ、もうちょっと、待ってくれ」

ハルカはマフモフシリーズを着ていた。

「そういえば、ラシユーさんと出会ったの、ここでしたね」

「え……ああ、あの時か」

ラシユーの言うあの時とは、ポツケ村がギアノスたちの襲撃を受けていた時のことだ。

「あの時は、まさかこんなに長く戦いが続くなんで、思っていますんでした」

「そうだな。でも、現実には、起きたんだ。龍王を、倒さないと、帰れないんだ」

「ラシユーさん。龍王の姿って、ライレルさん、なんですよ？」

ハルカが言うと、ラシユーはスクワットを止め、ハルカのいる方向を向いた。

「でも、倒すべき相手だ。例え親父が龍王だったとしても、倒さないといけない。そう心に誓ったんだ」

「辛くはないのですか？」

ハルカが言うと、ラシユーはうつむいた。

「そりゃ・・・辛いよ。親父は、俺の目標と同時に、父親なんだ。そんな親父が敵だなんて・・・。いや、もう死んでいるかもしれないな

い。そう思うと、辛いよ……」

「ラシユーンさん……」

ハルカは気遣おうとするが、言葉が見つからない。

その時、一人の老人が走ってきた。

「お、君はハルカではないか」

「村長さん！どうしたんです、そんなに慌てて？」

「君の父親は帰ってきたか!？」

「いえ、まだですけど。何かあったのですか？」

「雪山を飛んでいた『古龍観測局』の伝書鳩がきた。内容は、雪山に『ドドブランゴ』が現れた、と書いてある！」

「え！？じゃあ、お父さんが危ない！！！」

「幸いまだ犠牲者がたという報告はない。だが、この村にいる上位ハンターは君達だけじゃ。急いでくれ！！！」

「わかった！」

ラシューは言うとお父さんの家に走った。

「私も準備しないと」

ハルカも家に向かって走った。

「おい起きろ、二人とも!!」

ラシユーは寝ているカナハルとギイを蹴り跳ばした。

「かああ。痛ってえ!!」

「何すんだよ、ラシユー!!」

ギイとカナハルは揃ってラシユーに怒りの声をあげた。

「雪山にドドブランゴが現れた。そこにはハルカの親父さんがいる
!..!」

「何！！急がないと、大変なことになるぞ！！すぐに準備する！！」

カナハルは飛び起きたが、ギイは、

「へ？何？」

と、状況が呑み込めてにいないようだ。

「雪山に行く！！お前も準備しろ！！」

「わ、わかった・・・」

ギイは驚きながらも、体を起こし、準備し始めた。

「さて、俺も準備しないと！！」

ラシューも急いで支度し始めた。

数分後、四人は家を飛びだし、村長のところに集まった。

「こんな夜遅くだから、ハンターたちはいないはずじゃ。まずはハルカの父親の捜索をしてくれ。『古龍観測局』の竜人も捜索しているから、彼らから情報を入手するのじゃ！」

「分かりました!!！」

四人は揃って言い、村を後にした。

「無事でいてくれ・・・」

村長が願いを込めた声を発した、その時。

「少しいいか、村長」

不意に声が聞こえた。

村長が振り返ると、闇に溶け込む黒衣の男が立っていた。

村長は、その男を知っていた。

「まさか、『黒衣の暗殺者』、ジャファル殿か!？」

「そうだ。彼らはなぜ、こんな夜に雪山に向かう?」

「雪山にドドブランゴが現れたんじゃ。しかも、そこには村人が一人いるんじゃよ」

「大丈夫だ。雪山には、アルマーズがいる」

「アルマーズ？あの、『金色の怪物』の異名で知られる、アルマーズ殿か？」

「そうだ」

「はて・・・そのようなハンターは見かけてないな。少なくとも、ポツケ村には来ていないよ」

「何！？・・・まあ、奴のことだから、雪山に向かうだろ。さて、俺も行くとするか」

「そ、そうか。頼む・・・」

村長が言うと、ジャファルは雪山に向かって走り始めた。

(『太陽の樹』のメンバーが二人も来たか。それほどまでに、事態は深刻なのか・・・?)

村長は不安をおぼえた。

かくして、次なる戦いの場は、《雪山》となった。

第二十八話（後書き）

登場人物紹介第一回で、ラシユーの声を書き忘れたので、追加します。

m (—) m

ラシユーの声は、8番です。

第二十九話（前書き）

【登場人物紹介第三回】

ハルカ・マーシャ

年齢：17歳

身長：151cm

体重：43kg

使用武器：ライトボウガン

顔：28番

髪型：24番ナナストレート

髪色：赤色（赤255 / 青0 / 緑0）

防具：クツクD

血液型：A型

声：1番

本作品のヒロイン。性格は優しく、他人を尊重している。可愛らしい外見と性格から、誰もが守りたいと思うが、実はボウガンに天賦の才能を秘めており、一人で十分に戦えるほどの実力を持っている。ラシユーとカナハルを尊敬しているが、ラシユーの恋心に気付いていない。ギイをまるで弟のように扱う。

作者コメント：話の中では防具に関して触れていなかったのですが、ここで初めて紹介することになった。正直、最初と最近の彼女の性格が違っことにびっくりした。

第二十九話

ここは、雪山の洞窟を抜けた開けた場所。

今が夜もあって、綺麗な星空が見られる。

この場所に、一人の男が立っていた。

身長は2メートルを超え、筋肉質な身体を、金色の防具に身を包んだ大男。その手には、群青色のハンマーが握られていた。

「つまらねえ」

大男がぼさつと呟いた。

大男の側には、真っ白な毛並みをもつ牙獣『ブランゴ』が倒れていた。

その体は、おそらくこのハンターのハンマーによって殺されたのか、腹部へこみがある。

「もっと強え奴はいないのか!!」

大男が言った時、別のブランゴが現れた。

ガアアウ!!

ブランゴが威嚇の声をあげた。

だが、大男にとっては、ただの戯れ言に過ぎなかった。

「ち、また雑魚かよ」

大男が言った時、ブランゴが間合いを詰め、噛みつきこうとした。

だが、大男は軽くハンマーを振ると、ブランゴの腹部に当たり、ブランゴの体は、その衝撃で吹き飛ばされ、動かなくなった。

「ブランゴが結構いるってことは、『ドドブランゴ』もいるな。早く姿を現せ!!!!」

大男が叫ぶと、聞こえていたのか、辺りに、

ブオオオオオオ！！

という何者かの声が響いた。

「へ、やっと現れたか！」

大男が振り返ると、上空から大きな白い牙獣が現れ、地面に着地した。

大きな牙と髭が特徴で、ブランゴの倍近い体格をもつ者。

これこそ、ブランゴの群れのリーダー、雪獅子『ドドブランゴ』だ。

グアアアアウ！！

ドドブランゴが威嚇の声をあげた。

「そっいゃ、『太陽の樹』の掟があったな。ち、面倒くせえな。い

ちいち殺す相手に名乗らないといけねえとはな」

大男は言うど、ハンマーを構え、

「アルマーズだ。俺を少しでも楽しませてくれよお！！！」

と言うど、ドドブランゴに突っ込んでいった。

そんな戦いが始まった時、麓のキャンプ広場には、ラシユーたちがいた。

「こんな状況だから、支給品はないか」

ラシユーはアイテム箱を開いたが、何も入っておらず、愚痴るように言った。

「あああ。ここでも随分寒いや。ホットドリンク持ってきて正解だぜ」

ギイは言つと、体を暖める飲み物、『ホットドリンク』を飲んだ。

他の三人も同様に『ホットドリンク』を飲み、キャンプ広場を後にした。

最初にやってきたのは、洞窟に入る穴がある所だ。

ここにはギアノスたちが五体いた。

ラシューたちを見つけると、一斉に

ギヤアア、ギヤアア

と鳴き出した。

「お父さんは雪山には詳しいです。隠れるとしたら、洞窟の中だと思えます」

「そうか。じゃああの洞窟に入るか。時間がない、一気に突っ切るぞ！」

ラシューは言うと、ギアノスたちを無視し、洞窟の前にある段差を登り、洞窟に入るうとした。

その時、一体のギアノスがラシューに飛び掛かった。

「やべー！」

だが、ラシューに当たる前に、咄嗟にギイが片手剣『アッパータバ
ルジン』でジャンプ斬りして、ギアノスを吹っ飛ばした。

「サンキュー、ギイ！」

ラシューは登り終わると、カナハルたちが登り始めた。

その都度、飛び掛かってくるギアノスを、ラシューは太刀『エクデ

『イシス』で斬りつけた。

全員登り終わると、洞窟に入っていった。

「お父さーーん。ハルカだよ！！助けに来たよ！！！！」

ハルカが叫ぶが、返事はない。

「くそ。ここにはいないか。進もう」

ラシューが言うと、他の三人はついていった。

しかし、洞窟全てを調べたが、ハルカの父親は現れない。

「残るのは、山頂か。あんな所にいるとは思えないが・・・」

ラシューが言った、その時。

グオオオオウ

という鳴き声がした。

「まさか、『ドドブランゴ』か!？」

「山頂の方だ。急ごう!！」

カナハルが言うと、ラシューが

「そうだな!！」

と言い、走り始めた。

その最中、ハルカは祈っていた。

(お父さん。無事でいて!!--!!--)

洞窟を抜けると、雪獅子『ドドブランゴ』が立っていた。

「現れたか！」

「まてラシユー。様子がおかしい」

武器を抜くラシユーをカナハルが止めた。

ドドブランゴの牙は二つとも折れていて、身体が血まみれだ。それに、目は焦点があっていない。

「何なんだ？」

ラシユーが言った時、ドドブランゴはゆっくりと前のめりに倒れた。そしてその後ろには、血だらけのハンマーを抱えた、一人のハンターが立っていた。

「ち、これで終わりか」

大男が呟いた。

「誰だ？」

ラシユーが呟いた。

「てめえら、こんな夜に何の用だ？」

大男がハンマーを砥石で研ぎながら言った。

「あの、ここにお父……。人が来ませんでしたか？」

「そんなん見るわけないだろ。こんな夜に人がいる事態おかしいぜ。まあ、俺は特別だからな。はっはっは・・・」

大男が高笑いした。

「やっぱり頂上にいるんじゃないか？」

ギイがぼそつと呟くと、カナハルが、

「頂上に行くか、ラシユー」

と言つと、ラシユーが

「そつだな」

と言い、頂上に行こうとした。

「おい待て」

不意に大男が言った。

「何でしょう?」

ラシユーは丁寧に言った。

「てめえの名前はラシユーか?」

「はい。そうです。」

「そうか。てめえがラシユーか。随分弱そうだな」

「何!?!」

ラシユーが怒りの声をあげた。

「俺の名前はアルマーズ!!! 『太陽の樹』のメンバーだ!!!」

「太陽の樹!？」

ラシューとカナハルが驚く。

「何だ、『太陽の樹』って?」

「知らないのか、ギィ。『太陽の樹』は、ドンドルマ最強の猟団だ。ラシューの父親のライレルさんがリーダーを努めてる、エース集団だ」

「しかもアルマーズって言うと、『金色の怪物』の異名で知られる人だ。その戦闘力は、親父に次いで二番目に強いって言われている」

カナハルとラシューがそれぞれ答えた。

「そういうことだ。ラシュー!! 貴様は古塔の戦いの活躍で、大長老から注目されてるぜ」

「まじか!?! すごいや!!」

「なんでも、貴様は『鬼人化』が出来るようだな？」

「え、『鬼人化』は、双剣使いしか出来ないんじゃない？」

カナハルが質問すると、大男がすぐに答えた。

「いや、例外があるんだ。並外れた力がある者は、武器に関係なく発動出来るんだ」

そう言うと、アルマーズは不気味な笑みを浮かべ、

「だが俺はてめえにそんな力があるとは思えねえ！そこでだ。お前の力を見せてみる！！！！」

と叫んだ。

「いや、力を示せ、って言ったってどうするんだ？」

「は！簡単なことさ。俺と、命の獲り合いをすればいいんだ！！！」

「は？」

ラシューは言っていることが分からなかった。

それはカナハルも同じらしく、

「何を言っているんですか？」

と疑問を言った。

「分からん奴らだな。この俺と、殺し合う！！それだけだ」

「待て！そんなことして何になる！？」

ラシューの言葉が分からないのか、アルマーズは二本の角が象徴的な、金色の頭部用防具をかぶり、置いていたハンマーを構え、言った。

「剣を構えろ！じゃないと・・・」

その瞬間、辺りに強烈な殺気が走った。

この時ラシューは理解した。

この男は冗談を言っているのではない。この異常なまでの殺気が、そう告げている、と・・・。

アルマーズはラシューに向かいながら言った。

「本当に死ぬぞ」

こうして、ラシューたちの望まぬ戦いが始まった・・・。

第三十話（前書き）

【登場人物紹介第四回】
ギイ・ソフアラ

年齢：18歳

身長：165cm

体重：55kg

使用武器：片手剣

顔：21番

髪形：20番 「コックトウヘア」

髪色：紫色（赤255 / 緑0 / 青255）

防具：ガルルガシリーズ

血液型：B型

声：17番

本作品の脇役。自分勝手に口が悪いが、いざというとき役に立つ、曲者。恋愛には鈍感。ハンターになって一年たつてないが、実績はなかなか良い。片手剣の扱いが新米とは思えない程の腕前を持つ。

作者コメント：作者自身こいつの存在を忘れてしまうことがあり、話の中でラシューたちの会話に参加していない場面を作ってしまったことがある。最近、ちゃんと活躍の場面を与えている。

第三十話

アルマーズはラシューに、鬼の形相を浮かべながら向かっていった。

その殺気を感じたカナハルは、万全の状態ではないラシューの前に立ち、『ガトリングランス改』を構えた。

「邪魔なんだよ!!!」

アルマーズは群青色のハンマーを横に振った。

「ぐわ!!!」

ハンマーはカナハルの盾に当たると、カナハルは、その衝撃で横に吹き飛ばされた。

「何するんだ!!!」

ラシューが叫ぶが、アルマーズは聞く耳を持たず、ラシューにハンマーを振り降ろした。

「くそ！」

ラッシューは横に跳んで避けた。

ハンマーは地面にぶつかり、その衝撃で雪が飛び散った。

「何で戦わないといけないんだ！！」

「うるせえ！！早く太刀を構えろ！！」

ラッシューの声に、アルマーズは怒鳴り返した。

「マジかよ……」

ラッシューは戸惑いながらも、太刀『エクディシス』を抜刀し、構えた。

「いくぜ！！」

アルマーズはラッシューに向かっていった。

ラシユーはなるべく傷つけないように、峰打ちをした。

すると、アルマーズは当たる直前に突然、右手を伸ばした。

ガシッ！

「何!!！」

アルマーズは太刀を掴んだ。

しかも、ラシユーの全力の力で振ったにもかかわらず、アルマーズは右手だけで止めた。

「てめえ、俺を舐めてるのか？」

アルマーズは言うつと、ラシユーの腹部に蹴りをくらわした。

「ぐわ!!！」

その蹴りの威力は凄まじく、ラシユーは5メートルほど吹き飛ばされた。

「てめえの力はそんなもんか？期待外れだぜ」

「もうやめてください！」

突然ハルカが、倒れているラシユーの前に立った。

「ああん？女は黙ってる」

「ラシユーさんは、塔の戦いで傷を負って、まだ治っていないんです！」

「はっ！！戦場でそんな理屈が通じるとでも思ってるのか！！」

アルマーズが叫ぶ。

「戦いは不平等が普通だろ？そんな考えなら、ハンターなんかやめ

「ちまえ！！！！」

「とにかく！こんな意味のない戦いはやめてください！」

「嫌だと言ったら？」

アルマーズが言うと、ハルカは、ボウガン『ド【鳥】』を構えた。

「あなたを狙って、撃ちます」

ハルカが言うと、アルマーズは何故か、ハルカに向かって歩いてきた。

ハルカの後ろには、未だ倒れているラッシューがいる。

「こ、来ないでください！」

ハルカの声が聞こえていないのか、アルマーズはどんどん近づいてくる。

(すみません！)

ハルカは、そう思うとボウガンの引き金を引いた。

ドオオオオン！！

『ド【鳥】』から放たれた通常弾は、アルマーズの腹部に近づく。

だが、弾が当たる瞬間、信じられないことが起きた。

ガアアアアン

鈍い音がした。

「そんな！？」

ハルカは仰天した。

アルマーズは、ものすごいスピードで迫る弾を、ハンマーを横に振り、通常弾を打ち返したのだ。

しかも、そのハンマーの振りの速度は異常だった。例えるなら、片手剣や双剣の最初の一振りと同等の速さだ。

「雑魚が、意気がるな」

アルマーズは突然ハルカの腕を掴むと、そのまま横に投げ飛ばした。

「きゃああー!!」

ハルカの体は宙を浮き、3メートルほど吹き飛ばされ、地面に激突した。

「ハルカさん!!」

ギイが叫ぶが、ハルカは

「うっう」

と、うめき声をあげるだけだった。

「てんめえー!!」

ギイは叫び、アルマーズに突っ込んで行った。

「だから邪魔なんだよー!!」

アルマーズはギイの片手剣が当たる前に、勢い良く回し蹴りをした。

「がっ!!」

アルマーズの回し蹴りはギイの腹部に当たり、ギイの体は横に転がった。

するとその時、

「てめえー!!」

不意にラシユーの声が聞こえると、ラシユーはアルマーズに斬りかかっていた。

アルマーズは避けようとするが、腹部を斬りつけられた。

アルマーズの鮮血が宙に舞う。

「てめえ……」

アルマーズは一旦間合いをとる。

「はあ、はあ。俺は、てめえを許さねえ!!」

ラシユーは叫んだ。

「ほおづ。いい目になったじゃないか。だが、まだまだ。『鬼人化しろよ』」

「うるせえ!!」

「分からん奴だな。しょうがない、見本といくか」

アルマーズは言つと、右手でハンマーを持ち、左手をハンマーの攻撃部分に当てた。

「いくぜ・・・鬼人化!!!」

アルマーズが言った瞬間、身体とハンマーに赤いオーラが纏った。

「こ、これが・・・鬼人化か」

カナハルは体を持ち上げながら言った。

「いくぜえええ!!!」

アルマーズが言い、ラッシューに向かおうとした、その時。

ヒュウウウン

と、何かが飛んでくる音がした。

「な!？」

アルマーズは瞬時に察知し、自分に向かって飛んでくる何かをハンマーにぶつけた。

ガアアアアン

と、音がした。

飛んできたのは、弓矢らしきものだった。

次の瞬間、

ドオオオオン!!

と、爆発音がした。

アルマーズのハンマーは吹き飛ばされた。

アルマーズは鬼人化を解くと、飛んできた方向に目を向けた。

「誰だ!!!」

アルマーズが叫ぶ方向は、山の西側に続く道があった。

すると、黒衣に身を包み、手に赤い弓を持っている、一人の男が姿を現した。

「お、お前……。ジャファルか？」

「ああ、そうだ。派手にやったな、アルマーズ」

ジャファルと呼ばれた男は、頭部用防具を外した。

「な、なんだ？」

ラシューは突然の出来事に、アルマーズへの殺意も忘れて、ただ立っていた。

「アルマーズ。これはどういうことだ？」

「な、何のことだ？」

アルマーズは、何かに脅えた様子で言った。

「大長老の任務で、あの男を守るはずだっただろう？それを、殺そうとするとは……」

ジャファルが言った瞬間、まるで深海の様な、深く、重く、そして冷たい殺気がアルマーズに向けて発せられた。

「す、すまん。悪かった。謝るから、その殺気は止めてくれ」

あのアルマーズが、へっぴり腰になっている。

ジャファルは、ラシューに向かって歩いていった。

「アルマーズが世話になったな。悪かった。俺はジャファル。『太陽の樹』のメンバーだ」

「もしかして、『黒衣の暗殺者』の異名で知られる、あのジャファル殿か!？」

カナハルが立ち上がり、言った。

「何だ? すごいのか?」

ギイも立ち上がりながら言った。

「ジャファル殿は、『太陽の樹』の影とも言われている。その殺気を向けられた者は、想像を絶する恐怖からか、一步も動けなくなるという逸話で有名な人だ」

「逸話じゃねえ。それは事実だぜ。ちなみに俺は、『太陽の樹』の光とも言われているがな」

カナハルの説明に、アルマーズが付け加える。

「てめえは黙ってる・・・」

ジャファルは再びアルマーズに殺気を向けた。

「わ、分かったよ」

「あの、ジャファル殿。ラシユーを守るとは、どういうことですか？」

カナハルが前に言ったジャファルの一言に疑問をいだき、質問した。

「大長老の命令で、塔の戦いで、ラシユーは『鬼人化』を発動出来たから、体調が整うまでは俺が警護するように、って言われてたんだ」

「そうだったのですか」

「だが、俺の存在がバレてしまったことと、さっきの戦いを見る限り、助けはいらないな。もう尾行は終了だ」

「尾行されてたんですか、俺達・・・」

カナハルが苦笑した、その時、ジャファルが現れた道から、

「ハルカ!？」

と言い、こちらに向かってくる者が言った。

ハルカは走ってくる人を見た。

「お、お父さん？」

「え!？」

ラシューはびっくりした。

「ハルカ!無事だったか、良かった・・・」

ハルカの父親は、ハルカを立ち上がらせ、強く抱きしめた。

「お父さん。やっと、会えた・・・」

ハルカは父親の背中に手を置き、顔を父親の胸に当てた。

ハルカの頬には、目から溢れた、空から降っている雪じゃない、透明の液体が伝つたっていた。

「すまない。だが、もう心配はいらない」

「うん。うん・・・」

しばらくして、二人は少し離れた。

「でも、どうしてここまで？」

「俺が発見したんだ」

ハルカの質問に、ジャファルが答えると、ハルカの父親が続けた。言

「雪山の山頂近くの壊れたテントがある所に隠れていたんだ。『ド
ドブランゴ』の恐怖に覆われていた時に、彼と会ったんだ」

と、ジャファルを指差した。

「それで下山しようとしたら、何か戦いの音がしたから見に行った
ら、この男が暴れていた訳だ」

「ちっ。悪かったな」

ジャファルの声に、アルマーズが平謝りした。

「さあ、下山しよう。夜の山は危険だからね」

ハルカの父親が言った、その時。

ブオオオオオオ

と、強い風が吹いた。しかも、断続的に。

「くそ。目が開けない。立ってるだけで精一杯だ」

ラシューがよろめきながら言った。

やがて、風は落ち着いてきたが、さっきまでとは一変したような天候になった。

「ジャファル!!これって、まさか・・・」

「多分、そうだな」

アルマーズとジャファルは、何かに気が付いたようだ。

「早く洞窟に隠れる!!奴が来た!!」

アルマーズが叫ぶ。

「奴って?」

ギイが言った時、辺りにものすごい突風がおこった。

「うわあ!!」

そこにいた人全てが目を閉じ、屈んだ。

ドオン！！！！

何かが着地する音がした。

ラシユーは目を恐る恐る開けた。

前方に、黒い籠らしきものが見えた。

“スマナイ。コノフブキデハ、ミエナイカ”

何者かが伝えた、その瞬間、風が一気におさまった。

「まさか、く、クシャルダオラか・・・？」

カナハルが目を開けると仰天して言った。

「派手な歓迎だな!!」

アルマーズが言うと、ハンマーを構えた。

“マテ。ワレハ、タタカイニキタワケデハナイ”

「何？」

アルマーズが言うと、クシャルダオラは、ラシユーに目を向けた。

“ラシユー。キミト、ハナシガシタイ”

「はあ？俺と？」

“チヨウジヨウニコイ”

クシャルダオラは伝えると、飛ぼうと羽ばたき始めた。

「待てよクシャルダオラ。俺たちもついてくぜ」

“ナルホド。イチオウ、ヨンデオイテ、セイカイダツタナ”

「何？」

アルマーズが言った、その時。

グオオオオウ!!!

と、声が聞こえた時、

ドオン!!!!

と、黄色の飛竜が着地した。

その姿は、かなり独特だ。前足が極端に太く、顔には大きな顎がある。

「『轟竜』ティガレックスか!!!」

カナハルが叫んだ。

「てめえらは洞窟に入って下山しろ!」

アルマーズが叫ぶ。

「ラシュー!。君は頂上に行くんだ。せつかくの誘いだ。何かあるか
もしれない」

「わ、分かった」

ジャファルの呼び掛けにラシューが返事した。

“アンシンシロ。キガイハクワエン。デハラシュー。マツテイル”

そう伝えると、クシャルダオラは飛び上がり、頂上に向かって行っ
た。

「ラシュー!俺たちは下山する。お前も早く来いよな!」

「ああ!!」

ラシューの声で、カナハル、ハルカ、ギイ、そしてハルカの父親は洞窟に入っていった。

ラシューは見届けると、頂上に向かって走っていった。

「行ったか・・・」

ジャファルが言うと、ティガレックスに目を向けた。

グオオオオウ!!!

ティガレックスが威嚇の声をあげる。

ジャファルとアルマーズは静かに武器を構えた。

「ジャファルだ。その命、貰い受ける」

「アルマーズだ！俺を楽しませろよ！！」

グオオオオウ！！！！

ティガレックスの咆哮が、戦いの火蓋を切った……。。

第三十一話

洞窟に入ったカナハルたちは、外で吠える『轟竜』ティガレックスの咆哮を聞き、恐怖を感じていた。

「大丈夫でしょうか、ジャファルさんたち・・・」

ハルカが心配そうに言った。

「あの二人は『太陽の樹』のメンバーだ。心配はいらないよ」

カナハルが答えた。

するとギイが言った。

「でもラシューさんは大丈夫かな？あのクシャルダオラの言葉も信用できないし・・・」

「確信は持てないけど、あのクシャルダオラは、俺達が戦った古龍たちと、何か雰囲気違った。まるで、スサノオ側についた龍とは別の存在の様に感じるんだ・・・」

「カナハルさんの言う通り、私も、はつきりとは言えませんが、安心感、みたいなものを感じました」

「そっかあ？俺は何も感じなかったけどなあ・・・」

カナハルとハルカの言葉に、ギイは首を傾げる。

「何か言ったって、何も変わらない。私達がやることは、一刻も早く、この雪山を下山することだ」

マフモフシリーズを着ているハルカの父親が言うと、カナハルたちは、

「はい・・・」

と、頷いた。

「はあ、はあ、はあ……」

ラシユーは肩で息をしながらも、雪山の頂上にたどり着いた。

ラシユーの前方には、蒼く輝く多くの星たち、広大な雲海、と言ったような、雪山一の絶景が広がっていた。

“キタカ……”

黒い龍がラシユーの視界に入った。

「話とは、何だ？」

“ソノマエニ、コレニ、フレロ”

『鋼龍』クシャルダオラは、前方の右足を少し上げた。

ラシユーを見ると、緑色の皮みたいなの、小さな物があった。

ラシユーは慎重に近付き、そして、そつと緑色の物体に触れた。

独特の感触だったが、特に変化はない。

「これで、何になる？」

ラシユーが言うと、クシャルダオラはしばらくして答えた。

“ちゃんと聞こえるか？”

「！！！！」

ラシユーは驚き、数歩下がった。

「今まで断片的にしか聞こえなかったのが、今ははっきり聞こえる
！！！！」

“この皮の持ち主の力だ・・・”

クシャルダオラは緑色の皮を持っている足を再び地面につけた。

「誰だ、その持ち主は？」

“我らを統べる者。我らはその方を、『賢者』と言っている”

「回りくどいな。早く言えよ」

“なるほど。お前は直線型か。ははは、父親とは正反対だな”

「！！親父を知っているのか！？」

ラシューは目の色を変えて言った。

“いや、話しただけだ。賢者から教えられた。その賢者の名は、『浮岳龍』ヤマツカミ……”

“ヤマツカミ？何だそれ？”

ラシューは首を傾げる。

“ 別名『最古の巨大龍』。常に浮遊することからその名がつけられた者。彼は、この世の監視者だ”

「監視者？」

“ 賢者は、ラシユーに伝言を伝える、と我に言ってきた。心して聞け・・・”

「わ、わかった・・・」

だが、この伝言が、ラシユーの歩む運命を大きくねじ曲げる根本的な原因になることは、この時誰も知りえなかった・・・。

「へ、結構、やるじゃ、ねえか！」

アルマーズは、肩で息をしながら言った。

アルマーズの体には、所々で血が出ている。

グオオオオオウ！！！！

ティガレックスは、所々で赤い模様が浮かんでいて、その様子から、完全にキレていることが分かる。

「流石に、この寒さで二連戦はキツいな・・・」

グオオオオオウ！！！！

ティガレックスはアルマーズに突進した。

「く！！」

ドオオン！！！！

ジャファルから放たれた矢は、ティガレックスの右足を貫通したが、

それでも突進の勢いは止まらない。

アルマーズは横に翔んでなんとか避けた。

しかし、急激に方向転換し、今度はジャファルに突進していった。

「勢いが止まらない！」

ジャファルは矢を放ち、すぐに横に走った。

矢は頭に当たったが、ティガレックスは全く怯まない。

ジャファルは間一髪で避けた。

「ち、そろそろ決めるぜ！」

アルマーズはハンターに全神経を集中し始めた。

「待てアルマーズ。連続の鬼人化は危険だ！」

「じゃあ、どうするんだよ！！もう飽きた。こいつの攻撃は単調だから、早く決着をつけたいんだよ！！！」

「体を壊す危険があるからやめとけ。その役は、俺がやる」

ジャファルは怒れるティガレックスの前方に立った。

「へえ〜。お前の鬼人化を見るのは久しぶりだな」

「あまりしたいとは思えない力だ。これを使うと、暗殺者ではなくなるからな」

グオオオオオウ！！！！

ティガレックスが吼え、ジャファルに突進する。

だが、突然ティガレックスは止まった。

グウウウウウウ・・・

ティガレックスは唸り声をあげる。

「はは、すげえ殺気だ」

アルマーズはジャファルから放たれる、この世の物とは思えないほどの殺気で、震えあがった。

この殺気を向けられているティガレックスは、瞬時に理解しただろう。

この男は危険だと・・・

「いくぞ・・・」

ジャファルは弓矢をとり、照準をティガレックスに向け、構えた。

「鬼人化・・・」

ジャファルは一言呟くと、全身に赤いオーラに包まれた。

その状態で、弓矢を放った。

第三十二話

ドドドドドオオオオン

ティガレックスに向かって放たれた矢は鬼人化のオーラを纏い、前右足を突き破った。

グギヤアアアア！！！！

ティガレックスの悲鳴が辺りに響く。

「まずは一つ・・・」

ジャファルの冷徹な一言が、さらに恐怖を煽る。

グオオオオオウ！！！！

ティガレックスは恐怖を感じながらも、ジャファルに飛び掛かった。

だが、その攻撃はジャファルには当たらなかった。

「二つ目・・・」

ジャファルは常識はずれのスピードで横に跳び、その中で弓矢を放った。

ドドドドドオオオオン

今度は後ろ右足を突き破った。

グアアアオオオ!!!

ティガレックスは転倒し、もがいていた。

「鬼人化のオーラを足に集めれば、瞬間移動も可能になる・・・」

「さすがだぜ、ジャファル」

アルマーズは離れた所に立っていた。

理由は一つ。巻き込まれないようにするため。

単純な理由だが、実際離れないと命の保証がないのだ。

そうしてる間に、ティガレックスはジャファルに突進してきた。

「くどいな」

ジャファルはまたも横に跳び、突進を避けた。

するとティガレックスは、方向転換し、アルマーズに突進してきた。

まずは弱っている奴を倒す。

こう思っでの行動だろう。

だが、アルマーズの前で、

グギャアアアア！！！！

と悲鳴をあげ、まえのめりに倒れた。

ティガレックスの尻尾が切断されていた。

「鬼人化のオーラを弓矢に集中させれば、太刀に匹敵する切れ味を持つようになる……。アルマーズ、攻撃しろ」

「はいよ！」

アルマーズはティガレックスの頭部に群青色のハンマー『龍壊棍』を叩き付けた。

グアアアオオオ

ティガレックスは立ち上がろうとしたが、アルマーズの攻撃で目眩を起こしたのか、なかなか立てない。

「アルマーズ、離れろ。死にたくなかったらな……」

ジャファルは弓矢に鬼人化のオーラを集め、構えていた。

アルマーズは急いで離れた。

やがて、ティガレックスが立ち上がった。

「終わりだ……」

ジャファルはティガレックスの体を狙って弓矢を放った。

鬼人化のオーラを纏い、赤くなった弓矢はティガレックスの横腹に当たった、その瞬間。

ドオオオオオオン！！

と、激しい爆発が発生した。

辺りが煙りに包まれた。

「俺の最終奥義、『デス・ビックバン・アロー』。狙われた者は、灰塵となす」

煙りがはれると、ティガレックスがいた所は大きく窪くぼんでいて、雪が焦げていた。

ティガレックスの体は、鱗一つ残らず、消滅した。

「はは、すげえや」

アルマーズが言った時、ジャファルは鬼人化を解くと同時に、片膝をついた。

「はあ、はあ……。やはり、この技は諸刃の剣だな。疲れがすぐ来る」

「だがその技は、鬼人化を正確にコントロール出来るジャファル専用の技だ。正直、鬼人化状態のお前は、今の『太陽の樹』のメンバー中、最強かもな」

「世辞はやめろ。アルマーズ、俺を運べ。下山するぞ」

「ラシユーは置いていったいいのか？」

「問題ないだろう。それに、もう下山したのかもな。心配がない」

「そうか？まあ、いいか」

アルマーズはジャファルの体を抱え、弓を持ち、ゆっくりと歩いていった。

「さて、これからどうするんだ？」

「俺は一度ドンドルマに戻る。大長老から新しい任務を貰わないといけないからな。お前は引き続き、雪山のモンスター狩りだ」

「まあ、そうなるわな・・・」

「だが、まずはポツケ村に向かえ」

「わかってるよ・・・」

ここはポツケ村。

カナハルたちは、ラシユールの帰りを待っていた。

「遅いですね、ラシユールさん」

ハルカは心配そうに言った。

「今は待つんだ。必ずアイツは来る!!」

カナハルは手をギュッと握りしめた。

そして十五分後……。

「あれ、ラシユールさんじゃないか!?!」

ギイは前を指差しながら言った。

カナハルを見ると、そこにはまぎれもなく、ラシユールが歩いていた。

カナハルたちは、すぐにラシユーに駆け寄った。

「ラシユー！遅かったな！！」

カナハルはラシユーの肩を手で叩く。

「ああ・・・悪かった・・・」

「どうしました？元気がないですよ？」

「ちょっとな・・・」

ラシユーは、少しやつれたようだ。

「眠いんだろ？早く寝よう！！」

ギイが元気良く言う。

「その前に、皆に言うておかないことがあるんだ」

「ん、何だ？」

カナハルが言うと、ラシユールは一言、言った。

「俺、このパーティー、抜ける……」

第三十三話（前書き）

かなり遅い更新となってしまいました。

現在、自動車学校に通っていて、暇を見つけては執筆をしています。

これからも更新は遅くなると思いますが、頑張っていきます。

m (((m

第三十三話

カナハルたちは、ラシユーが言った言葉を理解出来なかった。

「今、何て、言った？」

「だから、俺はこのパーティーを、抜ける。そう言ったんだ」

「訳わかんねえよ。ちゃんと説明しろよ」

ギイが目を見開きながら言うと、ラシユーはため息を一回して、言った。

「理由は言えねえ。あいつとの約束だからな」

「あいつって、クシャルダオラのことか？お前あいつに何されたんだ！？」

「別に……。さあ、もう遅い。早く寝よう」

ラシユーは言うと、ハルカの家に向かって歩いていった。

「何なんだよ、あいっ」

「でも、明日になったら、考えを変えてくれるかもしれませんが、とりあえず今日はもう寝ましょう」

「そうですね」

カナハルが言い終わると、三人はラシユーの後を追った。

ハルカの家までの道のりの間、ラシユーは一言も喋らなかった……。

午前10時……。

カナハルは一番早く起きた。

「ふあああ。よく寝た・・・」

隣のギイは、まだ夢見心地だ。

「起きるぞお、ラシユー、ギイ」

カナハルは、ふとラシユーの寝ている布団を見た。

「え・・・」

カナハルは絶句した。

その布団で寝ていたラシユーがいない……。その代わりに、一枚の紙が置いてあった。

「何だ、これ・・・」

カナハルは恐る恐る紙を手にとり、書かれている文章を読んだ。

「ラシユーの字だ」

紙には、こう書かれていた。

これを読んでいる時には、俺はもういないだろうな。突然いなくなつて、悪かった。でも、やることがあるんだ。

「やること?」

俺は、親父の歩んだ道を、進まなくてはいけないんだ。

「ライレルさんと、同じ道?」

途方もない道だ。命を落とすかもしれない。そんな茨の道だから、

お前たちを巻き込むわけにはいかないんだ。わかってくれ。

「わかってねえのは、お前の方だろ。俺たちの気持ちも考えずに、勝手に決めるなよ……」

カナハルは涙が瞳から流れ落ちるのを感じた。

手紙は最後に、こう書かれていた。

また、会えるといいな。

「……」

手紙を読み終えたカナハルは、しばらくの間、うつむき、言葉を失った。

そして・・・。

「みんなを、集めないとな・・・」

カナハルは静かに行動した。

「まじかよ・・・」

「まさか、こんなことって・・・」

ギイとハルカは手紙を読み、驚きの一言を述べた。

「さて、これからどうします?」

カナハルがうつむきながら言った。

「どうするって、探すにきまつてるじゃん！」

「だけど、ラシユーはそれを望んでいない」

「そ、そんなの、分からないじゃないか！」

ギイが怒った様に言う。

「今何か言っただって、状況は変わりません！」

ハルカが言っていると、ギイが反論した。

「じゃあ、どうするんだよ、これから！！」

「俺たちでは、決めれないな。大長老の判断に委ねるしかないのかもな」

「じゃあ・・・」

「ああ。ドンドルマに行こう。全てを話そう」

カナハルの意見でまとまった。

そして三人は、ドンドルマに行く準備を始めた・・・。

一方ラシューは、ドンドルマの街を出て、ある場所に向かって歩いていった。

「はあ・・・」

深いため息をついた。

（俺、何してんだろ？思えば、あの時から変だったな・・・）

話しは、雪山の頂上で、ラシューがクシャルダオラの伝言を聞く時に遡る。さかのぼ

“まず、貴様の父親のライレルと賢者は、この世界に来る約一年前に出会った”

「一年前……。親父が『太陽の樹』を解散した半年前だ」

頂上にいる一人のハンターと、一体の古龍。誰かがこの光景を見たら、驚き、そして逃げるだろう。

“出会った時、ライレルはなぜか賢者と戦おうとはしなかった。そして、話を始めたそうだ。我は、その場にいなかったから内容は知らんがな”

「ちょっと待て。親父はヤマツカミとかいう奴の言葉が分かったのか？」

“さあな。それを知るのは賢者だけ……。会いたいのか、賢者に？”

クシャルダオラがラシユーの目を見て言った。

「あ、ああ。親父のことを知ってるんだったらな」

“なるほど。では、賢者に連絡しよう。そうだな・・・二日後の早朝に、古塔の頂上に来い”

「古塔？何でまた、あんな所に？」

“あそこは、お前が参加した戦いがあった後、龍王は放置したままだ。話すには絶好の場所だ”

「そっか？まあいいか。よし、分かった」

ラシユーは言うと、クシャルダオラを横切り、下山しようとし、歩いた。

“ 待て ”

クシャルダオラが突然呼び止めた。

「ん、何だ？」

“必ず一人で来い。仲間を失いたくなかったらな。もし古塔で見かけたら、容赦しない……”

「な……」

“それと、賢者のご機嫌を損ねるなよ。もし賢者を怒らせると、二度と帰れなくなるぞ”

「それは、仲間が来てもか？」

“当然。賢者はお前一人に興味を持っているだけだ。仲間を失いたくなかったら、古塔に来させるな……”

「わ……わかった」

ラシューは言い終わると、ゆっくりと下山し始めた……。

「あんな別れ方じゃ、かえって来るんじゃないかな？」

ラシューは不安になりながらも、古塔を目指して歩いていた。

「賢者と親父。どんなことを話したんだ・・・」

「はあ・・・着いた」

ラシューの前方には、あの戦いがあった場所、古塔が悠然と立っていた。

「よし、行くか」

ラシューは塔に入った。

その後、黙々と歩き続け、ついに塔の頂上に入るための扉まで到達した。

「あの古龍たちの戦いで、賢者とかいうやつは、なぜ俺に興味を持ったんだ・・・」

ラシューは不安になりながらも、重い扉を開けた。

ヒュウウウウ

塔の頂上は、冷たい風が吹いていた。

ラシューは、黒い龍と、緑色の、龍とは思えない、大きな物体を見つけた……。

第三十四話（前書き）

もはやモンハンではありません（^ー^；）

会話文が多くなってしまいました。 场景を表現するのが苦手なもので……。

10日に一回という更新スピードですが、これからちょっと早めようと努力します。

m (ー) m

第三十四話

「あんたが、賢者か？」

ラシユーが緑色の物体に話しかけた。

“確かに、そう呼ばれている”

その者が振り向いた。

体中に苔が生え、人を軽く丸飲み出来そうな巨大な口。何より象徴的なのは、まるでタコのような外見をした、龍とは思えない姿だ。

“お前がラシユーか。なるほど、ライレルに似ている。性格は違うようだな”

「悪かったな。おい賢者、親父と何を話したんだ？」

“そう慌てるな。自己紹介をしていない。我は『浮岳龍』ヤマツカミ。この者たちからは、『賢者』と呼ばれている”

「知ってるって。俺の質問に答えろ」

“あまり賢者を怒らせるなよ”

ラシユーの口の悪さに、クシャルダオラがたまらず忠告した。

“構わん。さてラシユー。お前の父親、ライレルが我に会った理由、それは力を求めたためだ”

「力？なんの？」

“『鬼人化』を知っているか？”

「ああ。主に双剣使いが手にする力で、力がある奴は武器に関係無く発動出来る状態のことだ」

ヒュウウウウ

と、雲海を上突き出る古塔の頂上に風が吹く。異様に静かだ。

“さよう。だが我に会ったライレルは、既に『鬼人化』を発動出来ていた。奴が求めたのは、その先にある力だ”

「先？『鬼人化』に先があるのか！？」

“あるとも。その名は人を神という字に変えた『鬼神化』。奴はそれを求めた”

「『鬼神化』・・・」

“その戦闘力は、『鬼人化』の五倍から十倍。まさに神の力だ。だが、その神の力を手にするには、大きな代償を支払うこととなる”

「代償？何だそれ！？」

“神の力を手にするには、その者も人知を超えた存在でなければならぬ。すなわち、想像を絶する苦しみを味わいことになる”

ヤマツカミがラシユールを睨みながら言った。

「・・・」

“それだけではない。力を手にした者が死ぬ場所、それは血が舞う戦場。誰かに看取^{みと}られながら、などという平穏な死など訪れはしない。戦いに生き、戦いに死す。それが『鬼神化』だ”

「・・・それで親父は、その『鬼神化』を求めた。だけど、何でも、そんな力を・・・」

“ さあな。本人に言え。もつとも、今は龍王の体になっているがな ”

「だから・・・俺は親父を助けたいんだ！」

ラシューはしばらくうつむいた後、ヤマツカミを見て、自分の決意を言った。

“ お前が？無理だな ”

「何!？」

“ 龍王はライレルの体を支配している。すなわち、龍王はライレルの力を得ている。意味が分かるか？ ”

「何が言いたい？」

すると、クシャルダオラが会話に入った。

“ 分からんか？龍王は、ライレルの『鬼神化』を得ている、ということだ。その前の『鬼人化』すら、ろくに発動出来ない貴様に勝機は無い”

「あ・・・」

“ さらに言えば、多くの竜が龍王についた今、貴様ら人間に勝機は無い。断言しよう。この状況では、必ず人間は敗北する”

「ど・・・どうにかならないのか！？このまま殺られるのを待つしかないのか！？」

ラシユーが訴えるように言った。

“ いや、一つだけ方法がある”

“ まさか賢者、あれをラシユーに？”

「何だ？」

“ ラシユー。お前がライレルの歩んだ道を進めば可能性がある”

「・・・それって、まさか俺が『鬼神化』を手にする、ってことか？」

“お前に覚悟があるならば・・・”

「・・・少し、考えさせてくれ」

ラシューは言うど引き返し、頂上を後にした。

“いくら何でも、躊躇^{ためら}うさ。奴は知ってるんだ。ライレルの末路を。賢者、あなたは、何を考えている？”

“龍王の敗北、と言えば？”

“なぜ？我らは龍。奴のすることは、我らにとって良いことではないのか？”

“くつくつく。全てはライレルに出会ったからかな。人間に希望を持ち始めたのは・・・”

“・・・人間に希望は無い。ハンターが罪の無い竜たちを殺め続ける限り。龍王は、そんな人間たちに裁きを与える存在だ”

“そんな我についてくるか、お前たちは？”

“我らは賢者の力に魅了された龍だ。あなたの考えこそ正しい。少なくとも、このクシャルダオラは、そう思っています”

クシャルダオラが、ヤマツカミに向かって頭を下げた。

“そうか。さて、ラシューは、どう決断するのか・・・”

その頃ラシューは、頂上続く扉の前の、少し開けた場所の地べたに座っていた。

(親父……。何で死んじまったんだよ。生きてたら俺が辛い道に行く必要なんてなかったのに……。)

ラシューはうつむき、ただ考え事をした。

(怖い。何だよ、想像を絶する苦しみて。俺、耐えられるのかよ)

ラシューは天を仰いだ。

「はあ……」

ため息をつくど、仰向けに寝転がり、目を閉じた。

(俺に、何ができる?)

そう思った時、あの戦いのことを思い出した。

グオオオオオオウ!!!

漆黒の火竜『エベニーソル』の咆哮が頭に過る。

その前に、赤いオーラを纏った自分がいる。

「はっ！！」

ラシューは目を見開き、現実に戻った。

（そっだよ。俺、何迷ってたんだよ。あの時決めたじゃないか。俺の誇りにかけて仲間を護るって。俺、大事なことを忘れてたな）

ラシューは立ち上がり、太刀『エクデイス』を抜刀した。

「よっしゃ、気合いいれるか！！まずは、あの時みたいに！！！」

ラシューは『エクデイス』の刀身に手をつけ、先ほど思った決意を強く思い、そして叫んだ。

「『鬼人化』！！！」

“あの男、『鬼人化』と言ったぞ”

クシャルダオラがラシユーの声を聞き、ヤマツカミに言った。

“つくづく面白い男だな。ライレルそっくりだ”

ヤマツカミが言った時、扉が開いた。

「よお、これを見な！」

ラシユーが現れた。体と太刀に、赤いオーラを纏って。

“そんな簡単に『鬼人化』が出来る訳がない。賢者よ、やはりこいつ、ライレルの力を・・・”

“親譲りの馬鹿力、か。全く、面白くする。さてラッシュー。決意は固まったか？”

「当たり前だ！どんな困難も、破ってみせるさー！」

“あらが回りだした歯車は誰にも止められない、か。いいだろう。運命に抗え、英雄を継ぐ者よ”

その頃、ドンドルマの街に、三人のハンターがいた。

「やっと着いたか！」

「全ては、大長老の判断で決まりますね」

「そうなるね。よし、行こう」

三人のハンターは、大老殿に向かって歩いた。

その内一人は、これから困難に立ち向かう者が書いた手紙を持っていた……。

第三十五話

「あのさ、この『鬼人化』、どうやって解くんだ？」

赤いオーラを纏ったラッシューが言った。

“発動出来ても解除が分からんか。全く、無鉄砲だな。双剣使い以外が『鬼人化』を発動するのに必要なこと、それは自分の決意、信念を強く想像することだ。よって解除の方法は、再び想像し、解除と念じることだ”

「そうか。やってみる」

ラッシューは目を閉じて念じた。

「おっ」

すると念じた後、すぐに赤いオーラが一気に消えた。

「「じつやるのかあ。さて、まずは何をすればいいんだ？」

『鬼人化』を解いたらシユーがヤマツカミに言った。

“『鬼神化』を手にするために最初に必要なことは、自分の力を知る、ということだ”

「自分の力？そんな俺自身が知ってるよ。長年ハンターやってるんだから」

“根本的に違うな。大事なのは『彼』に認められることだ”

「『彼』って何だ？」

“行けばわかる。目的の地は、我らしか知らぬ聖地。砂漠に隠されし、古の人々が残した、太古の『遺跡』だ”

「遺跡……。そんな場所、知らないぞ」

“案内役として、このクシャルダオラを使え”

“承知した”

クシャルダオラが頭を下げた。

「そこに、何かがいるんだろ？」

“その通り。我が言えるのはここまで。『彼』はお前を、どう思つか……。さて、そろそろ出発しろ”

“お前の足では数日かかるな……。仕方ない、我に乗れ”

クシャルダオラはラシユーの前に座り、翼を下ろした。

「いいのか？じゃあ、乗るぞ」

ラシユーは言いつと、クシャルダオラの首と翼の付け根の間に跨がった。

「痛！！何だよ、ゴツゴツしてるじゃないか！！」

“文句言うな。行くぞ。しっかり捕まってるよ。振り降ろされて、”

上空から地上に突っ込みたくなかったらな”

「・・・想像もしたくないね」

ラシユーはクシャルダオラの首にしがみついた。

“では賢者、行ってくる”

“頼んだぞ”

クシャルダオラはヤマツカミの一言を聞くと、羽ばたき始めた。

「だああ！もつと静かに出来ないのか!？」

“黙ってる!”

クシャルダオラは頂上を離れ、ものすごいスピードで滑空し始めた。

「ぎゃあああ!!--落ちる!!--」

“ 黙れと言ったはずだ!! ”

そんなやり取りを見たヤマツカミは、ふと思った。

(しかし、『彼』を見た時のラシユーの反応が楽しみだな。何しろ『彼』の姿は・・・)

そう思った所で、思考を止めて、自身もまた、移動を始めた。賢者の仕事を果たすために・・・。

ここは、ドンドルマの街にある、選ばれたハンターしか立ち入ることが出来る、大老殿。

「なるほどな・・・」

大長老が、ラシユーの置き手紙を読み終わり、静かに言った。

「どうすべきでしょうか」

カナハルが顔を上げて言った。

「親父の歩む道、か。．．．まさか、あいつ」

「どうかしましたか？」

「いや、何でもない。君たちは当分、この街に待機してくれ。龍王が、いつ攻撃するか分からないからな」

「はい．．．」

「分かりました」

「仕方がないか．．．」

カナハル、ハルカ、ギイがそれぞれ答えた。

「こちらも気球を使って探してみる。今は休むがよい」

大長老が言うと、カナハルが

「はい」

と言い、三人は大老殿を後にした。

しばらくして……。

「おい」

「どうしました？」

大長老が竜人族の、一人の老人に声をかけた。

「レギンレイヴは、どうしている……」

「ええつと……レギンレイヴ様は、体調を整えたようで、砂漠に行きました」

「そうか。すぐにレギンレイヴに、この街に帰還するよう、伝えてくれ」

ラシューは辺りを見渡した。

四方を巨大な岩が囲み、ここだけ別世界を思わせる雰囲気を出している。しかし砂漠特有の細かい砂や、夜に青く輝く月が辺りを照らしている。

“この場所は、砂漠の最果ての地に位置する。ハンターとしては、二人目だ。ちなみに一人目は、ライレルだがな。まさか親子で順番に来るとは……”

「へえ。それは嬉しいね……」

“さて、行くぞ”

クシャルダオラは前方の巨大な岩に向かって歩いた。

そして、その岩の前にラシューとクシャルダオラは立った。

「で、その『遺跡』はどこにあるんだ？」

“ 目の前にある ”

「 目の前って・・・ただの岩だぞ 」

“ そうだな。貴様らハンターにとってはな。だが、我らにとってこの岩は『遺跡』への扉なのだ ”

ビュウウウオオオ

辺りに強い風が吹いた。

“ 我、そなたの知る賢者の使い。この者、剣聖の血を受け継ぐ者。この者が『鬼神化』を手にする器うづわが、再び品定めの時が来た。願わくは、この扉を開けられよ ”

クシャルダオラはそう言ったが、何も起こらない。

「 何も起きないぞ 」

“ 黙ってる ”

クシャルダオラがそう言った時。

ガチャン

と音がすると、ラシューとクシャルダオラの目の前の岩が突然、意思を持ったかのように横にずれ始めた。

「じ、これは!？」

ラシューが驚いている間に、岩はどんどんずれ、その奥から、不気味な通路が現れた。

ガダアアン

岩が止まった。

暗闇に続く通路は下る階段のようになり、どこまで続くか分からない。

「あ……」

“言葉が出ないか。まあ当然だな。さあ、入るぞ”

「あ、ああ」

ラシユーとクシャルダオラは巨大な岩の中に入った。

ゴゴゴゴゴゴ・・・

と、ラシユーが入り終わると、後ろの岩が閉じ始めた。

「お、おい」

やがて完全に閉じ、辺りが暗闇に包まれた。

“案ずるな”

クシャルダオラが言った時。

ポツポツポ

と、次々に、たいまつがつき始めた。

“不思議だろう？なぜこんな高度な文明が滅びたのか……。さてラシユー、奥に進むぞ”

クシャルダオラは軽く跳躍しながら降りていった。ラシユーも遅れないように急いで下っていった。

下っている間、いくつかの別の通路に通じる道があった。この通路に何があるのか……。ラシユーはそう思いながらも、階段を降りていった。

やがて、下り階段は終わり、目の前にはっきりとした扉が現れた。

“この中に、『彼』がいる”

「なあ、いい加減その『彼』とかいう奴の名前を教えてくださいませんか

「？」

“それは私のことか？”

不意に声が聞こえた。

「誰だ！！」

“入れ”

ガチャン

扉が動き出した。

その奥には、濃い霧がかかり、大きく開けた場所があった。

“ 入るぞ ”

クシャルダオラが言うと、濃霧の中に入っていった。
ラシューも後に続いた。

濃霧のかかった広場は、不気味だった。

濃霧以外何も無い。

「さあ、姿を現せ!!」

“ははは。ラシユーよ。私はとっくに姿を出しているぞ”

「何!?!」

ラシユーは見渡すが、クシャルダオラの他には濃霧しかない。

「どこだよ!?!」

“ラシユーよ。お前、層気楼を知っているか?”

「それがどうした。遠くの物が近くに見える現象だろ？」

“その通り。しかし、その現象を自在に操れると、どうなると思う？”

「何が言いたい？」

“遠くから存在しない物を見せることも、地上の物体が空中に浮かんで見せることも可能。つまり、相手に回避不能の幻覚を見せることが出来るのだよ”

「はい？」

“私は蜃気楼その物。ゆえに私の名前は、ミラージユ”

「ミラージユ……。それで？賢者からあなたに会えって言われたんだけど、『鬼神化』を手にするには、どうしたらいいんだ？」

“かつてお前の父ライレルも、ここに来た。だが、私は解せぬ。賢者はなぜ、あの呪われし力を息子にも押し付けるのか……”

「それは、俺自身が決めたことだ」

“ 覚悟があるのか？まあよい。さて、私は地上には行けない身だ。だが何が起こっているかは、だいたい分かっている。賢者が言う以上、私も協力しよう”

“ 感謝する”

クシャルダオラが頭を下げた。

“ ライレルの同じやり方でいく。いいな？”

「 その方がいい」

“ 意気がるなよ。貴様はこれから、地獄を味わうことになるぞ”

「 そうなるわな・・・」

“ 私は『遺跡』の守り神として、古の人々から崇められていた。そして、特別な力を授かった。古の人々が編み出した、人類最強の奥義、『鬼神化』を発動する、中心の核を目覚めさせる能力を持った”

「何だよ、いきなり・・・」

“第一段階。それすなわち、精神地獄。貴様は耐えられるかな？”

すると突然、濃霧が渦を巻き始めた。

「な、何だ!？」

密集した濃霧は、完全な白色の球体になった。

ギョオオオオン

球体が破裂し、ラシューの回りに、白いスポットライトのような光が注いだ。

“見えるぞ・・・。貴様が恐怖し、恐れている事柄が!! 教えよう、『鬼神化』を発動せし者の末路を・・・”

「う!！」

ラシューは一瞬声を上げると、気を失い、

ガタン
と、うつ伏せに倒れた。

“ ついに、運命の歯車が回り始めたか…… ”

クシャルダオラが呟いた。

第三十六話（前書き）

かなり遅い更新になりました。

現在、勉強で忙しく、これからも更新は遅れると思います。

m ((m

第三十六話

「ん……」

ラッシューは重い目を開けた。

(ここは……)

周囲を見渡すと、多くの人が行き交う、広場があった。

(ここは、ドンドルマか?)

ラッシューが思った、その時。

「た、助けてくれ！」

「なんだ？」

前方に、一人の青年が、そしてその人を狙う一体のランポスが現れた。

(こんな所でランポスカ！)

ラシユーは迷うことなく、太刀『エクディシス』を抜刀し、ランポスカに斬りかかった。

ザシユ!!!

ランポスカを一刀両断にした。

「大丈夫か？」

ラシユーが言った時には青年は姿を消していて、突然もう一体のランポスカが現れた。

だがそのランポスカは、体を真っ二つにされたランポスカの側にいき、両手を地に付け、ラシユーを見て

ギヤアア、ギヤアア

と、吠えていた。

(何だあれ?)

ラシューは疑問に思いながらも、そのランポスに斬りかかった。

ザシュー!!

これまた綺麗に一刀両断できた。

(何でここにモンスターが!?)

すると前方から、かなりの大群でランポスがラシューに向かって走ってきた。

周囲を見ると、人がラシューの後方に下がっている。

「戦えるのは俺だけか!ここは通さねえ!!」

ラシューはランポスの大群に突っ込もうとした。

ズザアアアン！！！！

不思議な起こった。

突然、ランポスの大群の内、半分くらいが胴体から真っ二つに斬れたと思うと、

ドオオオオン！！！！

と爆発音がし、しばらくたつと、斬られたランポスが消滅していた。

「何だ！！！」

ラシューが言った時、残ったランポスたちは逃げていこうと、後ろを向いていた。

だが、再び

ザシュー！！

と音がし、

ドオオオオン！！

と爆発音がし、ランポスは全て消滅していた。

（何だよ・・・）

ラッシューが思った、その時。

「ラッシュー！！！！！」

と、叫び声がした。

振り向くと、武装したカナハル、ハルカ、ギイが立っていた。

ラッシューが言葉を発しようとしたが、その前にカナハルが叫んだ。

「ラッシュー！！お前、自分が何してるか分かってるのか！！！」

(え・・・)

ラッシューは意味が分からず、ただ黙っていた。

「ラッシューさん！！あなた、そんな人だったのですか！！？」

ラッシューは口を動かそうとしたが、閉じたまま動かない。

(あれ?)

「あんたのこと、見損なつたよ!!!この人殺し!!!」

(人殺しって。俺はランポスを・・・)

ラシューが思った、その前。

「ソレガ、ドウシタ?」

不意に自分の口から、思いもよらない言葉が発せられた。

「俺ハ、最強ノ奥義ヲ手ニ入レタ。ソレハ、俺ハ王ニナル権利ヲ得
タモ同ジコト」

(何を言ってるんだ、俺・・・)

ラシューは、ふと周囲を見渡した。

周りには、防具の破片や真っ二つにされた人の死体があつた。

そして、多くのランポスが自分の後ろにいる。

（あれ？何かおかしいぞ。見てたのが逆に……。え？ひょっとしたら……）

ラシューが思った時、体に強い衝撃が走り、気を失つた……。

「ん……」

ラシューは意識を取り戻した。

ザッザッザ・・・

(体が・・・)

ラシューは驚愕した。

自分の意思で動いていない。まるで他人の目からの映像をそのまま見せられているみたいだ。いわば憑依状態といったところだろう。

「うゝ、うわあ・・・」

前方に腰がひけているハンターがいた。

ラシューの意思に反して目が下を向いた。

防具の内から大量の血を流して倒れている一人のハンター。そして、血にまみれた太刀『エクディシス』・・・。

(これを、俺が・・・)

「や、やめてくれ!」

前方のハンターが後退りをしながら言った。

「無意味ダ・・・。『鬼人化』」

この体を支配している別のラシューが不気味に言うと、赤いオーラを纏まとった『エクディシス』が振り下ろされた。

(やめる!!!)

ラシューは願ったが、何の意味もなく、凶刃はハンターを切り裂いた。

「ああ・・・」

ハンターは断末魔を上げると、多量の血が噴き出す中、息を引き取った。

「次八、アノ街力・・・」

ラッシューの体を支配した何者かは、鬼人化のオーラを足に集中させると、信じられない跳躍でドンドルマに向かった。

（まさか、あの時と！）

ラッシューが思うが、体はドンドルマに向かう・・・。

「観念しろ！！」

ランポスを狙う一人のハンターがいた。

ハンターはランポス目掛けてライトボウガンから通常弾を放とうとした。

だが、引き金を引く、その刹那。

「があああー!!」

ハンターが腹を見ると、赤いオーラを纏った太刀が貫通していた。

(この状況、景色。あの時と同じだ!)

「な、てめえ、なぜこんな・・・」

ハンターは言いかけた所で、絶命し、頭を下げた。

「脆イナ・・・」

不気味に言つと『エクディシス』を引き抜いた。

(少し違つが、やっぱり前と逆だ)

「お、おい!!!!」

別のハンターが倒れているハンターに寄りかかった。

「戦八無情ダ・・・」

「何てことするん」

ハンターは最後まで言えなかった。なぜなら、体が一刀両断にされたからだ。

(見てるだけで、何も出来ないのか!!!)

「いたぞ〜!!!!あいつだ!!!!」

ラシユーの前方には、かなりの人数のハンターがいて、それに恐れを抱いたのか、多くのランポスが後ろに下がった。

「こうなつた以上、おの男を殺して構わん!!!かかれ!!!」

ハンターの大群が、さまざまな武器を持ってラシューに向かって走っていった。

「クハハハハハハハハ」

(何がおかしいんだ、こいつ)

ラシューの高笑いで、ハンターたちは一旦立ち止まった。

「教エヨウ!! 貴様ラト俺トノ、決定的ナ差ヲ!! 『鬼神化』!!」

叫ぶと、辺りに地響きがなりはじめた。

ゴゴゴゴゴ

「な、何だ!?!」

「おい見る。あいつ・・・」

ふとラシューを見たハンターがたまらず言った。

これまでは『鬼人化』特有の赤いオーラだったのが、今は、鮮やかな群青色のオーラに変わっていた。

(これが・・・『鬼神化か])

するとラシューの体は、『エクデイス』を持った手をゆっくりと横に伸ばし、刀身に群青色のオーラを集めた。

「奥義。『鬼神天衝』」

不気味に言うと、『エクデイス』を薙ぎ払った。

刹那、『エクデイス』から群青色の三日月状の斬撃が放たれた。

ギューン!!!

その軌道はハンターたちの真ん中から右半分を通過した。

ブシャアアア！！！

貫かれたハンターの体から、おびただしい量の血が噴き出した。

「滅ッセヨ」

ラシューの口から言葉が発せられた瞬間、

ドドドドドオオオオン

と、斬撃に貫かれたハンターの周辺で、けたたましい爆発が次々と起こった。

「な・・・！！」

範囲外のハンターは目を疑った。

爆発の後に残ったのは、鎧や武器の破片だけだ。人の体は血もろとも完全に消滅していた。

「次ダ」

(みんな逃げろ!!)

ラシューは念じるが、体全てを支配されている状態では、何一つ抵抗できない。

「う、うわ・・・」

「化け物だあ!!逃げろおお!!!!」

残ったハンターたちは、ラシューに後ろを向き、逃げ始めた。

「無価値!!」「鬼神天衝!!!!」

再び『エクデイス』を薙ぎ払うと同時に、群青色の三日月状の斬撃が放たれた。

その斬撃は、逃げ惑うハンター全てを通過した。

「滅!!」

(見てられない!目をそらしてくれ!!)

だがラシューの願いもむなしく、

ドドドドオオオオン

と、多くのハンターが命を散らす光景を目にしなくてはいけなかった。

「歯応えが無い。強イ奴ハイナイノカ!!」
（もう止めてくれ!!）

ラシユーは多大な絶望を感じ、自棄やけになっていた。

「ラシユー!!!」

大声の発せられた方向を向くと、カナハル、ハルカ、ギイが立っていた。

「ラシユー!!!お前、自分が何してるのか分かってるのか!!!?」

（気付けカナハル!!!あれをやったのは俺じゃない!!!俺の体を乗っ取った誰なんだ!!!ずっと一緒に戦ってきただろ!!!）

「ラシユーさん!!!あなた、そんな人だったのですか!!!?」

(違うんだ!!違うんだよ!!!!!!)

「あんたのこと、見損なつたよ!!!この人殺し!!!!!!」

(頼む、気付いてくれ!!!この、何で動かせないんだ、俺の体!!!)

全身の支配権を奪われているラシューに出来ることは、こうして強く思うことぐらいだろう。たとえ通用しないとしても、ラシューは自分の思いが爆発し、動かない口を動かそうとする……。

「ソレガ、ドウシタ?俺ハ、最強ノカヲ手ニ入レタ。ソレハ、俺ハ
王ニナル権利ヲ得タモ同ジコト」

(言っちゃまった。最低だよ俺……)

「ラシュー。本気で言ってるのか?」

「サテ、才前ラハ、俺ヲ楽シマセテクレルカナ?」

ラシューはカナハルに向かってゆっくりと歩いていった。

「今までのお前は偽りだったんだ……ならば、ここでお前を止める!!!!!」

カナハルは漆黒のランス『ブラックテンペスト』を構え、ラシユーに突進した。

そして、ラシユーに向かって鋭く突いた。

ガアン！！

「な・・・？」

カナハルの突きは、ラシユーの左手に当たった。その瞬間、『鬼神化』のオーラをそこに集結させて、『ブラックテンペスト』を弾き飛ばしたのだ。

グウシャアア！！！！

「！！！！！！」

カナハルの腹部には、『鬼神化』のオーラで群青色に輝く左手が鎧を突き破り、体を貫通し、大量の出血をおこした。

「『鬼神刃手』。終わリダ」

「くそ・・・」

左手を引き抜くと、カナハルはゆっくりと崩れ落ちた。

「か、カナハルさん!？」

ギイがその光景にびっくりし、武器を下ろした、その刹那。
ブシヤアアア!!

『鬼神化』のオーラは一瞬にして『エクデイス』に移動し、ギイの胸を、そして心臓を貫いた。

「が……」

「去ラバダ」

引き抜くと、ギイは倒れ、顔面は地面に激突した。

「あ……」

「次八、才前ダ」

ラシューはハルカの頭をを左手で掴み、その手に『鬼神化』のオーラを集結させた。

ラッシュューは心の中で絶叫した。

すると、ラッシュューの視界が突然、闇に包まれた。

まるで別世界に連れてこられたみたいだ。

(「ラッシュューは・・・」)

ラッシュューが思った時、周りが濃霧に包まれた・・・。

第三十六話（後書き）

我ながら、よくこんなこと書けたなあと実感しています。

（ ^ | ^ : ）

第三十七話

「はあ、はあ、はあ・・・」

想像を絶する光景を目の当たりにしたラシューは、ただ濃霧を見ていた。

「これが・・・試練なのか・・・？」

“違うな。今見せたのは、『鬼神化』とはどういう力なのかを教えただけだ。まあ恐怖感も与えたがな”

濃霧から、ミラージユの声が聞こえた。その間ラシューは依然肩で息をしていた。

“なるほど、お前の恐れは、仲間の酷い死、か。そして『鬼人化』を手にする段階で決心したことは、仲間を守る。なんとまあ、ライレルとは正反対なことよ”

「親父は、何だったんだ・・・？」

“それは知らなくていいことだ。それにしても、『鬼神化』の奥義

を三つも披露するとは、お前は恵まれているな”

「何がいいたい・・・？」

“鬼神天衝、鬼神刃手、そして鬼神煉獄。中でも煉獄が一番残酷な殺し方だ。それを小さな女性ハンターにかけ、悲鳴をあげた所でここに来たことから、お前の一番恐れていることが見えたな”

「それは、何だ？」

“それは自分が一番分かっているだろう？私が話すことではない。それよりもラシュー。『鬼神化』の恐ろしさを身を持って知ったか？”

「まあ、な・・・」

“『鬼神化』は文字通り、神の領域の力だ。だがその代償は高くつく。それが、精神の崩壊だ”

暗闇の中に広がる濃霧。ラシューは、ただ濃霧に話し掛けるしか出来ない。

「力に溺れた者の末路が、あれか……。でも俺は、あんな出来事なんか起こさない!!」

“口は達者だな。だがそれは真実の口か？”

「どづいうことだ？」

“それを証明してやる”

ミラージュが言い終わると、濃霧がラシユーの前方に集結し始めた。

ギユウウウオオオオ

すると濃霧は、だんだんと人の形になってきた。

“内なるお前を見せてやる。リフレクト・チェンジ!!”

グオオオオオオオオ

と、轟音を響かせ、やがて、完全に白い人体になった。それは、あのハンターに似ていた。

「お、俺!？」

白い男が、ゆっくり目を開け、言葉を言った。

「よう。貴様と会うのは初めてだな。俺は、お前の体に眠る、もう一つのラシユー・クルトイオンだ」

白い防具、白い刀、白い顔。全てが白いラシユーから、肉声が聞こえた。濃霧で出来ているはずなのに、なぜ声が聞こえるのか、謎である。

「もう一つの、俺・・・」

「俺は外部に影響されない。つまり、お前の真実の部分が俺だ。ゆえに、俺の性格、願望、全てがお前が本来持つものなのだ」

「そんなの、信じれる訳ないだろ!？」

「俺の野望を教えよう。それは、俺が世界の頂点に立ち、愚民どもを力による支配を行うことだ!男を殺し、女を手にする。俺は、血に飢えた獣だ!！」

「!!。嘘だ!!俺はそんなの望んでない!!!」

「真実に背を向けるか……。甘いな。だつたらためえをじやまま跪かせ、俺が体を支配するまでだ。大いなる野望のために!!」

「させるかよ!!消える!!」

ラシユーは太刀『エクデイシス』を抜刀し、構えた。

「ためえが俺に勝つ?はっ!!笑わせるぜ!!」

すると白いラシユーも、背中にあつた白い鞘から、太刀を抜刀した。

「白い『エクデイシス』!?」

ラシユーは驚愕した。白いラシユーが持つ刀、それは形状から『エクデイシス』と分かるが、刀身、鍔、柄、全てが白い。

「くっくっく。さあ、始めようか。現実世界での支配権を賭けて!!」

「!!!。うおおおお!!!!!!」

ラシューは駆けた。同時に内なるラシューも駆けた……。

ラシューは、踏み込み斬りをしようとして『エクディシス』を上を持ち上げ、降り下ろした。と同時に、白いラシューも白い『エクディシス』を降り下ろした。

ガキイイイイン!!!!

両者の太刀は刀身の真ん中で火花を散らし、ガリガリ……と、つばぜり合いをしていた。

「待ちに待った戦いだ。もっと楽しもう・・・」

「うるせえ!!」

ラシューは刀を握る手に力を込め、『エクディシス』を白いラシューの方に押し込め始めた。

「そう言うなよ。俺を倒したら、『鬼神化』の発動に近付くんだけ？」

「何!？」

白いラシューの言葉に、ラシューが動転した、その瞬間だった。

「甘めえ!!!!」

ドスッ!!!!

白いラシューがラシューの腹部に右足で蹴り跳ばした。

「あぐっ!!!!!!」

ラシユーは約2メートルほど跳ばされ、数秒後に腹を抑えながら立ち上がった。

「不意打ちかよー!!」

「油断するお前が悪い。戦いで気を取られることは、死を意味するぞ」

白いラシユーが偉そうに言った。

「悪いが、楽しむ時間がもったいないから、さっさと決着をつけるぜー!!」

ラシユーは『エクディシス』の刀身に手を置き、身構えた。

「おいおい。いきなり全力か？」

「こっちは楽しむ時間なんて無いんだよー!!」

「ったくよ。無理だと言ってるんだよ」

すると白いラシユーが、ラシユーと同様に白い『エクディシス』の刀身に手を置いた。

誰に言う訳でもなく、自分の思いを語った……。

「貴様、いつ『鬼人化』を!？」

赤いオーラを纏ったラシューが、同じく赤いオーラを纏った白いラシューに言った。白いラシューは不気味に笑った。

「言つたろ？俺とお前は表裏一体。表のお前が発動出来れば、裏の俺も発動出来る。それだけだ。さあ、続きをしようか!！」

白いラシューは言う白い『エクディシス』にオーラを纏わせ、ラシューに踏み込み斬りをしようと太刀を振り下ろした。

ガキイイイン!!

ラシューはそれを受け止め、つばぜり合いの状態になった。

「うおおおお!!」

ラシューは力をこめ、太刀を押し込めた。

「諦める。お前に『鬼人化』は到底使いこなせない」

白いラシューが言うと、ラシューの持つ『エクディシス』の刀身に左手で軽く握った。すると、

ピキピキ、ピキ・・・

と、刀身に次々と、ひびが入り、そして、

バキイイイン!!!!

と、粉々に砕けた。

「嘘・・・だろ・・・」

その光景を目の当たりにしたラシューは仰天し、ただ咳くしかかなかった。

すると白いラシューが、今度はラシューの左手を握った。

「ただだぜ。『それ』も消えるぞ」

キュウウウウン

高い音が響くと、ラシユーを纏っていた赤いオーラがみるみるうちに消滅していった。

「なんで・・・」

『鬼人化』を失ったラシユーに、白いラシユーは言った。

「それは簡単だ。今のお前に、『鬼人化』を使うことが許されない、決定的な理由があるからだ」

言い終わると、白いラシユーは力を失ったラシユーの鎧に、オーラを纏わせた右足でもいっきり蹴った。

「がっ！！！！」

ラシユーは10メートルほど跳ばされ、地に伏せた。

「あ……」

ラシユーは自分の体を貫いている太刀を見た。多量の鮮血がほとばしる。

「あばよ」

白いラシユーが言うと、太刀を薙ぎはらおうと、力を込める。その刹那に、ラシユーは思った。

（負ける？ここで、死ぬ？そんなことさせるか！！これは、俺の剣だ！！！返せ、俺の剣『エクデイス』！！！！）

ラシユーは強い意思を持ち、白い『エクデイス』の刀身を掴んだ。

「俺の『エクデイス』！！！戦わせる！！！」

「悪あがきか？」

「俺はこんな所で死ぬ訳にはいかないんだよ！！！！。死ぬとしたら、

別の所で死ぬんだ!!!」

「へ、何言ってる・・・」

白いラシューは最後まで言えなかった。なぜなら、

キイイイイイン!!!!

と高音が鳴ると同時に、白いラシューが『エクディシス』を握っていた左手が、根元から吹き飛んだからだ。

「がああああああああああ!!!」

左手が吹き飛んだ白いラシューが絶叫した。だが、霧で出来ている訳か、出血はしなかった。

(そうか、そうだったんだ)

「てめえ・・・何した!?!」

白いラシューが言ったが、ラシューは答えない。

「くそ、俺の腕を!!!ぶち殺す!!!」

白いラシユーが駆け、残った右手にオーラを集め、ラシユーを殴ろうと腕をふった。

だがその腕は、ラシユーの左手によって阻止された。それも、失ったはずの力を発動させ……。

「貴様、なぜ『鬼人化』を!?!」

「……分かったんだ」

ラシユーが言うと、
ザシユ!!!!!!

と一閃すると、白いラシユーの右手を切り離した。

「ああああああああああ!!!!!!」

あまりの痛みからか、『鬼人化』のオーラが消えていた。

「お前の言う通りだ。俺は『鬼人化』を使う資格が無かった。礼を言っぞ。それを教えてくれて」

「何だと！！！」

「俺は甘かった。これから目指す『鬼神化』を手にする理由は、仲間を護るため、龍王を倒すため、そう思っていた。だが、違っていたんだ！！！！」

ラシューは『鬼人化』のオーラを刀身に集め、グシャアアア！！！！と、白いラシューを貫いた。

「……その理由は、何だ？」

「単純だ。俺の中の戦いを求める本能に従い、神の力を手にするため、それだけだ。あんな思いだと、今発動している『鬼人化』も、今までの俺に呆れただろうな。だから、俺は鬼になる。それが、『鬼神化』を手にするための覚悟だ」

「……そう思うと、あの惨劇を現実にするぞ」

「させない。力は欲しいが、溺れたりほしくない。俺は神の力を、龍王を倒す、この戦いのためだけに使う！！！！」

ラシューが決心を語ると、白いラシューがふつと笑った。

「やっぱりお前は甘いな。そんな都合よくいくと思うか？だが、俺を倒したんだ。とりあえず今語った決心が真実だと認めてやるぜ。だが忘れるな。お前の心に歪みが生じたら、俺がお前の体に乗つてる！！！」

そう言うと、白いラシユーの体が
パキパキ・・・
と崩れ始めた。

「それから一つ警告しておく。再び俺が現れる時まで、せいぜい死なねえようにしろよな！！！！」

白いラシユーが言った瞬間、

バアアアアアン！！！！

と、体が崩れた。そして、辺りに再び濃霧がかかった。

“ 見事だ、ラシユー。さあ、帰ろう ”

不意に声が聞こえると、ラシユーの意識がとんだ。

「ん・・・」

ラシユーはゆっくりと視線を上げると、目の前に黒い龍がいた。

「よう、クシャルダオラ」

“その様子だと、内なる自分を封じ込めたようだな。これで『鬼神化』に近付いたな。どうだ、気分は？”

「ああ、悪くねえ。」

“余韻に浸っている所で悪いが、今から古塔に行ってもらおう。賢者から話があるそうだ”

「賢者から？」

“ そうだ。クシャルダオラ、ラシユーを背負って行け。くれぐれも隠密にな”

“ わかっている。さあ行くぞラシユー”

「 ちょっとは休憩させるよな」

ラシユーは愚痴を言ったが、しびしび立ち上がり、クシャルダオラと共に部屋を後にした。誰もいなくなつた広場で、ミラージユは思った。

(スサノオ包囲網は着々と出来ているか。やはり人間は面白いな)

所変わって、ドンドルマの大老殿。

コンコン

「レギンレイヴです」

「待っていたぞ。入れ」

大長老が言うと、扉が開き、一人のハンターが入ってきた。

「私を戻した理由は何でしょうか？」

「お主だけではない。先ほど、各フィールドに出ているハンター全てに、至急ドンドルマに集結しろ、と伝えた。明日にも、ハンターがこの街に来るじやろう」

「何か、あったのですか？」

「詳しいことは明日話す。今日呼んだのは、一つ聞きたいことがあったからじゃ」

「何でしょうか？」

「単刀直入に言う。なぜ、お主は『鬼人化』を拒み続けるのじゃ？」

大長老が言うと、レギンレイヴは言葉を発せず、うつむいた。

「ドンドルマ最強の獵団『太陽の樹』に所属しているハンターで『鬼人化』を發動しないのは、お主だけじゃ。わしが見る限り、お主の力は『鬼人化』を發動出来るところまで来ている。なのになぜじゃ？」

「……すみません。それにお答えすることは、今は出来ません」

「そうか、わかった。では、一つ知らせておこう。お主の敬愛するライレルの息子、ラシユールが音信不通となっておる」

「!?!?!」

レギンレイヴがびっくりし、顔を素早く上げた。

「彼は仲間に手紙を残し、消えた。明日、そのことについて話そう。彼の仲間に、そう伝えてくれ」

「は、はい！わかりました」

レギンレイヴは言うと、大老殿を後にした。

様々な思い、出来事。その全てが明日、明らかになる。別行動をとっているラッシューを含めた全てのハンター、そして竜たちも・・・。

第三十九話

古塔の頂上を目指すラシユーとクシャルダオラは、上空を飛びながら、朝を迎えた。

「いや、絶景だな、この太陽」

水平線から顔を出す太陽を見て、ラシユーが見とれながら言った。

“ふん、我は見飽きたわ。人間は、この景色で感動するの？”

「こんな高さから見るのは初めてだからな。誰もが感動するはずさ」

“全く、人間の感情とは不思議なものだな。感動するということが、どう影響されるんだ？”

「そんなこと分からねえよ。それより、賢者は何で呼び戻したのか、知らないのか？」

“我に尋ねるなら、直接言ったらどうだ？まあ、塔には昼ごろ着くがな”

「はいはい。じゃあ俺は寝る！！落とさねえようにしろよ！！」

“それは保証できん。だが、内なる自分との戦いで疲れているはずだから、極力気を付けよう”

クシャルダオラが言うと、さっそくラシユーは倒れるように寝始めた。クシャルダオラは注意を払いながら塔に向かった。

正午、ドンドルマの広場には各地から集結したハンターが、大長老の話を待っていた。その中に、カナハル、ハルカ、ギイがいた。

「また俺たちを集めた、ってことは、重大なことが起こったんだな？」

ギイが呟くと同時に、大長老が

「静かにしてくれ」

と言ったので、ギイを含む全てのハンターが一斉に喋るのをやめた。

「時間がないので、単刀直入に言う。皆をここに集めたのは、龍王の動きが分かったからじゃ」

辺りがざわめくが、大長老の緊迫した様子を察知し、すぐにおさまった。

「龍王は塔の戦いの後、フィールドにいたモンスターたちを、ある場所に集結させているようじゃ。その場所は特定されていないが、中には龍王を拒むモンスターも現れたようで、そのモンスターたちは依然としてフィールドに残っている、と解ったのじゃ」

「へえ・・・竜たちも分かってるじゃん。つくだけ無駄だって」

ギイが囁くが、大長老は引き続き話した。

「そのモンスターたちは、どうやらこの戦いに中立体制をとっているらしい。フィールドで我らを見かけても、攻撃を仕掛けてこなかった、と報告を受けていたが、どうやらこれが理由らしい。よって、

諸君らもモンスターを見かけても攻撃は仕掛けないでくれ」

「そんな保証、どこにあるんだよ。でも大長老が言うんだから守らないとな」

「話はまだある。龍王が攻撃を仕掛ける日にちが分かった」

これにはハンターたちがざわめき始めた。

「静かにしてくれ。言つぞ。それは、今から一ヶ月後、場所はドンドルマじゃ……！」

「まじかよ……！……！……！？」

ギイが仰天する。

「この情報は信用してよい。僅かだが時間はある。それまでに各自で鍛練するように。忘れるな。決戦は一ヶ月後、ドンドルマじゃ！……！……！……！」

「おお ……！」

ハンターたちが叫ぶと、大長老が

「では解散する!!!」

と言い、ハンターたちは広場を後にした。

それから数十分後、大老殿には、大長老、そしてレギンレイヴがいた。

コンコン

「入ってくれ」

大長老が言うと、扉が開き、そこからカナハル、ハルカ、ギイが入ってきた。

「話とは何ですか？」

「お主たちが知りたい情報が入ってきた。それはラシユーの情報じや」

「!!。何か分かったのですか!?!」

カナハルが大長老に詰め寄る。

「ラシユーは現在、塔にいる。それも、浮岳龍と鋼龍が一緒でな」

「ラシユーは、無事なんですか?」

レギンレイヴが尋ねる。

「安心しろ、無事じゃ。これで手紙の意味が分かった。ラシユーは究極奥義、お主たちが知る『鬼人化』を超える、人を神という字に変えた『鬼神化』を手にしようとしている」

「『鬼神化』……。ライレル様ただ一人取得できた究極奥義。だが、ラシユー君はなぜ、あの力を?」

「ラシユーの側にいる浮岳龍は、賢者の異名で知られる。広場では話さなかったが、龍王の動きを知らしてくれたのは実は賢者なのじゃ。どうやらこの世界ではモンスターの言葉が解るらしいな。話を戻そう。そして、『鬼神化』を取得するには賢者に接触するしかない。これはワシしか知らない秘密じゃがな」

「ラシューが、そんなことを・・・」

カナハルが呟く。

「さて諸君を集めた理由は、あることをしてもらったためじゃ。カナハル、ハルカ、ギイ、そしてレギンレイヴ。君たちは生まれながらにして才能に恵まれた。未だハンターの経験が少ないハルカ、ギイは特にじゃ。じゃが、龍王によって我らは滅亡の危機に接している。それを阻止するには、やはり『鬼人化』が必要じゃ」

「まさか大長老、我らに『鬼人化』を取得させる気では!？」

「へ、何？」

レギンレイヴの言葉にギイは意味がわからないとばかりに言葉を発した。

「じゃがラシューはあの究極奥義を手にしようとしている。あの力は数多あまたの試練を突破しないと聞けないと聞く。それをするほどラシューは覚悟しているということじゃ。ならば我々は何が出来る？その前の『鬼人化』を一人でも発動させる必要がある、とワシは思っているのじゃ」

「私は反対です！！まだハルカさんとギイ君は若すぎます。この年齢で『鬼人化』は危険です！！」

「もちろん承知の上じゃ。どうするかは本人次第じゃ。考える時間を与える。意志決定できたら報告してくれ」

「・・・わかりました。失礼します」

カナハルが言うと、大老殿を後にした。ハルカ、ギイもカナハルに続いた。

「レギンレイヴ、お主も考えて、答えを聞かせてくれ」

「・・・はい」

レギンレイヴはただ一言言うと、大老殿を後にした。大長老は一人残った・・・。

一方その頃、古塔では熟睡してすっかり元気になったラシューが『浮岳龍』ヤマツカミに、大長老と同じ内容の話を聞いていた。

「つまり、決戦は一ヶ月後、ドンドルマ、ってことでいいんだな」

“ああ、そうだ。それまでに『鬼神化』を発動させるのだ”

「でもそんなこと分かったら、スサノオは日にちを早めたりしないのか？」

“それはないな。龍王は勝利を確信している。いつ攻めても同じ結果、ならばどこまでハンターは足掻けるかを楽しもうとするんじゃないかな。くだらないことだ”

「へ、ハンターの底力を見せてやるぜ！！。よし、修行だ！！行くぞクシャルダオラ！！」

“我に命令するな。だが時は短い。急いだ方がいいな”

“そうしてくれ、クシャルダオラ。忘れるな、ラシユー。決戦は一ヶ月後、ドンドルマだ”

「わかってるよ。さあ行けクシャルダオラ!!」

“貴様がそう言うのなら全速力で行こう。ただし、振り落とされてもしらんぞ”

「おい待て!!」

ラシユーの言うことも聞かず、クシャルダオラは羽ばたき、ものすごいスピードで飛んだ。

“ははは、滑稽こっけいだな”

その後ろ姿を見て、ヤマツカミは言った。

やがて完全にラシユーとクシャルダオラが視界から消えると、ヤマツカミは後ろを向き、言った。

“龍王め……。古塔の戦いで我ら古龍の誇りを完全に踏みにじる扱いをしょって……。この代償は高くつくぞ、スサノオ!”

それは賢者らしからぬ怒りだった。

話から30分後、大老殿……。

コンコン

「入れ」

大長老が言うと、カナハル、ハルカ、ギィ、そしてレギンレイヴが入ってきた。

「決断を聞かせてくれ」

「はい」

カナハルが代表して言った。

「ラシユーが命張ってるんだったら、俺たちも命を賭ける！！大長老、俺たちは『鬼人化』を求める！！それが俺たちの決意です！！」

「そうか。ハルカ、ギイ、レギンレイヴ。君たちも同じ思いか？」

「はい。絶対、諦めません！！」

「ラシユーさんばかりに押し付けるのは、もうこりこりだ！！絶対発動させてやる！！」

「大長老。私は今の力でいいと思っています。『鬼人化』に頼らなくたって、充分戦える。それにこの力は恐ろしかった。『太陽の樹』のメンバーが、力に溺れて何するか分からない。そう思っていたので、今まで『鬼人化』を拒み続けていました。しかし、彼らが私に自分たちの決意を言ってくれたおかげで、一歩踏み出すことができました。ラシユー君を少しでも助ける！これが私の決意です！！」

それぞれ強い思いを語ると、大長老が言った。

「諸君らの決意は解った。ではこれより、『鬼人化』発動への修行を始める！！」

今、四人の戦いが始まろうとしていた・・・。

夜、砂漠の隠されし遺跡。

“なるほど、一ヶ月後か・・・”

ミラージュが呟く。

「だから、それまでに『鬼神化』を発動できないと、まずいんだ」

“それはラシユーの頑張り次第だ。ではさっそくとりかかろう。第二の試練を！！！”

グオオオオオオオ！！！！

漆黒の火竜の咆哮が響く。

【クツクツク。ソウアセルナ、エベニーソル。イマハ、シンカヲツツケルノダ。サキホド、ツドイシモノタチニツタエタ。ケツセンハ、イツカゲツゴ、ドンドルマ、ト。ダガ、オマエハ、ツカワナイゾ】

グウウウウウウウ・・・

【クヤシガルナ。オマエノデバンハ、ソノサキダ】

龍王の言葉が響く。

【ケッセンハ、イツカゲツゴ、ドンドルマ、カ。クックック・・・】

グオオオオオオオ!!!

全てのハンター、そしてモンスターたちは一つのことを記憶した。

決戦は一ヶ月後、ドンドルマ……。

第四十話

『時』は気まぐれである。生き物は普段、永遠とも思える『時』をゆっくり、ゆっくり、確実に過ごしていく。

だが一度生き物が日にちを定めると、『時』は、疾きこと風の如く過ぎ去る。それが、運命を決める、避けられない戦いが迫るのなら、尚更である。そこで生き物は理解するだろう。『時』という名の神は、残酷だと……。

そう。今、戦いの日を迎えた。

“起きろ、ラッシュー”

「ん……何だ、ミラージュ？」

ラシューはゆっくりと目を開けた。周りには濃霧と、黒い龍がいた。

“お前に一つ知らせだ。龍王が動いたぞ”

「何!?!。ってか、今何時だよ!?!」

“朝の4時くらいだ”

「こんな時間に動くのかよ、龍王は!?!不意討ちじゃないか!?!」

“そうではない。正確には、龍王はドンドルマに向けてモンスターを放った、と言おうか。ドンドルマに着くのは、正午ころだろうな”

「じゃあ、何でこんな時間に起こしたんだよ?」

“わからないか?今動かないとドンドルマの戦いに間に合わないからだ”

「あ!そうか、ここ砂漠の最果ての地にある遺跡だ。それじゃあ、早速、向かおう!!--」

ラシユーが体を起こし、遺跡の出口に向かおうとしたその時、黒い龍、クシャルダオラが言った。

“ 待てラシユー。お前はまだ、『鬼神化』をマスターしていないぞ。そんな状況で行くつもりか？”

「だって、ドンドルマがピンチなんだぜ！？それに、『鬼神化』は龍王との直接対決の時までにマスターすればいいじゃないか？」

“ お前は龍王を舐めているぞ。奴には強力な龍がついている。ならば早い段階でマスターしないと、この修行が台無しだぞ”

「う……」

ラシユーが戸惑っていると、痺れをきらしたのか、ミラージュが言った。

“ とにかく時間がない。ラシユーよ、お前が選べ。ドンドルマに向かうか、それとも、修行を続けるか……”

ラシユーは考え始めた。

「俺は・・・」

そして迎えた、正午。

ドンドルマの街の住人は、数日前にココット村やポツケ村に避難していた。その影響からか、街は活気を失い、静けさが支配していた。現在この街には、運命の戦いに備えるハンターしかない。

そしてドンドルマに続く街道には、何も無い。この戦いのために、全て撤去されたのだ。ドンドルマの周囲約1キロメートルには、何も無い、ただの広場となっていた。そしてこれから、ここは戦場となる。

ドス、ドス、ドス・・・

大地を踏みしめるのは、数多くのモンスターたちだ。

ドスランポス、イヤンクック等の鳥竜種。

ドスガレオス、ガノトトス等の魚竜種。

ダイミヨウザザミ、シヨウグンギザミ等の甲殻種。

ババコンガ、ドドブランゴ等の牙獣種。

そして、リオレウス、フルフル、モノブロス等、幅広い種が揃った、飛竜種。

辺りは、紫色の雲で、太陽が遮断され、不気味さが増していた。

【クックック。モンスターシヨクン。ココデ、マツテクレ】

龍王のことが響く。姿がないことから、遠く離れた、肉眼では見えないところから、この光景を見てるのだろう。

と、その時、

ギイアア、ギイアア

と、ドスゲネポスが鳴いた。

【クツクツク。キタカ、ハンタードモヨ】

モンスターたちから前方1キロメートル先の、ドンドルマの街から、多くのハンターが出てきた。

ランス、ガンランス、片手剣、大剣、太刀、ヘビィボウガン、そして少数だが狩猟笛を持ったハンターだ。

彼らは500メートルほど歩いた。その間、モンスターたちは動かなかった。そして、モンスターたちとハンターの間が500メートルほどになった時。

「全軍よく聞け！！お前たちを指揮する総大将は、このわし、『太陽の樹』所属、名はバリガン！！ランス隊、ガンランス隊は急ぎ最前列に出て、一列に並べ！！」

群青色の防具に、紺色の盾、そして巨大なランスを背負った、いかにも熟練した様子の、顎髭あごひげが目立つハンターが一番前に立ち、言った。

ランスとガンランスを持ったハンターたちは、直ぐ様一列に並んだ。
グオオオオオオウ

角竜『ディアブロス』が威嚇の声を上げた。

「同じく『太陽の樹』所属、ブルーニャ。片手剣隊、大剣隊は、ランス隊、ガンランス隊の後ろに並びなさい」

銀色の防具に、緑色の片手剣を持った女性ハンターが言うと、直ぐに片手剣、大剣を持ったハンターは指示に従った。

グアアアアアアウ

毒怪鳥『ゲリヨス』が羽ばたかせながら威嚇した。

「同じく『太陽の樹』所属、アイク。狩猟笛隊は後方で笛の準備をしる。太刀隊は狩猟笛隊の前に待機だ」

黒い防具、茶色の狩猟笛を持ったハンターが言うと、一斉に演奏す

る体形をとった。

ガアアアアアア

岩竜『バサルモス』、鎧竜『グラビモス』が揃って咆哮した。

「同じく『太陽の樹』所属、ハノン。ヘビィボウガン隊は、片手剣隊、大剣隊の後ろに並び、弾を装填しろ」

白銀の防具、白銀のヘビィボウガンを構えた女性ハンターが言うと、他のハンターは一斉に装填し始めた。

グオオオオオオウ

雌火竜『リオレイア』が威嚇した。

【カクゴハデキタカ、ハンタードモ。キョウデ、キサマラノ、ハイボクガキマル】

「残念だが、そうはさせないぞ、スサノオ!!!」

総大将バリガンが叫んだ。

【ナラバ、シヨウメイシテミロ。イッテオクガ、コノモノタチニハ、トクベツナ、ヨウジュツヲホドコシタ。キサマラノ、コザイクハツウヨウシナイゾ】

キイイイイイ・・・

スサノオが言った時、モンスター全ての体に高音を響かせながら紫色のオーラが纏った。

「どつという意味じゃ？」

「解らないか、バリガン？おそらく、相手に影響をあたえる、閃光玉や音爆弾が通用しないということだろう」

バリガンの問いに、アイクが答えた。

「ぬうつ、面倒じゃな。しかし、この状況こそ、『太陽の樹』の力を見せる時じゃないか、アイク？」

「ふっ……そうだな。バリガン、今こそ士気を上げる時だ」

アイクが言つと、バリガンはハンターたちのいる方向を向いた。

「全軍よく聞け！！今、お前たちの前にはスサノオ軍がいる！！正直言おう。我らの勝機はけっして高くない。ここで我らが負け、人の築き上げた世界が終わるかもしれない。だが我ら『太陽の樹』は約束しよう！！我ら人間が滅びる日は、今日ではない！！！」

バリガンが叫ぶと、後方にいたアイクも叫んだ。

「死を恐れるな！ここで死ぬとしても、我らが一緒に死のう！！そして一体でも多く道連れを増やそうぞ！！！」

アイクの言葉に、ハンターたちの目付きが変わった。

「皆の衆、決戦の時は今ぞ！！そして誓え！！皆が思つ、守りたいもの全てのために戦つと！！我らハンターの誇りを捨てず、死するその時まで戦つと！！！」

ブルーニヤが叫んだ。

「共に行こう、この花園に！！共に叫ぼう、我が強者ども！！！！！！」

ハノンが叫ぶと、直ぐにバリガンが叫んだ。

「いざ行かん！！ハンターの勝利を！！」

言い終わるとハンターが一斉に、

「おおーーーー！！！！」

と、雄叫びをあげた。それはあくまで勝つための咆哮。死を恐れず、未来へと繋げる咆哮。

彼らに呼応するように、背後のドンドルマの街からも、

「おおーーーー！！！！」

と、ハンターの咆哮が伝わった。

【チャバンハスンダナ。デハ、ハジメヨウ。モンスターショックン、オモウガママ、アバレテクレ】

龍王の声を待ち望んだかのように、

グオオオオオオオオ!!!

と、モンスターたちが一斉に咆哮した。

ハンターの咆哮と、モンスターの咆哮が響いたこの大地に、一筋の太陽の光が、まるでカーテンの様に降り注いだ。

それは美しい光景だ。しかし、それもこの戦場では、戦闘の合図でしかならなかった。

リオレウス、リオレイアが飛翔したかと思うと、続けてイヤンクック、ゲリヨス、フルフル、ティガレックスが飛び始めた。

彼らの目的はハンターでさえ分かっている。ドンドルマの街への空襲だ。

だが街から離れている、この場所にいるハンターの役目は違う。

グオオオオオオオウ

と、ディアブロス、モノブロスが咆哮し、頭を下げ、巨大な角を突きだし、突進し始めた。

そしてそれに続けとばかりに、肉食竜の長、ドスランポス、ドスゲネポスなどが後ろ足で駆け、バサルモス、グラビモスも遅いながらも突進し、ドスガレオス、ガノトトスが這いずりながら進み、ドドブランゴ、ババコンガ等の牙獣種は前足を器用に使い、ダイミヨウザザミ、シヨウグンギザミ等の甲殻種は四本の足で巨体を動かし、ハンターたちに向かった。

「狩猟笛隊、演奏始め!!」

「ボウガン隊、構え!」

アイクとハノンが言うと、狩猟笛隊は一斉に演奏し、ボウガン隊は銃口を突撃してくるモノブロス、ディアブロスに向けた。ハノン自身も白銀のボウガンを構えた。

グオオオオオオ!!

と、咆哮しながら突進してくるモンスターたちの地響きが鳴り響く。

そして、ハンターと先陣をきったモノブロス、ディアブロスとの間が100メートルをきった時。

「放て！！！！」

ハノンが叫ぶと、狩猟笛の効果を受けたハンターのボウガンから一斉に弾が放たれた。前方に立っていたハンターたちの頭上を越え、弾が加速する。

ドドドドドドーン！！！！

と、モノブロス、ディアブロスの角に弾が突き刺さった。おそらく徹甲榴弾が放たれたのだろう。

そして、ハンターたちの間が狭まった時。

ドオオオオオン！！！！

と、モノブロス、ディアブロスの頭部で徹甲榴弾が爆発した。

グオオオオウ・・・

これにはたまらず突進を止め、全てのモノブロス、ディアブロスが怯み、その場に止まった。

「行くぞ、アイク、ブルーニャ、ハノン！！」

「分かっている！！！！」

この一言で、バリガンの横に同じ『太陽の樹』所属のハンターが並んだ。

「よし！！全軍、突撃！！！！」

バリガンは叫ぶと、アイク、ブルーニヤ、ハノンと一緒に走り出した。それに続いてハンターたちは、

「おおおおー！！！！！！！！！！」

と声を上げ、一斉に走り出した。

グオオオオオオオ！！！！

モノブロス、ディアブロスの後方から、ドスランポス等の肉食竜のリーダーたち、ドドブランゴ等の牙獣種が迫ってくる。

「風穴を開けるぞ！！！！『鬼人化』！！！！」

バリガン、アイク、ブルーニヤ、ハノンが叫ぶと瞬時に、全身に赤いオーラが纏い、さらに狩猟笛の効果も受け、力が増していた。

「うおおおおお！！！！！！」

グオオオオオオオ！！！！

この両者の咆哮で、ついに正面決戦の火蓋は切って落とされた。それは、この戦いにおける、最も長い1日の幕開けでもあった……。

そして人知れず、このドンドルマを目指して走る四人のハンターがいた。

鋼色の防具、黒いランスを持った青い髪のハンター。

桜色の防具、桜色のボウガンを持った赤い髪の女性ハンター。

赤い防具、赤い片手剣を持った紫色の髪のハンター。

そして青い防具、桜色の大剣を持った『太陽の樹』所属のハンター。

「もう始まってしまったのか!？」

「今はとにかく急ぎましょう!！」

「修行の成果を見せる時が来たぜ!！」

「『太陽の樹』の皆、無事でいてくれ!！」

一言ずつ言つと、その後は無言で走っていた……。

第四十話（後書き）

すみません。かなり遅くなりました。大学生になって最近、急に忙しくなつたためです。

やっとここまで書くことが出来ました。久しぶりの戦闘です。相変わらずモンハンから脱線しまくってます。しかし、後戻りは出来ません！！急ピッチで書くぞ！！

（、、、）

第四十一話

激闘の幕開けから数十分たった。今、ドンドルマの街に、『火竜』
リオレウスを代表するモンスターたちが来襲した。

「撃てー！！！！」

設置されているバリスタから、一斉に弾が放たれた。

この戦いの日が来るまでに、街の至るところにバリスタが設置され
たおかげで、上空を飛んでいたモンスターたちに多段ヒットし、次
々と墜落していった。

だが、バリスタを避けたりオレウスの口から、

ガアアアアウ！！！！

と、火球が放たれると、これにはたまらずハンターたちも台から離
れた。

ドガアアアアン！！！！

と、バリスタが一撃で粉砕されてしまった。

「怯むなー！！顔よりも当たりやすい翼を狙え！！撃ち落とせー！！」

紅蓮のように赤い防具、黒い双剣を持ったハンターがバリスタを扱うハンターを鼓舞する。

ギヤアアアアウー！！

その背後から、『毒怪鳥』ゲリヨスが鳴き、黒い双剣を持つハンターに向かって走り出した。

「もっと周りをよく見ろよ」

ハンターは動じず、ただ呟いた。その時、一つの矢が飛翔した。

ドドドドドドドーン！！！！

その矢はゲリヨスの体を貫いた。

「少なくとも避けようとしろよ、ローラン」

建物の隙間から、黒い防具に、赤い弓を持ったハンターが現れた。

「悪い悪い。『黒衣の暗殺者』の腕前は相変わらず凄いな、ジャブアル！」

「うるせえよ……」

そう会話しているうちに、ゲリヨスが怒りだし、目の色を赤く変え、跳び跳ねていた。

「うおおりゃあああ！」

突如現れた金色の防具のハンターが、群青色のハンマーの強打をゲリヨスの頭部にぶちかました。

グアアアウ……

ゲリヨスは強い衝撃で目眩を起こし、その場に倒れた。

「下がって、アルマーズ！！」

青い防具に、茶色のボウガンを構えたハンターが叫ぶと同時に、弾

が放たれていた。

弾はゲリヨスの体に当たった。それまでは良かった。

「！！マジかよ！？」

アルマーズと呼ばれたハンターは仰天した。何しろ、着弾した瞬間に五個の爆弾が飛び散ったからだ。こんな変化をするのは、拡散弾の最高位、レベル3しかない。

ドドドドドドドン！！！！

ゲリヨスの回りで爆弾が起きた。金色の防具のハンターは間一髪でゲリヨスから離れ、何とか無事だった。

「ラーチエル！！てめえ俺を殺す気か！！！！」

「あんたがトロいからいけないのよ！！！！」

「なんだと！！やんのか、こらあ！！！！！！！！！！」

口喧嘩の間にも、ゲリヨスは立ち上がるうともがいていた。その時、ゲリヨスの目の前に、赤いオーラを纏った双剣使いが現れた。

「もがいているところ悪いが、ここが終焉だ」

双剣を持つハンターは、ゲリヨスの頭部で、双剣の奥義、《乱舞》をくり出した。

グアアアアアウ！！

その連続攻撃で、もともと弱っていた体は限界を迎え、ゲリヨスは倒れ、そのまま動かなくなった。

「あ！！ローラン、てめえ！！」

「悪いな。締めは貰ったぜ。はっはっは・・・」

ローランは笑いながら言った。

このドンドルマの街には、双剣隊、ハンマー隊、弓隊、ライトボウガン隊、そして少数の狩猟笛隊がいて、モンスターを迎撃していた。そのリーダーたちは皆、『太陽の樹』所属だ。

「遊んでる暇は無い！そろそろ散らばるぞ、ジャファル、アルマーズ、ラーチェル！！」

ローランが言った、その時。

ゴゴゴゴゴゴ……

と、地響きがあった。

「これは……」

ジャファルが言った瞬間、地面から一本の角が突きだした。その不意打ちで、バリスタを扱っていたハンターが体を貫かれ、命を散らした。

同時に、二本の青く巨大な爪も突きだし、ハンターの体が引き裂かれ、絶命した。

「ダイミョウザザミに、シヨウグンギザミか！？」

出てきたダイミョウザザミ、シヨウグンギザミの合計は、見えるだ

けで四体いた。

「地中を潜って街に来たか！？楽しくなってきたぜ！！！」

アルマーズが叫ぶと、ダイミヨウザザミ、シヨウグンギザミは四人の方を向き、鉄を上げ、威嚇した。

まさに一触即発。だが、そこに思わぬ乱入者が現れた。

グオオオオオオウ！！

という咆哮が上空から響き、白色の牙獣が二体降ってきた。

「ドドブランゴ！？バリガンたちは何をしているんだ！？」

ローランが言った。今、四人の回りには、合計六体のモンスターが取り囲んでいた。さらに、上空には飛竜たちがいる。

「まさか、このドドブランゴ、最初から街の破壊が目的！？バリガンたちの包囲網を強行突破したのか！！」

「万事休す、か」

周りのハンターはリオレウスたち飛竜種との激闘で、援軍は期待できない。四面楚歌とはこの事だろう。

「ちょっと早いが、『鬼人化』するしか方法はないか？」

ローランが言うと、三人は黙ったまま、それぞれ武器に手を当て、精神を集中し始めた。全ては勝利のため。自分の体が壊れる覚悟を持ち、奥義を発動しようとした。

と、その時。

ギィアアアアアウー！！

と、モンスターたちの悲鳴とも思える咆哮が響いた。

「何だ！？」

アルマーズが言うと、前方にいたドドブランゴが、後ろを見て、数歩横に歩いた。何かに警戒しているようだ。

「ん？なんだありゃ？」

アルマーズの前方に、『轟竜』ティガレックスが、至るところで血を吹き出しながら倒れていた。あれではもはや生きてはいないだろう。

そして、ティガレックスの側には、赤いオーラを纏った三人のハンターが立っていた。だが、三人とも双剣を持っていない。

アルマーズは、その姿に見覚えがあった。

「てめえら、確か雪山で……。だが、何で『鬼人化』を……」

「ふ……。やっと修行を終えたか。英雄たちは遅れてやって来るか。その通りだな」

アルマーズとジャファルがそれぞれ、前方にいる歴史に刻まれるだろう三人のハンターを見て、安堵と見える表情をとった。

「大長老の修行を終え、奥義を手にした三人のハンター、カナハル、ハルカ、ギイ。そしておそらく、レギンレイヴも……。凄いことになったな」

ローランも驚きを隠せない。

「大長老から貰った、この『レウスS』の防具と、『イフリートマロウ』の出番が、遂に来たぜ!!!」

「それは私も同じです。『リオハートU』の防具に、新しいボウガン、『ハートヴァルキリー改』。それに、この力も・・・」

「『太陽の樹』の皆さん！援軍にきました!!!共に戦いましょう!!!」

カナハルの声で、『太陽の樹』のメンバーは、勝機を見出した。

「若い奴らに遅れはとれないぞ!!!行くぞ!!!『太陽の樹』の力を見せるぞ!!!」

ローランが叫ぶと、モンスターたちは覇気を感じたのか、後退りする。

そして周りのハンターも、これに続いて勇気を取り戻し、士気が恐ろしく上がっただろう。

そしてその士気の急上昇は、街から離れたバリガンたちも同じだった。

「お待ちせしました！！『太陽の樹』所属、レギンレイヴ、参戦！
」

頼もしい援軍の登場に、バリガンたちも奮い立ち、そしてハンターたちも、嫌でも戦闘意欲が湧く。

修行を終えたカナハル、ハルカ、ギイ、レギンレイヴの参戦と、それに伴うハンターたちの士気の上昇。

これにより、戦況はハンターたちの絶対不利から、五分五分となっただろう。

だが、龍王はこうなることを予測していた。そして、ある者を解き

放っていた。

意気がるハンターに恐怖を与えるため。希望を絶望に変えるため。そして何より、ハンターの全滅を決定付けるため。

伝説の中の伝説の龍。雷鳴と共に、『祖なる者』が、ドンドルマに近付いていた……。

第四十二話

ドンドルマの激闘の開戦から二時間がたった。

奥義『鬼人化』を取得したカナハル、ハルカ、ギイ、レギンレイヴ、そして『太陽の樹』のメンバーの活躍で、一時はハンターが優勢になった。

しかし、龍王の術で閃光玉などの道具が通用しなくなったモンスターたちも負けず、ハンターを蹴散らしていった。

互いに犠牲者を次々と出しながら、戦況は泥沼化していた。

「はあ、はあ・・・」

ギイが肩で息をした。次々と襲いかかる飛竜たちに、次第に体力が限界を迎えようとしていた。

「集中しろ、ギイ！！」

カナハルは言うが、自分も疲れて、『鬼人化』の赤いオーラが消えかけていた。

グオオオオオオオオ！！！！

『雌火竜』リオレイアがギイのいる方を向き、咆哮した。両者の間には20メートルほどの距離があった。

「く!!」

ギイはリオレイアを睨み、新しい片手剣『イフリートマロウ』を構えた。そう。リオレイアしか視界に入っていなかった。

ガアアアアウ!!!

不意に上空から『火竜』リオレウスの放った火球が降ってきた。

「な!!!」

ギイが気付いた時には火球は目の前にあった。

ドオオオオオン!!!

と爆音が響き、ギイが吹き飛ばされた。

「ギイ!!!」

カナハルが気付き、ギィに駆け寄ろうと走り始めた、その時。

ズドオオオオン!!!

と、地中から『盾蟹』ダイミョウザザミが前方に現れ、カナハルを威嚇した。

「くそ、邪魔するな!」

カナハルは『ブラックテンペスト』を構え、強行突破しようとするが……

「う……!」

長い間『鬼人化』を発動したせいか、体が重く、突進できない。

そうしている間にも、倒れているギィにリオレイアが迫る。

「くそ、油断した!!!」

さっきの火球が命中した時、衝撃で『イフリートマロウ』を手放し

てしまった。その片手剣は数メートル左に転がっていた。

ギイはへっぴり腰になり、『鬼人化』のオーラも消え、その場で立
てず、ただリオレイアだけ見ていた。

グオオオオオオオ！！！！

リオレイアが咆哮し、口に火球を作り始めた。こうなってはもう遅
い。

（ここで終わりかよ！）

ギイが死を覚悟した、その時。

グオオオオオオウ……

突然リオレイアが火球を作るのを止め、上空を見上げた。

「何を……？」

カナハルは疑問に思った。それは、少し離れた場所で戦っていたハ
ルカも。いや、ドンドルマと、離れた街道で戦っているハンター全
てが疑問に思っただろう。

全てのモンスターが上空を見上げた。そして、

グアアアアアウ！！

と咆哮し、飛べる者は上空に舞い上がり、地中を潜れる者は土をかき分け、そうでない者は走り去った。

そのモンスターの目や表情は、まるで何かに脅えているようだった。

数分後、ドンドルマの街にはモンスターがいなくなった……。

(何かあったのか?)

全てのハンターが思った。

ドオオオオオン！！！！

突然雷鳴が響き、辺りに黒い乱雲が発生した。その雲から、『その者』は現れた。

「な、何だあれ!?!」

一人のハンターが言った。

龍にしてはデカすぎる体。紅蓮のように燃える赤色の瞳。そして体、翼、尻尾、全てが白銀に輝いている。

そう。モンスターが逃げた理由。それは単純に、ハンターに向けた神の怒りのとばっちりを受けないようにするためだった。

その者を古の時代いにしえを生きた人々は、こう表現している。

全てのモンスターの祖先。そしてこの世界に人間を創造したとも言われる、伝説の中の伝説の龍。古文書でも大まかな外見しか書かれていない者。

だが空想と思われた龍は、この世に降臨していた。その者は生きる神。その者の名は『起源』。

街にいたローランは呟いた。

「『祖龍』ミラルーツ・・・」

龍王が解き放った最強の龍。今、生きる神がドンドルマに降臨した。
。。。

「何てことだ・・・あれは『祖龍』ミラルーツ！龍王め、最初から
モンスターに頼ってなかったのか！！」

街道からミラルーツを見たバリガンが言った。ミラルーツの出現と
同時に街道には紫色の霧が発生し、不気味だった。

「とにかく、街に行きましょう！！」

レギンレイヴが言い、皆が街に向かおうとした時。

ドオオオオオン！！！！

と、地響きがあった。

「何だ！？」

バリガンは驚き、振り返った。すると、数分前に霧のかかった大地の向こうから、突如、二体の巨人の如く巨大な物体がこちらに近づいてきていた。

バリガンは目を凝らし、その物体が何なのかを調べた。

まず見えたのはダイミョウザザミ等のように四本ある足。異常に巨大な二つの鋏。そして、超巨大なモンスターの頭骨。ここまで解れば、その物体の正体が解る。

「シエンガオレンだ！！それも二体いる！！」

バリガンが叫んだ。その通り、巨大な物体は『砦蟹』シエンガオレンだった。金属を上回る黒い甲殻。その鋏はハンターの防具を軽く突き通す、最悪の凶器。そして、そのサイズに見合う、『老山龍』

ラオシャンロンの頭骨を背負う、最強の甲殻種。

そのシェンガオレンが二体同時に襲いかかって来た。

「この人数で、あのシェンガオレンを二体も相手にするのか？冗談キツイぜ」

アイクが言ったが、戦闘意欲はあるようで、早速武器を構えた。

「やるしかない・・・」

「バリガン、指示を頼む」

ハノンとブルーニヤが言った。

「皆の者！！もう一踏ん張りじゃ！！ハンターの意地を見せよ！！」

バリガンの声で、これまで生き残ったハンターは次々と武器を構えた。

「ドンドルマに到着する前に、何としても倒さないといけない！！」

その神の存在で、天候は一変し、雷鳴が轟く雲に囲まれ、空気そのものがピリピリと電気を帯び、威圧感が漂う。

「すげえ・・・これが伝説の龍か」

アルマーズが呟いた。そのミラルーツは、ゆっくりとドンドルマにある広場に向かった。

「広場に着地する気か。早く向かうぞ!!」

ローランが言うと、ミラルーツを見ていた『太陽の樹』のメンバーが動きだし、それに続いて多くのハンター、そしてカナハル、ハルカ、ギイも広場に向かった。

数分後、ドンドルマにある広場。

ドスン!!!

と広場にミラルーツが着地した。今、神の前方には『太陽の樹』のメンバーである、ローラン、アルマーズ、ジャファル、ラーチェルが立っていた。

「それじゃ、命懸けますか」

「こんな状況でも能天気だな、ラーチエル。だが、そうするしかないか」

ローランが言うと、双剣を構えた。

現在、ミラルーツの周りには、約三十人のハンターが囲んでいる。だが、『祖龍』は臆することなく、逆に見下しているかのような目でハンターを見ていた。

ミラルーツは突如、空気を吸い、

ギアアアアアア！！！！！

と、咆哮した。瞬間、一人のハンターの足元に、白く光が出現したかと思うと、

バアアアアアアアアアア！！！！

と、上空の暗雲から落雷が落ちてきた。

しばらくしてローランは落雷が落ちた方向を見た。

落雷の爪跡は深く、大地が抉られ、直撃したハンターの肉体は存在していなかった。否、事象そのものが否定され、防具もろとも神によって消滅されたと言ったところか。

「一撃であの世行き……。これが神か」

「言っているも仕方ない。ローラン、四方から攻撃だ」

ジャファルが冷静に言った。

「遠距離攻撃が出来る者は離れて攻撃！！それ以外は隙を見て迎撃！！まず我らが注意を引き付ける！！」

「さあて、行くとするか！！！！」

ローラン、ジャファル、アルマーズ、ラーチェルが武器を構え、叫んだ。

「『鬼人化』！！！！」

瞬間、赤いオーラが纏い、四人はミラルーツに挑んだ。

四人はミラルーツを四方に囲い、それぞれ渾身の一撃を放った。

ローランは足に乱舞を、ジャファルは頭部に貫通矢を、アルマーズは腹部に溜めた力を利用し、ハンマーを振り下ろし、ラーチエルはLV3徹甲榴弾を頭部に向けて放った。

だがローランとアルマーズの攻撃は、

ガキイイイン!!!

と鈍い音がし、『鬼人化』状態にもかかわらず弾かれ、ジャファルの貫通矢は当たったが浅くめり込むだけで致命傷にはならず、徹甲榴弾も数秒後に爆発したが、軽くのけ反るだけで、ミラルーツの表情に痛みを感じた様子はなかった。

「なんだ！こいつの硬さ、生き物じゃねえ!!」

「頭部にLV3徹甲榴弾を当てたのよ!?なんでそんな涼しい表情なの!？」

アルマーズとラーチエルが言った、その時。

ギイヤアアアアア！！！

と、ミラルーツが咆哮した。

「ぐあああ！！！！」

神の咆哮は尋常じゃなく、四人は耳を塞ぐ。

するとミラルーツは突如口に雷撃を溜め、そして、

ガアアアアウ！！！！

と、雷撃を空中に放った。そしてその雷撃が暗雲に当たった瞬間、雲が雷撃を呑み込み、暗雲の中で雷撃のエネルギーが増幅されていくのがわかった。

「嫌な予感がする！！全軍退避！！！！」

ローランが言った、まさにその時だった。

ズドンズドンズドン・・・

と、暗雲から落雷が次々と放たれ、ハンターに襲いかかった。

「うわあああ！！！」

ハンターの悲鳴が響いた。あるものは落雷を受け、肉体が消滅し、またあるものは叫んでいる時に直撃し、言葉を続けることが出来なくなつた。

そして広場に落雷が落ち続けること一分。やっと落雷が止み、辺りに土埃つちごぼりが発生し、視界が悪くなつた大地に、

グオオオオオオウ！！

と、ミラルーツの咆哮が響いた。それはミラルーツがハンターに天罰を与えた瞬間であり、ハンターは全滅したと、神は思っただろう。

一瞬の油断だつた。

「うおおおお！！！」

土埃から突如ジャファルが跳躍し、ミラルーツの頭部近くに現れた。

「デス・ビッグバン・アロー！！！」

一本の矢に『鬼人化』のオーラ全てを纏わせ、全力で放った。

ミラルーツは動くことが出来ず、頭部に矢を受けた。そして。

ドオオオオオン！！！！

矢が頭部で大爆発した。

ジャファルは全ての力を使い果たし、受け身をとれず、地面を転がり衝撃を和らげた。

「これで、終わりだ……」

辺りに爆発で再び土埃が発生し、ミラルーツの姿は見えない。たとえ死んでなくても、深手を負わせた。後はカナハルたちが何とかする。そうジャファルは思った。

だが……。

「！！！！！」

ジャファルは仰天した。

前方にはミラルーツが立っていた。角が数本折れていることから、確かに直撃したのは事実だ。だがミラルーツの目は死んでいない。むしろ、バチバチ、と頭部や腹部が赤くなり稲妻を纏い、怒りに満ちていた。

「馬鹿な！！俺のデス・ビッグバン・アローを受けて、ここまで軽症で済むとは！？」

グオオオオオオウ！！

ミラルーツは咆哮し、口に雷撃を溜め、

ガアアアアウ！！！！

と、ジャファルに向かって放った。

「な！！！！」

ジャファルは動けず、死を覚悟した。そして直撃と思われた時。

「うおおおおお！！！」

『鬼人化』を纏った二人のハンターがジャファルの前に立ち、雷撃を受けた。

「おまえら……」

ジャファルは知っていた。そのハンターは、約1ヶ月、雪山で出逢ったハンターだからだ。そのハンターの名は、カナハル、ギィ。

「ぐわああああ！！！！」

雷撃が爆発し、二人は同じ方向に吹き飛ばされた。ジャファルは間一髪で直撃を免れた。

だがそれも一時。ジャファルは周りを見た。

土埃が消え、明らかになった光景。同じ『太陽の樹』のメンバー、ローラン、アルマーズ、ラーチエルの三人が倒れている。それ以外のハンターはいない。先ほどの落雷でほとんど死に、生き残っても神に恐怖し、逃げただろう。ジャファルには、もうそんなことはどうでもよかった。

人間は、滅びる。

そう思い、ジャファルの意識は消えた。

「くそ……終わりか」

ギイが呟いた、その時。

「カナハルさん！！ギイさん！！」

カナハルとギイに近づく一人の女性が現れた。

「ハルカさん……来ちゃ駄目だ……」

カナハルが呟いた。だが、ハルカは散りそうな二つの命を守ろうと必死で、二人に駆け寄った。

グオオオオオオウ！！

その時、ミラルーツは三人にとどめをさすべく、口に雷撃を溜め始めた。

「あなただけでも、逃げて・・・」

「いや！！皆を置いてなんか行けない！！それに・・・」

ハルカは涙を流しながら、微笑んだ。

「それに、どうせ死ぬんだったら、皆と一緒に、死にたい・・・」

ハルカは覚悟していた。駆け寄る前から・・・。

ミラルーツは雷撃を溜め終わり、静かに口を開いた・・・。

その時。

ドオオオオオン!!!

と、音がした。

ハルカは顔を上げた。見ると、ミラルーツが何かの襲撃を受け、地面に倒れていた。

「え……」

ハルカが呟いた時、上空から龍らしき物体が降りてきた。

「クシャルダオラ？」

なぜここに……ハルカがそう思った時、黒い龍の背から一人のハンターが降り、こちらに近づく。そのハンターを、ハルカは知っていた。

「あ……。う……くっ……」

ハルカが声を上げ、泣いた。

「悪い、遅くなって。泣かせちゃったな」

「お……お前……」

「ぼろぼろだな、カナハル。ギイも」

「今まで何してたんだよ……」

「まあ、いろいろとな」

「うっ……心配、したんですから……」

そのハンターはハルカの頭を優しく撫でた。

「こんな状況で安心しろなんておかしいけど、あえて言わせてくれ。安心してくれ。後は、俺がなんとかする」

そう言つと、やっと起き上がったミラルーツの方を向き、睨んだ。

「俺はラシユ・クルトイオン！！！！てめえを倒す！！！！」

グオオオオオオウ！！

両者の咆哮が響いた。

第四十三話

ドンドルマの戦いは急展開を迎えた。

戦っていたモンスターは全て逃げ出し、代わりに『祖龍』ミラルーツが街に出現し、街道には二体の『仙高人』シエンガオレンが突如現れた。

街ではミラルーツと戦ったハンターは、ほぼ全滅。絶望的な状況の中、一人のハンターが現れた。

ラシューである。そして彼は、『生きる伝説』と戦う……。

“どろぢぢら、きりぎり間に合ったな、ラシュー。だが、この神を倒さないといけないぞ”

「神か……。悪いけどシャルダオラ、俺は神様なんかいねえと思ってるんだ」

“ふっ、お前らしいな。なら、龍王が飼い慣らした『祖龍』ミラルーツを倒せ”

「ああ!!!」

ラシユーが意気込んだ時、『祖龍』ミラルーツが、

グオオオオオオウ!!

と、ラシユーに向けて敵意むき出しの咆哮をあげた。

「なんて殺気だ。大気が痛い。これが祖龍か」

「ら、ラシユーさん。本当に、大丈夫ですか？」

「心配しなくていいよ。ははっ、逆にわくわくしてきたくらいだ。それじゃ、いくぜ!!!」

ラシユーは言うど、以前と変わらない太刀『エクディシス』を抜刀

した。

「まずは出方を見るか。『鬼人化』!!」

ラシユーが叫ぶと、体に赤いオーラが纏った。

ミラルーツは口にバチバチと音を鳴らしながら雷撃を溜めると、一気にラシユーに向かって放った。

「うおおおお!!」

ラシユーは太刀にオーラを集中させ、縦切りをすると、不思議なことが起こった。強力な雷撃は硬度が高いのか、剣と雷撃は言っならばつばぜり合いのような状況になった。

「くっ!!。っ!!」

雷撃のエネルギーは凄まじく、ラシユーは後方に吹き飛ばされた。一方、雷撃は軌道を変え、ハルカたちの右後方の建物にぶつかり、爆発した。当たった建物も無惨にも倒壊し、ガラガラ、と豪快に音をたて、瓦礫の山と化した。

「ラシユーさん！！！」

ハルカが倒れているラシユーに駆け寄った。

「だ、大丈夫だよ」

「でも、手から出血が・・・」

ラシユーは見ると、確かに血が出ていた。雷撃が多少手に当たり、皮膚を焼き切ったらしい。しかし深刻なのは太刀の方だった。

「あちゃゝ。これじゃ、当分使えないな」

『エクデイシス』がバチバチと電気を帯びていて、とても触れない。刀身も赤くなり、高温になっているのがわかる。

「ちっ、仕方ない。おいクシャルダオラ！あれを頼むー！！」

“分かっている”

ラシユーが言うと、辺りを飛翔していたクシャルダオラがラシユーの方に向かい、そして真上にきた時、クシャルダオラは何かを落と

した。

ラシユーは、その何かを手にした。それを見たハルカは思わず、

「え・・・何、あれ」

と、呟いた。それほどラシユーの手にした物は変だった。

黒い柄と鍔があることから、太刀と分かる。ただ、従来の太刀と決定的に違うところが一つある。

肝心の刀身が無いのだ。ただのおもちゃとしか見えない刀身が無い太刀を、ラシユーは構えた。

「ま、まさかラシユーさん。それで戦うのですか？」

ハルカが言うと、ラシユーは少し振り向き、微笑んだ。それは、大丈夫だ、と言っているようだ。そしてラシユーは再びミラルーツの方を向いた。

「さあて、いよいよ本番だぜ！！準備はいいか、ミラージュー！！」

“減らず口を叩くな。一気に決めるぞ”

突如、クシャルダオラとは別の声が聞こえた。ハルカは意味が分からず、辺りを見渡した。

「じゃあいくぜ!! 『鬼神化』!!!」

ラシューが叫ぶと、赤いオーラが、青いオーラに変わった。まさに修行の成果と言えるだろう。

「新しい相棒『神剣カムド』!!! 発動!!!」

ラシューが言うと、

ズギャアアアン!!

と音がすると同時に、今まで無かった刀身が現れた。いや、刀身と言っより、『鬼神化』のエネルギーが刃の形をしているようで、刀身は青色だった。その長さは2メートル近くあった。

“リフレクトチェンジ、ブレード!!!”

声が聞こえると、

キィィィィン!

と音がすると、青色の刀身が、純白の刀身に变化した。

“成功だな。この世界では私はこの姿なら大丈夫なようだな。地上に出る勇気を与えたのは、ラシユー、お前だ”

「へっ、あんたでも礼を言うんだな。だったら俺にも言わせてくれ。遺跡で俺の無茶な説得を信じてくれてありがとうな」

ミラージュとラシユーの礼の言い合いが終わると、

グウウウウ・・・

ミラルーツは今まで見たことない光景に、警戒の声をあげた。

「さて、突然で悪いな。だが時間はかけない。一瞬だ」

ラシユーは振り被り、言った。

「『鬼神天衝』！！！！」

瞬間、太刀から三日月状の斬撃と思われる物体が放たれた。

グアアアウ！！

咄嗟にミラルーツは自身に雷撃の鎧のようなものを纏い、全身で斬撃を止めようとした。

ドオオオオオン！！！！

と接触音が発生し、斬撃とミラルーツの力比べが数秒続いた。

グオオオオオオウ

しかし鬼神化の斬撃の威力の方が勝った。ミラルーツが押し返され始めた。斬撃がミラルーツの腹部に当たり、鱗や甲殻が傷付けられていく。

グアアアアアウ！！

ミラルーツは力を振り絞るが、勢いは止まらず、そして200メートルほど押し返され、大きな建物にぶつかった。

ドオオオオオン！！

と音がし、頭上から崩壊した建物の残骸が降ってきた。

「終いだー!!」

ラシューが言うと、膨大な量の鉄などの固い物体がミラルーツに襲いかかった。

ガラガラガラガラ・・・

とミラルーツがいた所は瓦礫の山と化した。

「す、すごい・・・」

あまりの威力に、ハルカはただ呟いた。ラシューの力は、もはや人間の力ではなかった。

「ふう・・・」

ラシューは終わったと思い、鬼神化を解こうとした、その時。

“構える!!!”

突然ミラージユの声がした。刹那、上空の暗雲から落雷が放たれた。

「なっ!!!!!!」

ラシューは咄嗟に太刀を頭上で横に構え、大剣のガードのような体制をとった。

従来の太刀はガードすると大概折れてしまうので、ガードは禁物だ。しかし『神剣カムド』は、折れる刀身その物が鬼神化の力で出来ているので、折れる心配は無い。だから咄嗟にガードの体制をとったのだ。

落雷がラシューに襲いかかる。

「ぐぐぐー!」

ラシューが落雷のパワーに押し負けず、粘っていた時。

ドオンドオン!!

と、暗雲から次々と落雷が放たれた。それもラシューのいる一点に向かって。

「うおおおおー!」

連続の落雷で、ラシユーの叫び声が聞こえるが、土埃が発生して見えない。しかし、どう考えてもラシユーは落雷に負け、直撃したとしか考えられない。落雷は数十発放たれ、ようやく終わった。

「ラシユーさん！！！」

ハルカが叫んだ時。

ギュイイイイイン！

と音がすると、ミラルーツがいた所の瓦礫の隙間から強烈な光が発せられていた。そして、

ドオオオオオン！！

と瓦礫が吹き飛んだ。そして。

グオオオオオオウ！！

と、ミラルーツの咆哮が響いた。全身が傷付き、特に腹部には斬撃の傷跡とおもわれる大きな血で赤い線ができていた。

だが、それに負けず、逆に怒りに満ちていた。全身に雷撃が走り、傷跡から電流がバチバチと音をたっていた。

「くそ……」

土埃からラシユーが現れた。だが、全身の鎧の隙間から血が溢れだし、頭からも出血していた。

「ラシユーさん!!」

ハルカが叫ぶ。ラシユーはふらつき、青色のオーラが消滅しかけていた。

グオオオオオオオ!!

ミラルーツは突然飛翔し、ぐんぐん高く飛んでいくと、上空500メートルくらいの所で止まる。

“まずい!一撃で決めるつもりだ!!ラシユー、意識を保て!!『鬼神化』を解けば、街は滅びるぞ!!”

ミラージュが言うが、ラシユーは意識が朦朧としているらしく、ふらついていた。

最後の希望の光が、消えかけていた……。

一方、街道で戦うハンターたちは、二体の『砦蟹』シエンガオレンに苦戦していた。

これまで、シエンガオレンの巨大な足に踏まれ、一撃で命を散らした者がたくさんいて、状況は絶望的だった。

「く……皆耐えろ！！なんとしても街に行かせるな！！！」

疲労しきっているバリガンが戦っているハンターを鼓舞する。と、その時。

「バリガン隊長！！あ、あれを見てください！！」

一人のハンターが指差した。バリガンはその方向を見た。

「う、嘘だろ・・・」

バリガンは驚愕した。上空を飛翔する三体の竜。しかも、それはただの竜ではなかった。鳥竜種でも、飛竜種でもない。四本の足に、巨大な翼。一体は赤く、一体は青く、さらにもう一体は紫色をしていた。

さらに地上から一体の白い馬のような生き物が、合計四体がこちらに向かっていている。

「ナナ・テスカトリ、テオ・テスカトル、オオナズチ、キリン。『古龍種』が四体も・・・」

バリガンは絶望した。この状況で古龍種の登場。今、完全に勝機は消えた。

ブルーニヤは剣を置き、空を見上げた。

「天は我らに滅びると言っているのか・・・」

「終わった・・・」

いくら『太陽の樹』のメンバーといえど、この状況ではどうするにも出来ない。

「バリガン隊長！！シエンガオレンが迫っています。早く逃げてください！！」

「もうよい。戦う必要はない」

バリガンは目を閉じ、膝をついた。

他のハンターも完全な戦意喪失し、同じように目を閉じた。

ドオン、ドオン・・・

と地響きになる。早く殺してくれ。だれもが思った・・・。

その時。

ガシャアアアン!!!

と音がした。バリガンは目を開けた。すると。

「なんだ、これは・・・？」

バリガンは不思議な光景を目の当たりにした。

二体のシェンガオレンが倒れている。その頭部には、古龍たちがシェンガオレンに向けて攻撃していた。ナナ・テスカトリ、テオ・テスカトルは火炎を放射し、オオナズチは口からいろいろな液体やら気体やらを出し、キリンは雷をシェンガオレンの足に当てたり、角で攻撃していた。

「何が、どうなっているんだ？」

アイクが思わず言うくらい、それは不思議な光景だった。

“ハンターシヨクン。アキラメルノハ、ハヤイズ”

突然声がした。見ると、上空から緑色の巨大な物体が降りてきた。

「ヤマツカミ？」

バリガンは呟いた。

“ハンターシヨクン。ワレハ、ヤマツカミ。コヨイ、シヨクンラノ
タタカイニ、カセイニキタ”

「加勢？」

“マズハ、ワレノカラダニフレヨ。ソノホウガ、コウツゴウダ”

「何だか知らないが、味方が来たようだ。皆、諦めるのはまだだ！
！」

バリガンが叫ぶ。他のハンターも、戦意を取り戻した。

今ここに、人と龍の共同戦線が誕生した。

「ラシューさん！しっかりしてください！..」

ハルカが叫ぶが、ラシューはつつむき、ふらついている。

グオオオオオオ！！！！

一方、ミラルーツは上空で雷雲に向かって口を開けた。

ドオン！ドオン！

と、ミラルーツの口に落雷が撃ち込まれた。そして、口の中で球体

が作られていた。

“ブレスを撃ち込むつもりだ。あの膨大なエネルギーがここに放たれたら、この街は一瞬で吹き飛ばすぞ！ラシユー、早くしろ！！！”

クシャルダオラがラシユーの側にいき、言葉を発したが、ラシユーに変化はない。

「ラシユー！！！」

今まで黙っていた満身創痍のカナハルが叫んだ。

「早く目を覚ませ！！！」

同じく満身創痍のハンター、ギイも顔だけ上げて叫んだ。

「ラシユーさん！！お願いします、早く！！！」

その光景を見ていたハルカも、ラシユーに向かって言った。そうしている間にも、ミラルーツは落雷を利用して雷球を作っていた。

「み……んな……」

“気付いたか、ラシユー？今戦えるのはお前だけだが、勘違いするなよ。皆、お前を支えている、大事な存在だ。お前は一人じゃない。あのハンターたちも、我らも、お前の味方だ”

クシャルダオラが語るように言うと、ラシユーは、はっ、と目のピントが合い、顔を上げた。

“ヒーリングミラージュ、発動”

太刀から発せられる声の主、ミラージュが言うと、ラシユーの全身が白い気体に包まれた。

「ミラージュ……？」

“これで当分の間は出血は止まる。ラシユー、お前のすべきこと、わかっているか？”

「へっ……当たり前、だろ」

ラシユーは太刀を構え、上空のミラルーツを睨んだ。

「ラシユー……」

カナハルが安堵の声をあげた。

「クシャルダオラ。俺をあそこまで運んでくれ」

“ふっ、こうなった以上、何も言うまい。我に任せろ”

“ラシュー。お前のしようとすることはだいたい解っている。私とクシャルダオラは、全力でサポートしよう”

「へっ、ありがとな、みんな」

ラシューは言うど、クシャルダオラの背に乗った。クシャルダオラはすぐに上空に舞い上がった。ぐんぐんスピードをあげ、ミラルーツに迫る。

“お前の『鬼神化』の発動時間は、もって五分。限界が近い。一撃で決める”

「わかってる。もう一瞬でも油断すると意識がとびそうなんだ」

ラシューたちがミラルーツに迫り、距離が200メートル近くになった時。

グオオオオオオオオ!!!

ミラルーツは顔を持ち上げた。

“ 跳ベラシユー!!! ”

クシャルダオラが言うと、ラシユーは迷わず力の限り跳んだ。

ブオオアアアア!!!

と、その瞬間、ミラルーツから雷球が放たれた。口から離れた瞬間、圧縮されていたエネルギーが膨張し、雷撃は直径100メートルの球体と化した。

それと同時に、クシャルダオラは大きく息を吸い、そして

グアアアウ!!!

と、風でできた球体を放った。

“ コーティングボール、発動 ”

ミラージュが言うと、ラシユーの周りに白い球体状の気体に包まれ

た。

ラシューは後ろから迫ってくるクシャルダオラが放ったプレスに当たった。しかし爆発せず、逆にその推進力で加速し雷撃に迫る。

“『鬼神化』の力を太刀に集中しろ。あの雷撃を内部破壊するぞ”

「わかってる！！！」

ラシューは太刀にオーラを集める。すると、刀身がさらに大きくなった。鬼神化の力に反応したのだろう。

「うおおおお！！！！！」

ラシューの咆哮後、雷撃にぶつかり、侵入した。

「ぐぐぐぐぐ！！！！！」

四方から襲いかかる衝撃に必死になって耐えた。白い球体に包まれているので瀕死にはならなかった。

「負けるもんか！！！」

ラシューは意識を集中した。

そして突っ込んでから数秒たった。

「!?!」

ラシューに、信じられない光景が目に入った。

雷撃の中とは思えない、穏やかな空間。黄色い世界。宙に浮いたよ
うな無重力感。そこに、一人の男が迫ってきた。

「お、親父？」

その男はラシューの前で止まり、微笑みながら言った。

「未来を頼んだぞ」

「え……？」

ラシューが呟いた時、空間が消えていった。

雷撃に異変が起きた。雷球の所々で光がもれ始めた。そして。

バアアアアアン！！

と、空中爆発した。その中から、白い球体が現れた。

“これで決める、ラシユー！！！”

白い球体が消え、中からラシユーが現れた。風のブレスはさっきの爆発で消滅し、爆発の勢いでミラルーツに迫る。

ミラルーツは信じられない光景に驚いた様子だが、龍の本能からか、ラシユーに噛みつき口を開ける。

だがそんな苦し紛れの攻撃など精度が欠けているもの。ラシユーは体をひねって避けると、その勢いで太刀を顔の先端にぶつけ、貫いていく。

「うおおおおー！！！」

最後の力を振り絞り、太刀に神経を集中させると、刀身が信じられない大きさになった。それはミラルーツの全長を超える。

ギィアアアアア！！！！

ミラルーツの悲鳴などラシユーの眼中になく、ラシユーはミラルーツの足まで伸びた太刀を力の限り振り上げた。

ズザアアアアン！！！！

と、固い甲殻を裂き、尻尾を、腹部を、そして頭部が二等分された。

ミラルーツの切断面から膨大な量の血が噴き出す。ミラルーツは断末魔をあげることなく、『神』は絶命した。

「やった・・・」

ラシユーは力を出し終わり、鬼神化を解き、そのまま意識を失った。ラシユーの体が墜落する。

“よくやったな、ラシユー”

クシャルダオラがラシユーの体を受け止めた。その手には、ミラー

ジユのやどった刀身のない太刀が握られていた。

「や、やった・・・」

地上では、カナハル、ハルカ、ギイが目を疑ったが、ラシユーの勝利を言葉にならない言葉で嘔みしめた。

ドオオオオオン！！！！

と、ミラルーツのきれいに半分に切断された亡骸が地面に叩きつけられた。

一方、ミラルーツの敗北で街道の戦況は変わった。

二体のシェンガオレンはミラルーツの敗北を目の当たりにし、完全に戦意を失い、急いで退却し始めた。

「ついに終わったか。我らの勝利だ！！！！」

バリガンの声で、生き残ったハンターの歓喜の声が街に届いた。

今、地獄の戦いが終焉を迎えた。

第四十三話（後書き）

ついに街の戦いが終わりました。完結まであと少しです。

まあ相変わらずのモンスターハンターの常識を完全に無視した小説と化しました。もうファンタジーの域です（＾|＾；）

第四十四話

ドンドルマの街の死闘から五日たった。戦いはハンター側が勝利したが、その痛手はあまりにも大きかった。

参戦した屈強なハンターの半数以上が戦死した。しかも生き残ったハンターのほとんどは重症を負った。

この日、ドンドルマの広場にハンターの召集がかかった。

現在集まったハンターの数は30近く。今ここに、全身の所々が包帯で巻かれている一人のハンターがいた。

「おつ、ラシユード。元気になったか？」

「そついうお前こそ、包帯だらけじゃないか、カナハル！」

親友の二人は互いに肩を叩き、笑った。

「全く、三日間意識が戻らなかったあんたが今びんびんしてるなんて、信じられないよ」

「はは。まあこれも、ハルカの献身的な介護のおかげだな」

「ふふっ、ありがとうございます」

四人は久しぶりの再開で会話が弾んだ。

「でも、少なくなったな、ハンターの数。一ヶ月前は、あんなにいたのに」

「あの戦いの後だからな。勝っただけマシだよ、本当に」

「心配なのは『太陽の樹』のメンバーだよ。彼らが戦えないと、これから厳しくなるからな」

「静かに。大長老が来たわ」

ハルカの声で三人は話を終えた。ゆつくりと、大長老が歩き、そして言った。

「まず、ドンドルマの戦いは皆の勝利に終わった。しかし、その代償は大きい。皆、戦死者に冥福を祈ろう」

大長老は目を閉じた。他のハンターも、同様にして、冥福を祈った。

「皆、体の傷は癒えたかな？ 諸君らに嬉しい知らせだ。『太陽の樹』のメンバーの傷が癒えた。来てくれ」

大長老が言うと、後ろから九人のハンターが現れた。全員、元気そうだった。それを見て、ハンターは歓喜の声をあげた。

「よかった。もう大丈夫なんだ」

カナハルが呟いた。

「さて、本題に入ろう。龍王の動きじゃが・・・」

“そのことについては我が話そう”

不意に声が聞こえると、上空から緑色の物体が現れた。

「賢者か。丁度よかった。あなたが知っていることを教えてくれ」

“わかっている、大長老。さて全員我の一部に手を触れたかな？”

ゆっくりと地上を漂い、ヤマツカミがハンターを見た。

“どうやら大丈夫だな。一つ言おう。我ら古龍種は龍王に誇りを踏みにじられ、龍王から離反した種族。そなたたちの味方だ。話を戻そう。この戦いでハンターの勝利は、龍王自身を破滅へと導くだ

るう”

「それはどういうことじゃ？」

“龍王は最初からモンスターたちに頼ってなかった。どんな状況になっても祖龍が決める、と思つての行動だろう。しかし祖龍は負けた。龍王は決定的なチャンスを逃しただけでなく、『祖龍』という存在を失つた。だがこれだけではない”

「なんじゃ？」

“モンスターとはいえ、自分に誇りを持っている。彼らはそれを踏みにじられ、しかもこの戦いで負けた。各地のモンスターは龍王に失望し、フィールドに戻り龍王の召集にいつさい応じていない。つまり、やつはハンターのみならず、モンスターも敵に廻した。今や龍王は孤立無援の状況だ”

「ふむ……ならば一気に畳み掛ける好機だな。じゃが場所がわからぬ」

“心配はいらぬ。我が場所を知っている”

ハンターたちが一斉に動揺したが、ヤマツカミは話を続けた。

“ここから西に行くこと100キロメートル。そこに紫色の結界に包まれた空間がある。龍王はおそらくそこにいる”

「なら、すぐに全軍で向かうしかないな!!」

アルマーズが叫んだ。

“ふっ、威勢はいいな。だが一つ問題がある。その結界は前日に突然現れた。意味が解るか?”

「我らを誘き出す策か。だが、やつにまた戦える戦力はあるのか?」

ジャファルが言うと、皆考えこんだ。龍王に未だ従う者。そんなのがいるのか。

「あっ!!!!」

“どうしたラシュー。何か思い当たりがあるのか?”

「塔の戦いで俺が戦った竜がまだ残っている!!名前はたしか・・・」

“漆黒のリオレウス、エベニーソルか・・・。たしかに結界からは

漆黒の竜がいたと報告がある。おそらくそいつだろう”

「エベニーソル……。一体どんな生物なんだ……」

レギンレイヴが呟いた。

“とにかく龍王が戦力を確保できていない今が好機。すぐに出撃するべきだ。道案内は我がしよう。しかし問題もある。結界の中は我らでもわからぬ特殊な波動が出ている。並みのハンターでは危険すぎる。はてさてどうしたものか……”

「ならば、『太陽の樹』のメンバーのみで出撃したらどうじゃ？ 彼らはドンドルマが誇る最強の猟団じゃ。怪我も癒えてるし、問題はあまるまい？」

大長老の意見に、ヤマツカミや全てのハンターも納得した。

“それは名案だな。しかしそれだけでは心配だ。そこで考えたが……”

ヤマツカミはラシユーの方を向いた。

“街を救った張本人、ラシユー。そしてそれを支える優秀なハンター

「、カナハル、ハルカ、ギイ。この四人も向かわせたい”

「俺たちも!？」

ギイが驚きの声をあげた。

「たしかに彼らの実力は知っている。異論はないな・・・」

大長老が言った。皆、四人の実力はドンドルマの戦いで知っている
ので、皆納得した。

“では決定だな。向かうは我と13人のハンター。ドンドルマには
残りのハンターと、我の同胞が残ろう”

「では明日出発しよう。各自、解散してくれ」

大長老の声で、ハンターはそれぞれ広場を後にした。ヤマツカミも
ドンドルマの上空を上がっていった。

夜、ドンドルマの街道。

ラシユーは一人ここに来た。

“来たかラシユー”

上空からクシャルダオラが現れた。

「ようクシャルダオラ。明日でお別れだな。今までありがとな」

“終わりではない。必ず生きて戻ってこい。龍王を必ず倒せ”

「わかってるよ。でも何で賢者はハンター側についたんだ？誇りを踏みにじられたからって言ったって、そう簡単に裏切れるものか？」

“ふっ、そうだな。今の賢者は、一体の反逆者と成り下がったかもな。だが今の賢者は生き生きしている。不思議なものだな”

「・・・解答になってないぞ」

“そう焦るな。少し昔話しよう。我は物心ついた時から賢者と共に生き、悠久の時を共に過ごした。その頃の賢者は人間に強い嫌悪感を抱いていた。人間が勝手に生活圏を定め、お前らモンスターハンターが我らを駆逐していったからな。だが一人のハンターが賢者のもとに現れた。その後、賢者は変わった”

「そのハンターってもしかして・・・」

“そう。お前の父親、ライレルだ。その後、龍王は現れた。当初は龍王に協力していたが、塔の戦い後、我らは離反を決意した。なぜか分かるか？”

「だからそれを聞いてるんだよ」

“ははは、そうだったな。では教えよう。それは昔から人間が我らを狩ろうとするからだ”

「は？意味が解らないんだけど」

ラシューは言ってる意味が解らず首を傾げる。

“想像してみる。お前ら人間はモンスターを全て倒し、生態系の頂

点に立つた。そこから見えるのは何だ？”

「・・・そりゃ、命が狙われない、平和な世界だろ？」

“ふっ、皆そう思うだろうな。だが考えてみる。その後モンスターハンターはどうなる？狩るべきモンスターがいない世界だ。食料となる弱いモンスターが残ったとしても、退屈な世の中だと思わないか？”

「言われてみれば、たしかにそうだな」

“我らは知ったのだ。頂点に立つことすなわち、絶望だと。逆に戦ってくるハンターがいる世界のほうが、ずっと楽しめると・・・”

「まあ俺たちも同じだな。モンスターがいない世界なんか、退屈で仕方ないからな。何だか矛盾してるな」

ラシューは言う和高らかに笑った。

“我らと人間は互いに争いながら共に成長した。その連鎖は続かなければならない。だからこそ、龍王を倒さなくてはいけないのだ。人間を全滅させることは、我らを全滅させるも同じ。長い時をかけて作った生態系を壊す龍王は、裁きを下さなければならぬ。ラシ

ユーよ、頼んだぞ。くれぐれも『鬼神化』の発動を誤るなよ。もつて五分なんだからな”

「へっ、任せとけて。それじゃ、寝るか!!」

ラッシューは言うど、ドンドルマの街に戻り始めた。

“ラッシュー”

「ん?」

“ 龍王に支配されたライレルの魂を救ってくれ。やつは、賢者、我、そしてミラージュの、かけがえのない友なのだ”

ラッシューは手を握り親指を上げ、微笑んだ。

そしてそれぞれの思いが交錯した、戦いに臨む13人のハンターの、
それぞれの夜が、ゆっくと朝を受け入れる・・・。

第四十五話

『太陽の樹』のメンバーの九人、そしてラシュー、カナハル、ハルカ、ギイ。選ばれし13人のハンターは、ドンドルマに朝日が照りつけた時、残るハンターから歓声を受けながら街を出発した。

向かうは龍王の居座る謎の地。一行は賢者ヤマツカミの案内で、竜車四台で移動していた。

そのうちの一台にはラシュー、カナハル、ハンター、ギイが乗っていた。

「なあラシュー。エベニーソルって、どんなモンスターだ？」

カナハルがたずねた。

「なんていうか・・・外見はリオレウスが黒くなった様だったが、火球の威力が桁違いだった。それにやつは空中からの攻撃を多用したな。まあだいたいはリオレウスと同じだよ」

「だけどころどの戦いは龍王が出てくる可能性が高いからな。その時は、龍王はラシューに任せて、俺たちはそのエベニーソルと戦うことになりそうだから、少しでも情報が欲しいんだ」

「わかったよ。でもあの戦い、あんまり覚えていないんだよな。他のことではいっぱいだったし」

「ラシューさん。龍王がもし、ライレルさんの体を支配していたら・・・」

「大丈夫だよ、ハルカ。もう覚悟はできている。どんなことがあっても龍王を倒して、元の世界に戻る。親父も、それを望んでいると思うから・・・」

「ラシューさん・・・」

重苦しい雰囲気がしばらく続いた・・・。

竜車に揺られて二日後の夜。

“ 諸君。外を見る ”

ヤマツカミの声で、ハンターたちは竜車を降り、周りを見渡した。

「 なんだこりゃ・・・ 」

アルマーズが驚きの声をあげた。

そこから見えたのは、地面から発せられる、天まで続くかとおもわれる紫色の異形の物体。その光は円柱状に広がっている。そして、ハンターの前方には、巨大な山のような物体もある。

「 なあジャファル。あの山のような物体。あれもしかして・・・ 」

“ 勘がいいな。彼は結界が現れてからずっと様子を見て、そのつど我に報告していた ”

“ 賢者か？ やつと来たか。待ちくたびれたぞ ”

不意に声が聞こえると、山のような物体が動いた。

“ 我の同胞、『老山龍』ラオシャンロンだ。我の意思に賛同してく

れた、もうひとつの賢者と言える存在だ”

“ よしてくれ賢者。我は所詮、老いぼれの身だ。何かを知っても、何もできない。賢者はあなたのみだ”

ラオシャンロンはヤマツカミとハンターのいる方向を向き、近づいてきた。

「何もできない、か。歩くだけで天災を呼ぶラオシャンロンが、よく言うよ」

“ そういうな。ラオシャンロンと言えど、老いる者さ。さて、龍王の動きはどうだ？”

“ 変わらんよ。龍王はこの中にいる。そして賢者が話すように、エベニーソルも共にいる。今やこの中には龍王とエベニーソルしかないだろうな。だが気をつける。この結界から出る波動は、モンスター の力を増幅させる。つまり内部にいる龍王とエベニーソルの力も増していると考えられる”

「ふっ、やはり畏か。ここで我らを全滅させて、残りのハンターをドンドルマで根絶やしにする。そうしか考えられない」

ローランが分析して言った。皆もその考えだったようだ。

“だが逆に言えば、龍王自身の敗北となりえる。どちらが勝者でも、この一戦で全て決まる。ハンター諸君。今のうちに寝ておけ。決戦は昼だ”

ハンターは緊張感漂うこの地で、来る時まで休む。時が刻一刻と近づくのを感じながら……。

時は早い。あっという間に昼を迎えた。

“ではいくぞ。ここからは自らの足で歩め”

ヤマツカミの声で、一行は結界に近づく。その間、誰も話さなかった。

そして結界が目の前に差し掛かった。

“この結界は龍王の意思そのもの。やつが戦いを望めば諸君らは容易に入れるだろう。さて、我らの出来ることはここまでだ。後は諸君らが未来を切り開くのだ”

ヤマツカミが言い終わると、13人のハンターは結界の前で一列に並んだ。

「ここに入れば、宿命の戦いが待っている。皆、覚悟はできているな？」

バリガンが言うと、全てのハンターが頷いた。

「よし、では、行くぞ!!」

ハンターたちは一斉に結界に飛び込んだ・・・。

結界は思いの外ほか簡単にやぶれ、侵入に成功した。

「・・・これが、結界の内部か」

辺りには何も無い、ただの戦闘ができる巨大な空間が広がっていた。そして前方300メートルほど先には巨大な城壁があり、その中心には、巨大な門がある。

一行は注意しながら先に進んだ。紫色の空間に包まれた結界の中は不気味だった。

「臭い・・・これは血の匂いだ」

ハノンが腕を鼻に押し当てながら言った。

「この匂い、尋常じゃない量の血が流されたな。一体何が行われたんだ・・・」

【ソレハ、アルギシキノタメダヨ】

「!!!!。龍王、どこだ!?!」

「門の前に人影があるぞ!!!!!!」

ハンターたちは一斉に駆け出した。近づくにつれ、その人影が誰かが解ってきた。

「ライレル様……。いや、あれはライレル様の衣を纏った龍王スサノオか」

【ククク・・・イカニモ。ワレハ、リュウオウ、スサノオダ】

「親父の体は返してもらおうぜ!!」

ラシューがハンターたちの一番前を歩き、龍王を睨んだ。

【ハタシテ、ユウゲンジツコウデキルカナ?ワレノアイテガツトマルノハ、オマエノミ。ホカハ、ドケ】

「残念だが、俺たちを舐めてもらっては困る。出せよ、お前に従う唯一の竜、エベニーソルを!!!!!!」

ローランが叫んだ。

【フツ、ヨカロウ。ダガ、ヒトツカンチガイシテイル。ソノリュウ
ノナハ、エベニ―ソルデハナイ】

「何・・・？」

【スグニワカル】

龍王が言った、その時。

グオオオオウ！！！！

と咆哮が響くと、門の頂上に黒い竜らしき物体が現れた。

「あれがエベニ―ソル。確かにリオレウスの形をしているな。だが、
名が違うとはどういうことだ？」

バリガンが言うと、突然黒き竜が跳躍し、龍王の側に着地した。改
めて明らかになる謎の竜の全体像。それは異様を極めていた。

「何なんだ、あの竜。あんな竜が存在していいのか！？」

カナハルが驚きの声をあげた。だがそれは誰でも驚く光景だった。

通常、飛竜種は前足が翼に変化していて、後ろ足と巨大な翼で体を
支えている。だが例外がある。それが古龍種である。古龍種は翼と

前足が完全に独立している。古来より伝わる『龍』により近い形をしている。それと竜の中でも『轟竜』ティガレックスも四足歩行ができる。

今、龍王の側にいる漆黒の竜には、四本の足がある。その前足は後ろ足よりも巨大であることから、古龍種よりも『轟竜』ティガレックスのそれに似ているのが分かる。だが一同を驚愕させたのはそこではない。そのことに初めて触れたのはレギンレイヴだった。

「あ、頭が・・・三つ・・・」

そう。これが異形の真実だ。

翼の付け根から首が生え、頭に続く。これが常識だ。だが漆黒の竜は、その付け根から首が三つに枝分かれしていてそれぞれ独立し、中心の頭の両斜め下に一つずつ別の頭部が存在している。

また、頭部が地面に当たらないようにするためか、両足がとても高い。古龍種に近い姿でありながら竜である異形の生物がそこにいる。

【オドロクカ。マアムリモナイ】

「だが所詮一体の竜！この程度で『太陽の樹』を倒せると思うか！」

バリガンが叫ぶと、龍王が口を開き、そして、

「くははははははー!!」

口から声を発し、笑った。

「声までライレル様そっくりだ。どこまでもライレル様を侮辱する
!!」

レギンレイヴが高笑いした龍王を睨んだ。もっとも、現在の龍王の
姿はライレルの体だが……。

「この竜は特別なんだよ。人を、そしてモンスターを魅了する能力
を持つ。その能力は、吸収進化だ」

「吸収進化だと……?」

アイクは聞いたことがない言葉に驚いた。

「そう。この竜は対象物を喰らうことによって、その能力を吸収し、
自らの体を変化させ、進化するのだ」

「喰らう……。そうか、あの血の匂い。あれはその竜がモンスター
を喰らった時に流れた血が原因か。酷いな。所詮モンスターは生
け贄かよ」

「今となつてはどつでもいいことだ。今はこの竜に興味があるだけだ。そして我は新しい名をつけた。この進化する竜の名前は、イリデセントソル」

「イリデセントソル……『虹色の太陽』か。全身漆黒なのに虹とはよく言つぜ」

「戦えば解るさ……」

龍王が言った時、

ガチャン

と音がすると、後方の巨大な門が開いた。龍王は門をくぐり、消えた。

「龍王……ここで決着をつける!!!」

ラシューは門に向かって駆け出した。

ガアアアアウ!!!

イリデセントソルは三つの頭から同時に咆哮した。だがラシューは目もくれず走っていた。

イリデセントソルは中心の頭から

ガアアアアウ！！

と、火球を放った。凄まじい勢いでラシューに迫る。

バアアアアン！！！！

刹那、カナハルとバリガンが互いに巨大な盾で火球をガードし、ラシューを守った。

「ラシュー！！頼んだぞ！！！！」

「ここは我らで食い止める！！お主は龍王のみに集中しろ！！」

それぞれの思いを受け取ったラシューはひたすら走り、そして門をくぐった。

ドオオオオオン！！

ラシューが見えなくなった時、門が意図的に閉じた。おそらく龍王が操っているのだろう。

イリデセントソルは火球を防いだ両者を睨んでいたためか、はたまた龍王の命令のためか、門をくぐる時にラシューに何もなかった。

彼の目的はただ一つ。この12人のハンターを無に帰すことだ。

グオオオオウ!!!

イリデセントソルの咆哮を聞いた12人のハンターは一斉に武器を構えた。

「さて、怪物退治といくか!!!!!!」

ローランが叫んだ。12人のハンター対、一体の進化する竜、イリデセントソル。未知なる戦いが始まるうとしていた。

「さて龍王!!!」

ラシユーはひたすら龍王の後を追った。

門の先には先ほどと同じような光景が広がっていた。見渡す限り広がるのは何もない広場のようだ。

【コノアタリデヨカロウ。サア、ハジメヨウカ】

「その前に聞きたいことがある。お前は親父じゃないんだな？」

【ククク・・・グモンダナ。コノカラダノヌシハシンドワ】

「そうか・・・」

ラシューは腰に手をやり、そして刀身のない太刀を取り出した。

「だったら遠慮なくてめえを斬れる!!」

【ホウ、フシギナカタナダナ。ムロン、ワレモ、ケンヲツカウガナ】

『太陽の樹』のメンバーとカナハル、ハルカ、ギイ。この12人のハンターに対するイリデセントソル。そして龍王に挑むラッシュー。この戦いが終わる時すなわち、この戦争に終止符をうつことになる。今、最終決戦が始まるうとしていた・・・。

第四十五話（後書き）

ついに最終決戦のところまで来ました!!。

ちなみに、イリデセントソルのイリデセントは、*iridescent*（虹色の、玉虫色の、真珠光沢の、という意味の英語）と書き、正しい発音はイリデセントなのですが、ここではあえて読みやすいイリデセントとつけました。

これからもラストパートで書きたいと思います。 m) (m

第四十六話（前書き）

学校の期末試験とバイトで時間がとれなくなってしまったので、約一ヶ月ぶりの更新です。

完結が近いんで、頑張っていきますm（）（）m

第四十六話

結界内で始まる、この戦争に終止符をうつ戦い。

ラシユーの前方にいる龍王スサノオは、事前に置いたのだろう、赤い刀身の太刀を取った。

「へえ・・・意外だな。それは俺たちハンターが仕様する太刀だぜ」

【ホウ。コノタチニ、ミオボエガアルノカ？】

「ああ、そうだ。それは昔から親父が使っていた太刀、『天上天下無双刀』だ!!」

ラシユーは黒い柄にとぐるを巻いた鍔つばの太刀を持った龍王を見て叫んだ。

「龍王、何がしたいんだ!!」

ラシユーの言葉に、龍王は口を開いた。

「なあに、ちょっとした座興よ。我本体の力は出さず、この体の力のみで戦う。そしてこの太刀。分かるか？」

「・・・つまり、親父の力だけで戦うつもりか」

「くくく。その通りだ。我に挑むのなら、この体の主の力を超えないとつまらん」

龍王は言つと、刀身に手をかけた。

「さあ、お前は父親を越えられるかな？ 『鬼神化』」

瞬間、龍王の体に、否、その骸むくろと化したライレルの体に青いオーラが纏まとった。

「てめえ……どこまで親父を冒流ぼうりゅうするんだ！！」

ラシューは刀身が無い太刀の鏢たてに手をかけ、叫んだ。

「『鬼神化』！！！！」

すると2メートル程の青い刀身が現れ、そしてラシュー自身にも青いオーラが纏まとった。

(悪いミラージユ。まだ現れないでくれ。俺自身の力で親父を越えないと意味がないんだ)

「さあ、始めようか、ラシユー」

龍王は言った。その言葉は、温かく、ラシユーは思い出の中にあるライレルとの記憶にある、父親を連想させた。だがそれは、ラシユーの怒りを買うだけだった。

「ふざけんじゃねえぞ、龍王！！！！！」

ラシユーは跳びだし、龍王に、そして父親のライレルに、挑んだ。

一方、城門前の広場には、古龍に近い姿をした、頭が三つ存在する竜、イリデセントソルと『太陽の樹』のメンバー九人とカナハル、ハルカ、ギイの合計12人のハンターの戦いが、イリデセントソルの火球で始まった。

狙われたのはカナハルとバリガン。二人は同時に左に跳び、回避した。

するとイリデセントソルは四本の足で跳躍し、二人に飛び掛かった。

二人は再び左に跳んだ、その瞬間。

「なっ……!!」

真ん中の頭とは別の、左下の頭部が動き、二人のいる方向を向き、標的を見るや、口が開くと同時に口内が光った。そして。

ギユワアアアア!!

と、ビームに似た熱線が放たれた。

「ぐわ!!!!」

二人は熱線を喰らい、20メートル程吹き飛ばされた。

「あれは……『鎧竜』グラビモスの熱線!!!!」

その光景を見ていたローランが言った。

グオオオオウ!!!

イリデセントソルは咆哮した後、跳躍し、今度はアルマーズ、ハノン、ラーチエルに襲いかかった。

アルマーズとハノンは右に、そしてラーチエルは左に跳び、回避し

た。だがその後、左右2つの頭部が動き、それぞれが避けたハンターを睨み、そして口が開いた。

ギユワアアアアア!!!

左からは赤い熱線、そして右からは黄色い雷撃が放たれた。

「なにっ!!!」

「うおっ!!!」

「ぐっ!!!」

三人はそれぞれ攻撃を避けられず、吹き飛ばされた。

「なるほど。真ん中の頭部からはリオレウスの火球、左の頭部からはグラビモスの熱線、そして右の頭部からは『金獅子』ラージャンの雷撃、か」

ジャファルが呟くと、弓矢に手をかけ、構え、矢を放った。だが、

ガキイイイイン!!!

と、貫通することなく、弾かれた。

「硬さはリオレウスの比じゃないな」

その攻撃で、イリデセントソルの三つの頭は全てジャファルに向けられた。

「ふっ、甘いな」

ジャファルは言った。そう。この一瞬の隙を作ったのだ。三つの頭を前方の自分に向けることで、左右に視野を無くす。

「うおおおお！！！！」

現に右後方からレギンレイヴが尻尾に大剣を振り下ろした。

ズザアアアン！！

弾かれはしなかったが強度が高く、傷は浅い。レギンレイヴは大剣を振り上げようとした、その時。

「あっ！！！！」

レギンレイヴは恐ろしい光景を見た。

尻尾の先端の、リオレウス特有の細い針の様な棘。それが突然、半分ずつにわかれ、そして開いた。そして上部分の少し上に不気味に

光る、2つの赤い目。

レギンレイヴに向けられた、開いた尻尾の内部から、

ブシューウウウ!!!

と、圧縮された水流ブレスが放たれた。

「ぐう!!!」

レギンレイヴは咄嗟にガードしたが、水流ブレスの威力は凄まじく、勢いを殺せず、30メートル程吹き飛ばされた。

「な、何だ！何が起きた!？」

アイクは信じられない光景に仰天し、叫んだ。その声に反応し、イリデセントソルは尻尾を持ち上げた。長い尻尾はイリデセントソルの頭部近くまで届くと、再び尻尾は開いた。

「避けるアイク!!!」

ジャファルが叫ぶと、アイクは危険を察する本能がそうしたのか、咄嗟に右に跳ぶ。瞬間。

ブシューウウウ!!!

と、再び水流ブレスが放たれた。アイクは間一髪で避けた。水流ブレスは大地を抉り、爪痕を残した。

「なるほど。イリデセントソルの『虹色』の意味が分かった。やつは複数のモンスターの能力をコピーしたんだ」

「コピー!?!」

未だ攻撃を受けていないジャファルの分析に、ハルカは驚いた。

「リオレウスの体に、ティガレックスの強靱な前足。グラビモスの熱線に、ラージャンの雷撃。そして尻尾からガノトトスの水流ブレス。しかも尻尾に目がある。奴は顔を四つ持っているんだ」

「つまり、他の竜の能力をコピーし、『七色』の攻撃を可能にしたってことか。本当に、化け物ね・・・」

ジャファルの言葉に、ブルーニヤはただ呟いた。

「一斉攻撃だ!?!」

ローランが言うと、残っているブルーニヤ、アイク、ギィ、ローランはイリデセントソルに接近しようと走り、ジャファル、ハルカは遠距離攻撃を仕掛けた。

グオオオオウ!!!

イリデセントソルは近づいてくる四人のハンターを薙ぎ倒そうと、

ティガレックスに似た前右足を軸にし、その場で回転し、左足を伸ばし攻撃した。

だが四人は直ぐにイリデセントソルから離れ、攻撃を避ける。その後、イリデセントソルは体勢を整えようとして隙ができた。

「うおおおお!!!」

四人はそれぞれ攻撃を仕掛けた。だが、

ガキイイイイン!!!

と、甲殻は凄まじい硬さで、弾かれてしまう。

イリデセントソルは攻撃を無視し、体勢を低くすると、身体を小刻みに震わした。すると身体が、

バチバチ・・・

と音が鳴りだした。

「まさか!!!」

ブルーニヤが言った時、イリデセントソルの身体の回りが青白く光り、電気が走った。

「ぐわ!!!」

四人は放電によって吹き飛ばされた。

「あれはフルフルの体内放電！！接近戦も死角無しか！！！」

ジャファルが言った時、イリデセントソルの三つの頭がジャファルとハルカを見た。

「まずい、避ける！！！」

ジャファルが言い終わった時に、左右の口内から熱線と雷撃のブレスが同時に放たれた。

もともと熱線と雷撃はビームに近く、気付いた時にはもう遅い。ハルカは熱線を、ジャファルは雷撃を喰らった。

この結果、12人のハンターはイリデセントソルの攻撃を喰らったことになる。

グオオオオオウ！！！！

イリデセントソルの咆哮で、大地が震い、土煙が舞う。視界が悪くなった。しかし、数分後。

「ギャーギャーうるせえんだよ!!!!」

突然の罵声。漂っていた土煙が晴れると、イリデセントソルの20メートル前方、城門の前に12人のハンターが立っていた。

「カナハル、ハルカ、ギイ。離れている」

ローランが言うと三人は静かに離れた。この『太陽の樹』の九人は完全に血がたぎっている。そう判断しての行動だった。

「さあて、イリデセントソルよ。その強さに敬意を表して、ここからは本気で戦わせてもらう」

ローランが言った。全てのハンターはブレスによって怪我を負っているが、逆にそれが彼らの純粋な闘争心に火をつけたのだろう。

「彼らは『太陽の樹』のメンバー。そこには確かな絆がある。私たちが入ることの出来ない、長年培った絆が・・・」

ハルカは呟いた。そしてその『太陽の樹』のメンバーはそれぞれの武器に手を乗せ、

「『鬼人化』!!!!!!」

と、九人のハンターが同時に叫んだ。
今、『太陽の樹』が獲物を狩る獅子になった……。

ガキイイイン!!!

「ぐわ!!!」

『鬼神化』を纏ったラシユーは吹き飛ばされた。同じく『鬼神化』を纏った自らの父によって。

「く……さすがに親父の力はすげえな。まるで敵わねえ」

ラシユーはよろめきながら立ち上がった。その前方には、ライレルの衣を纏った龍王が立っていた。

「どうした。お前の力はそんなものか？」

龍王が、否、ライレルが言った。二人は数十回にわたって剣戟を交わしたが、全てラシユーが根負けし、今のように吹き飛ばされては立ち上がり、また再び挑みの繰り返しだ。

「はあ、はあ……。まるで勝てる気がしないな」

ラシユーは呟いた。だが内心は違った。

(まだ現すなよミミラージュ。俺の力だけで親父に勝たないといけな
いんだ。それに、『仕込み』はもうすぐ完成する)

内なる気持ちを持ちながら、ラシユーは再度ライレルに挑んだ。

ガキイイイン!!!

「うおおおお!!!」

つばぜり合いになり、ラシユーは力を込める。

「『鬼神化』の力が落ちていぞ。所詮は、まだ未完成か・・・」

「それがどうしたよ。あんたを倒せばいいだけのことだ!!!」

「愚かな・・・」

龍王の本音が出た。自身の力を使わなくても、この投げ所の力ツクリカだけで倒せる。そう思い、力を込めた、その時。

「むっ!!!」

龍王が言葉を発した。なぜなら、自身に纏う『鬼神化』のオーラが
突然、消えたからだ。

「今だ!!!」

ラッシューは『鬼神化』のオーラを太刀に集中させた。

バキイイイイン!!!!

ライレルの体が持っていた、オーラを失った『天上天下無双刀』が、オーラを纏ったラッシューの太刀、『神剣カムド』によって折れた。そして。

バシヤアアアア!!!!

と、一閃。ライレルの体を肩から膝まで切り裂いた。

「ぐお……」

切られたところは骨の側まで達し、かろうじて切り落とすことはなかった。

「貴様……何をした……?」

「あなたは気付いてないだろう?俺の『鬼神化』のオーラをあなたの身体に仕込ませていたんだ」

「なに……?まさか、あの数十回にわたる剣戟は……」

「ああ。何十回にも分けて微量のオーラを仕込ませ続けた。『鬼神化』は本人以外には猛毒。特に一定量仕込まされた相手が『鬼神化』を取得していたら、数秒だが『鬼神化』が解除される。まあ、相手に『鬼神化』を送り続けられないといけないから、俺の体はぼろぼろだ

し、『鬼神化』のオーラも少なくなるがな。だが、このフィールドのおかげで助かった」

「なんだと？このフィールドはモンスターの潜在能力を発揮するところだ。貴様に有利に働くことはない」

ライレルの体は両膝をつき、ラッシューを見上げていた。

「この『鬼神化』は人間を超越した力だ。そう言うんだったら、この力を持った俺は、もう人間じゃなく、モンスターなのかもな」

「何が言いたい……」

「あんと戦つてから、俺は確信した。この中では『鬼神化』の発動時間は無限だと……。まあ、オーラは有限らしいがな」

「ふっ、なるほど。だが貴様はこの身体を、自分の父親を手にかけてのたぞ？親不幸者だな」

「違う。むしろ、龍王に乗っ取られている親父をそのままにするこ
とが、俺には耐えられなかった。俺の手によって親父を自由にさせる。それが俺が親父にしてやれる、最後の親孝行だ」

ラッシューは笑った。自分の目的を果たしたその顔は、汚れなき微笑みだった。

「くっくっく。では次に、お前に絶望を与え、親子共々地獄に送ってやるわー!」

するとライレルの体が突然、宙に浮いた。その回りには不気味なオーラが漂っていた。

【ミセヨウ。ワレノ、シンノスガタヲ】

瞬間、ライレルの身体から閃光がほとばしった。ラシユーは咄嗟に目を閉じた。

絶望が、ラシユーに襲いかかる・・・。

第四十七話

「く……」

辺りに走る閃光が弱まった時、ラシユーは恐る恐る目を開いた。

前方には、光りに包まれている、異形の生物が宙に浮いていた。

【ワレ、スサノオ】

不気味な声が響く。光りが無くなると、その全体像が解ってきた。

「へえ……意外だな。てつきり龍の姿をしてるもんだと思つたぜ」

ラシユーは言った。まさにそうだ。龍王スサノオの身体は、少なくとも龍ではなかった。

その姿は、人のようだった。見るからに屈強そうな顔に、右目が赤く、左目が青い、オッドアイが特徴的だ。髪はハンターの間で言う黒髪のテオストレートに近い。しかし、決定的に違うところがある。

全身が、黒い龍の鱗に覆われている。その鱗がハンターで言う防具となっているのだろう。さらに背中から、漆黒の翼が生えている。その姿を、あえて言うなら、尻尾の無いミラボレアスを小さくした様な姿だ。

【ククク……。ワレハ、ヒトデモ、リュウデモナイ、ワレハ、カミダ】

龍王が不気味に笑った。そして、地上に降りた。すぐ側にはライレルの亡骸がある。龍王は、数メートル右に歩いた。

と、その時。

“ほざくな、スサノオ”

【ム・・・ダレダ！】

「ミラージュ、お前の声か？」

【ミラージュ？ナンダ、ソレハ・・・】

“今、転生しよう”

声が聞こえた時、ラシユーの太刀の、『鬼神化』のオーラによって具現化した刀身が青色から白色に変化すると、

ギウイイイイン！！！！

と、音が響くと、ラシユーの太刀から白い物体が飛び出した。その物体は、地に横たわるライレルの体に降り注ぎ、そして消えた。その数秒後。

“まだ動かせるな。安心した”

ライレルの体が突然動きだし、そして立ち上がった。

「お、親父、なのか？」

“違う。私はライレルの体に移った、ミラージユだ”

「そ、そうか・・・」

【ミラージユトハ、ナニモノダ？】

“龍王よ、いい加減、その片言の話し方は止める。仙界ではそれで通じるが、この世界では通じづらい”

【マテ、キサマナゼ、センカイヲシツテイル！？】

「な、何のこと言ってるんだ、ミラージユ？仙界って・・・」

ラシユーは言ってることが何一つ解らず、戸惑いながら言った。

“ちゃんと話せと言っている。『仙龍族』の一人、素戔鳴すさのおよ”

「仙龍族？」

ラシユーが言うと、龍王は静かに目を閉じた。

“・・・貴様、本当にこの世の者か？”

「んー？今まで読み取るのが難しかったけど、今のははっきりわか

「ったぞー!」

“ やつは今まで仙界流の話し方をしていた。それでは我らにはわかりづらい。言葉は臨機応変に話さないとな”

「でもミラージュ。あんた一体、何者なんだ？」

“ ふっ、そうだな。私はこの霧状の身体になり、ミラージュとなる前は、こう呼ばれていた。『かみなほび神直毘』とな”

その瞬間、龍王の目がかつと開いた。

“ カミナホビ、だと!? 貴様は死んだはずだ!!!”

「えっ!?! どういうこと?」

ラシユーは龍王とライレルの体に入ったミラージュを交互に見た。

“ 簡単に言つとな、ラシユー。私は元・仙龍族の一員だった、ということだ”

「元つて・・・今は違うのか?」

“ ああ、そうだ。今はミラージュとなった”

“ カミナホビ。貴様は仙界から突如として姿を消した。我は貴様は下界に降りて死んだと思っていた。下界は我らには空気そのものが猛毒だからな”

“その考えは半分当たっている。確かに私は下界、つまりラシユーたちがこの世界に来る前の世界に興味があった。私は、それが禁忌と知りながら下界に降り立った。そこで私はその世界の毒にやられ、もがき苦しんだ。禁忌を犯した私は仙龍族に嫌われ、仙界に戻ることもできなかつた。だが死期を悟つたその時、古の人々に出会つた。その者たちの手によつて、私は助かつた。自らの身体を犠牲にし、ミラージユとなつてな”

「それである遺跡にずっといた訳か・・・」

“ふつ。さてスサノオ、一つ聞きたい。なぜ人間とモンスターを争わせた？それは仙龍族の掟を根本から破壊する行為だぞ”

ライレルに乗り移つたミラージユが言つた。

“簡単なことさ。我は戦いが好きなんだよ。我は、その火種を起こしたにすぎん”

「なつ！！そんな単純な理由で、戦争を起こしたと言つのか！？」

“くつくつく。強大な戦闘力を持つた我が輝ける場所が、血塗られた戦場なのだ。戦争が起こらないなら、自ら起こせばいいまでのこと。この戦争は大いに我を満足させた。それが今、終焉を迎える。

貴様らの敗北でな。いでよ、我が愛刀、あまのむすくも「天叢雲」！！”

龍王が右手を前方に突きだし、叫んだ。すると、

キィィィィン

と高音が鳴ると、龍王の右手に剣が現れた。その形状は、一見する

と太刀に近い。刀身は白く、長さは1メートル程あり、それ以外の部分は全て黒い、シンプルな構造だ。

“ 気をつけるラシュー。あの剣はお前の持つ太刀と同様、神剣だ。剣同士では互角。あとはラシュー自身の力にかかっている。私も微力ながら手助けする。『鬼神化』!!!”

ミラージユは側におちていた『天上天下無双刀』を拾い、叫ぶと、太刀とライレルの身体の全身に青いオーラが纏った。

「へへ、ありがとな。さあて、ここからが本番だな。鬼神化全快!!!」

ラシューは言うど、再び青いオーラが勢いを増した。

“ 無駄な足掻きだ。束になるうが我には敵わんよ。本気になった我にはな!!!”

龍王は言うど、全身にどす黒いオーラが纏った。

「今までとは桁違いか！楽しみだぜ!!!行くぜ龍王スサノオ!!!」

“ その大罪、死をもって償え、スサノオ!!!”

ラシューとライレルの身体に乗り移ったミラージユ。対するはこの戦いの元凶、龍王スサノオ。

最後の戦いが始まるうとしていた・・・。

グオオオオウ!!!

イリデセントソルの咆哮が響く。その前方には、赤いオーラを纏った九人のハンターが立っていた。

「さて。問題は奴に弱点が無いことだな。まさに無敵」

「ほごくなローラン。この世に無敵な奴は存在しない。生物には必ず弱点がある」

「ジャファルの言う通りだな。まずは弱点を見つけることから始めるか。では、戦闘開始!!!」

ローランが言い終わると、九人はばらけ、すぐにイリデセントソルを囲んだ。

ガアアアアウ!!!

イリデセントソルは正面に火球を放った。狙われたのはジャファルだ。しかし横に跳び、回避した。

イリデセントソルは続いて別の頭を左右に向かせ、右にグラビモスの熱線を、左にラージャンの雷撃を、更に尻尾からガノトトスの水

流ブレスを放った。

しかし歴戦のハンターたちはこの攻撃を瞬時に避けると、それぞれがイリデセントソルに攻撃を加えた。

グウウウ・・・

と唸り声をあげる。しばらくしてイリデセントソルは強靱な前足で跳躍し、数十メートル後方に跳んだ。そして着地した直後、尻尾を三つの顔近くまで持ち上げると、四つの頭で一斉にブレスを放った。

この攻撃は尻尾からの水流ブレスが横に薙ぎ払う形となり、九人のハンターはブレスの餌食になり、吹き飛ばされた。

「すごい。見れば見るほど、弱点なんてない様に見える・・・」

その光景を見たハルカが呟いた。イリデセントソルは残ったハンター、カナハル、ハルカ、ギイの方を向いた。

「それで倒したつもりかよ！！！！」

直後、怒号が響いた。イリデセントソルは咄嗟に、聞こえた方向を向いた。すると、九人のハンターが悠然と立っていた。

「どうしたジャファル？考え事か？」

ローランが言った。顔には血が流れている。

「ああ・・・すまないが、俺一人で戦わせてくれ」

「何か閃いたのか？」

「まだ確信は持てないがな。だが俺が思っていることが正しければ、奴の決定的な弱点を見つけたことになる」

「そうか、流石は『黒衣の暗殺者』。暗殺者は弱点を見つけるのに長けているみたいだな。なら他のハンターは下がるう。ジャファルよ、頼んだぞ」

ローランが言うと、他のハンターと共に下がった。

イリデセントソルの三つの頭部の視線がジャファルを向いた。

「さあ、いくぞ」

ジャファルはイリデセントソルに正面から突っ込んだ。イリデセントソルは真ん中の頭部から火球を放った。

ジャファルは『鬼人化』のオーラを両足に集めると、超人的な速度で右に跳び、回避し、イリデセントソルの右側に来た時。

ガアアアアウ！！！！

と、熱線が放たれた。ジャファルはこれを回避し、後ろ側にまわった。すかさずイリデセントソルは、

ブシューウウ！！！！

と、尻尾から水流ブレスが放たれた。ジャファルは物凄いスピードで跳躍して避ける。しかし尻尾を巧みに動かし、追撃してくる。ジ

ヤファルはなんとか避け、左側に来ると、

ギィアアアア！！！！！

と、左側の頭部から雷撃が放たれた。しかし頭は横に動かず、避けられると直ぐに雷撃を止めた。

「なんだよ、一周しただけじゃないか」

アルマーズが呟いた。

「ふっ、見つけたぞ！。奴の弱点を！！」

「えっ！！あのやりとりでかよ！！」

ジャファルの声に、アルマーズは耳を疑った。

「さすがジャファルだな。こういう時にこそ役にたつ。『太陽の樹』に必要な男だ」

後方でバリガンが言った。

「さあいくぞ、イリデセントソル。貴様に刻もう。死へのカウントダウンを」

ジャファルは言うど、イリデセントソルに正面から突っ込んだ。

ガァアアアウ！！！！

イリデセントソルは三つの頭から火球を、熱線を、そして雷撃を放

った。

「ふっ！！！！」

ジャファルは『鬼人化』のオーラを両足に集結し、一気に力を爆発させ、跳躍した。

ガアアアアア？

イリデセントソルは視界から姿が消えたことに驚いた。

ジャファルは上に跳んでいた。そして、イリデセントソルの翼と翼の付け根の間に着地した。そして素早く弓を構え、一本の弓矢を手に取り、力を振り絞った一撃を放った。

グガアアアア！！！！

『鬼人化』を纏った弓矢は真ん中の頭部を貫通した。激痛に襲われたイリデセントソルは悲鳴にも似た声を上げた。ジャファルは続けて弓矢を頭部目掛けて放つ。

たまらずイリデセントソルは尻尾を持ち上げ、尻尾に付いている二つの目でジャファルに照準を合わせ、

ブシューウウウ！！！！

と、水流ブレスを放った。だが、これがジャファルの待っていた攻撃だった。

ジャファルは跳躍し、回避する。すると、

ゲガアアアアア！

と、イリデセントソルの声が聞こえた。なぜなら……。

「じ、自滅かよ……」

アルマーズの言う通りだった。イリデセントソルは自らが放った水流プレスで自分の身体を貫いたのだ。

グウウウウウ……

イリデセントソルは激痛に悶えていた。その間にジャファルは皆が
いる所まで戻った。

「やつは頭が四つ存在する。これは長所でもあり、短所でもある」

「どついうことなんだ、ジャファル？」

「頭部が四つ、これを別々にコントロールすることは容易ではない。
個々に命令していることから、思考回路も、決断力も、行動力も四
等分されることになる。プレス等の単調な攻撃は直ぐに出来るよう
だが、攻撃を受けた時の対処が襲い。思考が追いつかないからだ」

「なるほど。つまり奴は、攻撃を一番受ける、接近戦に弱い」

「そうだ。しかも前方の三つの頭は少ししか動かせず、尻尾は大き
く動かせる。このばらつきがさっきの様な自滅を生む。尻尾からの
プレスは、上手く誘導すれば奴自身を貫ぬかせることも可能だ」

「接近すると奴はティガレックスの回転攻撃とフルフルの体内放電と尻尾からのガノトトスの水流プレスに注意すればいいな」

ジャファルとローランのやりとりが終わると、九人のハンターは一斉に武器を構えた。

「俺は奴の前方に立ち、注意を引き付ける。他はなるべく後か横から攻撃するんだ」

ジャファルが言った時、イリデセントソルがようやく正気に戻り、九人のハンターを睨んだ。

「さあ、いくぞー!!」

バリガンが叫ぶと、一斉にイリデセントソルに向かって走った。その様子を見ていたカナハルは言った。

「俺たちの入る幕は無いな。俺たちは城門の破壊をするぞー!!」

「そうですね。もう私たちの救援はいらなと思いますから」

「結局俺たちは何しにきたんだか・・・」

「愚痴は言うなよ、ギィ。さっさと城門を破壊して、ラシユーを助けるぞ」

「まあ、それしかすることないか。『鬼人化』ならこんな城門の破壊は楽勝だろ」

「じゃあ、いくぞー!!」

カナハルのかけ声でハルカ、ギイは武器を構えた・・・

その頃、城門の奥では死闘が始まっていた。

ガキイイイイイン！

スサノオの持つ神剣とラシユーの持つ神剣がぶつかった。

ガリガリ・・・

と、刃から音が鳴り、つばぜり合いとなった。

“貴様の力はそんなものか？”

スサノオは言うど、一気に力を込めた。刹那、

「ぐわっ！！！」

ラシユーの体は、その圧倒的な力の衝撃で、数十メートルは吹き飛ばされた。

その瞬間、ライレルの身体に憑依したミラージュは龍王の背後から太刀を振りかざした。

“くだらぬ”

龍王は振り向き様に回し蹴りまきをした。

「ぐっ!!!」

思わず口から言葉がもれた。ライレルの体は数十メートル吹き飛ばされた。

“つまらんな。所詮我には敵わんか”

龍王は言った。ミラージュは起き上がるとラシューの側に来た。

「くそ・・・力が違い過ぎる」

“さすが龍王。未だ仙龍族の力は衰えていないか。しかも私の持っている太刀は神剣ではないからな。奴とつばぜり合いでもしたら簡単に折れてしまうだろうな”

「じゃあ、どうするんだよ!?!」

“今のところ、突破口は無い。だが繰り返し闘えば糸口は見つかる。いいかラシュー。何度もやられても決して挫けず、何度も攻撃しろ。これしか方法はない”

「けっこう原始的だな。だけど、それしか無いな。奴は俺たちを甘く見ている。奴が油断した時が勝負だな」

“そろそろいいかな?せいぜい我を楽しませろよ”

「言われなくてもな!!!」

こうしてラシユーとミラージュは再びスサノオに挑んだ。

だが結果は全て同じだ。両方とも吹き飛ばされるだけだった。しかしラシユーとミラージュは何度も攻撃を加えた。

こうして剣を打ち合うこと数十回。

「はあ、はあ、はあ・・・」

“もう限界か？諦めろ、人間は仙龍たる我には勝てぬ”

「誰が諦めるもんか！！！」

ラシユーは再びスサノオに挑んだ。ラシユーは神剣を降り下ろした。スサノオは何を思ったのか、持っている神剣でガードしなかった。ラシユーの持つ神剣はスサノオの左肩に当たった。

ガキイイイイイン！

だが切り裂くことが出来ないどころか、傷一つ付いていない。

「嘘だろ！？」

スサノオはおもむろに左肩に当たっているラシユーの持つ神剣の刀身を左手で掴んだ。

“お前の弱りきった力では我は斬れんよ。終わりだ”

スサノオは右手に持つ神剣『天叢雲』をラシユーに向かって振りか

ざした。瞬間。

キイイイイイン！！

と、何かによって阻まれた。

“ぐっぐっぐー！！！”

封じたのはミラージュだった。持っている『天上天下無双刀』でつばぜり合いをし、ラシユーを救った。

「ミラージュ！！！」

“無駄だ。太刀が折れるぞ。その時、まとめて斬ってくれる！！”

“くっ！！剣が、折れる！！！”

すでに『天上天下無双刀』にはひびが入っている。ラシユーは力を込めるが、龍王の体は刃の侵入を固く拒み続ける。

“さらばだ、ラシユー、ミラー”

龍王が言いかけた、その時。

ドゴオオオオオオン！！！！

と爆音が響いた。

“何だ？”

龍王は音の鳴った方向である後ろを向いた。

「!!!!。今だ!!!!」

ラシユーは叫ぶと力を振り絞った渾身の一撃を龍王の左肩に加えた。

ブシャアアアアア!!!!

龍王が目を離し、力を緩めた、一瞬だった。ラシユーの神剣はスサノオの左肩に食い込み、そして一閃、左肩を切り離した。

「ぐわああああ!!!!」

龍王の口から絶叫が放たれる。

ポトツ

と、切り離された左肩と左腕は地面に落ちた。

“貴様あああ!!!!!!私の左腕を!!!!”

傷口から大量のどす黒い血液が吹き出している。ライレルの体に入ったミラージユはよろめきながらその場を離れた。もはや体力の限界だろう。

「ラシユー!!!!」

その声に反応してラシユーはようやく爆音の鳴り響いたところを見た。

あの頑丈だった城門が見るも無惨に破壊されていた。1メートルはある厚みの城門はそこには無い、ただの巨大な石が散らばっていた。

「カナハル？」

崩れた瓦礫の山から現れた男を見てラシユーは言った。

「間に合ったか・・・無事だな」

カナハルは言った。その後方から続々とハンターが現れ、ラシユーに向かって歩いていった。

「みんな・・・。イリデセントソルはどうした？」

「ふっ。あいつなら逃げたよ」

“に、逃げた、だと!?”

苦悶の表情を浮かべるスサノオが言った。

12人のハンターはラシユーの近くに来て、その中からローランが言った。

「俺たち『太陽の樹』がイリデセントソルの相手をして、ジャファルが奴の弱点を見つけて、波状攻撃を加え続けたら、さっさと逃げちまった。やっぱり一番大事なものは龍王への忠誠じゃなくて自分の身の安全だった、ってことだ」

“ぐっ!!なんとということだ!!!”

イリデセントソルの裏切りに龍王は驚きの声をあげた。ラシューはそんな龍王のいる方を向いた。

「これであんたは本当に一人になった。左腕を切り落とされたあんたに勝ち目は無い」

“勝ち目は無い？ほざくな！！人間の貴様が我に勝つなどありえないこと！！！右腕一本でも我は貴様ら弱者に負けぬ！！！！”

スサノオは神剣を握り、立ち上がった。

「ラシュー。俺たちの『鬼人化』の力、受けとれ」

「カナハル？そんなことしても意味は・・・」

「たとえ力にならなくても、『鬼人化』の力を通じて解るはずだよ。俺たちの『絆』を、受けとれ」

ラシューは『鬼神化』のオーラを『神剣カムド』に集結させ、刀身を数メートル伸ばした。

「受けとれ、そして勝て」

カナハルは言うど、刀身に手を当て、『鬼人化』のオーラを移した。同様に、ハルカ、ギイ、そして『太陽の樹』のメンバーはオーラを移した。

「さあ、決着をつけるぞ、龍王」

『鬼人化』の力を受け取ったラシューは刀身を戻し、一般的な太刀

の大きさにし、龍王を睨んだ。

“いきがるな！！！！たかが人間ふぜいがああ！！！！！”

龍王は言つとラシユーに向かって走り出した。

「うおおおお！！！！！」

龍王は右手に握った神剣を降り下ろした。ラシユーも同様に降り下ろした。

ガキイイイイイン

つばぜり合いとなり、両者はそれぞれ相手を睨んだ。

「確かにあなたはめっちゃ強い。だけどあなたは一人だ！！！」

“絆の力など我が打ち砕いてくれる！！！”

「させるかよ！！！！人間は絆を持てば持つほど強くなる！！！！一人は弱くても、仲間がいるから成長できるんだ！！！！」

ラシユーが叫んだ、その時。

ピキッ！！！！！！

“ば、ばかな！！我が神剣が！！！”

龍王の持つ神剣『天叢雲』の根元に近い部分にひびが入った。

「これが『絆』の力だああああ！！！！」

ラシユーは最後の力を振り絞った。

バキィィン！！！！

龍王の神剣は折れた。瞬間、ラシユーは龍王の身体を右肩と首の付け根から縦に一閃。切り裂かれた身体は二つに分かれた。

「ぐわああああ！！！！！！」

龍王の絶叫。それは戦争の終幕。今、最後の戦いが、終わった・・・

第四十七話（後書き）

やっと最後の戦いが終わりました。やっぱりオリジナルモンスターは作るもんじゃありませんね。表現に苦労した結果が、こんな雑な文章になってしまいました。次回で、ついに最終話です!!!長かった……

最終話

龍王と名乗った仙龍族の一員、素戔鳴すさのお。その身体はラシユーによって二つに別れ、地に落ちた。

「はあ、はあ・・・終わった」

ラシユーは肩で息をしながらも、安堵の表情を出していた。

「やったな、ラシユー。これで、全てが終わった。元の世界に帰れるぞ」

カナハルがラシユーのもとに向かった。他のハンターたちもラシユーの近くに駆け寄った。

「そうだ。大丈夫か、ミラージユ？」

ラシユーは倒れているライレルのもとに駆け寄った。

“ ああ、なんとかな。こうして生きている ”

「ライレル様が、しゃべっている!？」

ローランが驚きの表情をうかべた。

「ああ、そうだった。あなたたちは知らなかったな。俺が説明するよ」

ラシユーは、ミラージユのこと、ライレルの身体への憑依のこと、

そして仙龍族のこと等、全てを話した。

「こいつはたまげたな。仙界ってもんが存在したとは……」

説明を聞いたアルマーズが言った。と、その時。

“くっくっく……”

不気味な声が聞こえた。声の主はスサノオだった。全てのハンターが龍王を見た。

「こいつ、まだ生きて……」

“人間とは恐ろしいな。仲間や絆で力を増すなど考えられないが、その片鱗は見えた気がするな”

「スサノオ……あなた、満足か？ 思惑通り戦争を起こし、戦場で死ぬ。それがあなたの望みだろうか？」

“哀れと思うか、ラシュー？ だがお前も分かる日が来る。お前は今や人知を超えた存在だ。強すぎる力を持った者が行き着く先、それは戦争を起こす元凶”

「確かに、こんな力なんて、ない方が良いのかもな。俺は力に溺れる愚者になるかもしれない。だけど、あなたみたいに戦争を起こすことはしない」

“ふっ、なるほど。見物だな。その力をどう使うのか、楽しみだ。貴様、フルネームを教えよ”

「ラッシュー・クルトイオン」

“そうか。その名、覚えておこう。ラッシュー・クルトイオンよ、地獄で待っている。いずれ、また会おう……”

スサノオがそう言った時、二つに別れた自分の身体が砂になりだした。

サアアアア……

と音を出し、やがて完全に砂になり、スサノオは消えた。

「スサノオ……悪いが地獄には行かないよ」

ラッシューが言った時、この決戦場を包んでいた結界が一瞬にして消えた。

だが……

「なんで元の世界に戻らないんだ！？スサノオは倒したのに！！」

肝心のことが行われていないことにラッシューは驚いた。

“やっぱりか……”

「ミラージュ？原因が分かるのか？」

“おそらく、この世界は仙龍族の力によって生まれた世界。元の世界に戻るには、仙龍族の力が完全に無くならないといけないのだから”

「それって、まさか・・・」

“ああ。スサノオとつばぜり合いになった時、私に残る僅かな仙龍族の力を発動させた。今、私は神直毘。『神直毘』と言う仙龍族の一員も消えなくてはいけないのだろう”

「そんな・・・他に方法はないのか!!」

“これしかないのだ。皆、私から離れ、ヤマツカミがいる所に向かってくれ。ラシユーと二人で話がしたい”

ミラージユが言うと、ラシユー以外のハンターは静かに離れていった。その場を察するように。

「なんで、こんなことに・・・。あんたは俺たちのために尽力してくれたのに」

ラシユーはそう言うと、二つの瞳から涙が溢れだした。ラシユーは手で涙を拭いた。

“いいかラシユー。『鬼神化』を手にしたライレルは、その力を平和のために使おうと、旅をした。どの町も拠点にすることのない、ただ強力なモンスターを討伐するだけの、途方もない旅をした。お前は、どうしたい?”

「決まっている。俺は『鬼神化』を手にする前から覚悟してるよ。この力を手にした瞬間、人じゃなくなると・・・。俺は、旅をするよ。親父の見たかったものは何なのか。親父の歩んだ道を、今度は俺が歩む。世界を見る、途方もない旅をする」

「わかった。その力を善に使うか悪に使うか、それはお前自身が決めることだ。世界はお前のすることで動き出す。未来を切り開け、ラシユー・クルトイオン”

「うん・・・一つ聞いていいか？。元の世界で、何で親父はヤマツカミやあんと話せたんだ？」

“・・・それは私からは話せぬ。ライレルは、その答えを一つの本に書いた。旅の終着点に、その本はある”

「なんか、曖昧だな」

“そう言うな。さて、もう行け。皆が待っている。十分後、私はライレルと共に消える。お前たちは元の世界に戻るはずだ”

「わかった。そのかわり、親父をちゃんと天国に送ってくれよ」

“ふつ。ならライレルに伝えていこうかな。息子は世界を救った英雄になった、とな”

「そりゃ嬉しいね。俺の武勇伝、ちゃんと話せよ。じゃあな、ミラージユ、親父」

“ああ。ヤマツカミによく言っといってくれ”

ラシユーはミラージユの言葉を聞き、頷くとその場を離れた。そして完全に見えなくなった頃、ミラージユは思った。

（さて、ラシユーよ。ライレルの残した本を見た時、運命はラシユ

ーに委ねられる。お前はその時、どうするか・・・高見で見物させてもらうよ。ライレルと共に)

“別れはすんだか、ラシユー?”

戻ってきたラシユーにヤマツカミが聞いた。

「まあな。ミラージュは、あんたに感謝してる、ってよ」

“我もやつに感謝しておる。さて皆の衆、よくやった。だが多くのハンターが死んだ。お前たちは元の世界で新風を起こす若きハンターを育成せねばならない。戦力補強のために尽力するんだ”

「モンスターのあんたが言うことかよ」

ローランがもつともな一言を言うと、皆笑った。

“そうだな。我は再び旅をする。賢者たる我は全てを知らねばならぬ。旅は途中。一度止まった歯車は再び動き出す。来た道を戻り、街に着いた時、お前たちの新たな一日が始まる。では、さらばだ”

ヤマツカミは言い残すと、高く飛び、何処かへ行ってしまった。

“では我も行くでしょう。元の世界でも人間とモンスターは争い続ける。それは運命であり、また互いに成長する絶好の機会でもある。

ハンター諸君、短い間だったが、共に戦えたこと、誇りに思う”

ラオシャンロンは言うど巨体を動かし、旅立った。ハンターたちは暫くの間動かず、待っていた。その時を……。

ゴゴゴゴゴゴ……

地響きがなつた。

「いよいよか……」

ラシューが呟いた時、辺りは光に包まれた。ラシューは、否、生き残った全てのハンターとモンスターは目を閉じた……。

全てのハンターたち、そして全てのモンスターは目を開いた。

各々が見る光景は違つた。されど同じことを思つた。

さつきまでいた感覚と違つた。元の世界に戻つた、と……

「やっと、だな。懐かしい気分だぜ」

ラシューたちに広がる青空、白い雲。妖気など微塵も感じない、元の世界。

「さあ、戻ろつ。我らの街、ドンドルマに。戻つたその夜は慌ただしつぞ」

バリガンが言った。一同は竜車に乗り、もう存在しない戦場を後にした。

竜車に揺られること三日。ついにドンドルマに到着した。着いたのが昼間だったこともあり、街は歓喜の声がひっきりなしにあがり、すっかりお祭り騒ぎだ。その後、大長老の挨拶があった。この戦争に終止符を打った13人の英雄たちを讃え、街や村の再建に努めてくれとの内容だった。

その夜。酒場は大いに賑わった。英雄と讃えられたラシューたちも、いちハンターとして楽しんだ。

一週間後。ドンドルマのとある部屋。

「これで準備完了！。さあて、行くとするか」

部屋にいたのはラシュー。重い荷物を持ち、外に出た。そこで待っていたアペケロスに荷物を乗せ、手綱を引き、ドンドルマの街を歩いた。

そして街の出口に差し掛かった、その時。

「一人で何も言わずに旅立つ、か？お前が考えてることくらい分かるぜ、ラシュー」

横から一人の男が現れた。

「なんだよカナハル。止めに来たのか？」

「違いますよ。見送りに来ただけですよ」

「たく、水くさいぜ、ラシユーさん。一緒に戦ってきたのに、それやないぜ？」

逆方向から男女一人ずつ現れた。

「ハルカにギイまでかよ。まあ、嬉しいけどな」

「一つニユースだ。お前が倒したミラルーツの素材を使った防具が出来たらしいぜ。大老殿で展示される予定だつて。その側には『神剣カムド』がある。本当に渡してよかったのか、ラシユー？」

「いいんだ。あの剣は二度と使わない。『鬼神化』も発動しない。今はこの、『天上天下無双刀』がある。親父の魂が入っているこの刀と一緒に旅すれば、親父も満足すると思つてな。そういえば、これからお前たちどうするんだ？」

「私はポツケ村に帰ります。村の再建をしないといけませんし」

ハルカが言った。

「俺もココット村に戻る。理由は一緒だぜ」

ギイが言った。

「俺はドンドルマで新人ハンターを指導する。ちょっとでも有能なハンターを増やさないといけないから」

カナハルが言った。

「それぞれ別々になるんだな。でも絆は常に繋がっている。じゃあ、このパーティー、解散する！じゃあな！！」

「ああ！！またな！！」

ラシユー、カナハル、ハルカ、ギイ。永遠の絆で結ばれている英雄たちは、それぞれの道を歩む。ラシユーは旅に、カナハルはドンドルマに、ハルカはポツケ村に、ギイはココット村に。

(ラシユーめ、ハルカさんに気持ちを伝えることしなかったな。あいつのことだ、今の自分はふさわしくないとでも思ったんだろうな。まあ時間はいくらでもある。旅が終わったら楽しみだな)

カナハルは密かに思った。

一方、ラシユーはドンドルマを出て十分後。

(さあて、長い旅が始まったな。気ままに行くか)

この広がる無限の大地のどこかにある『答え』を見つける旅が始まった。ラシユーは青空を見た。

その様子を見つめる、大空を飛ぶ一羽の鳥。それは世にも珍しい、金色の鸚鵡。彼は思いました。

これは終わりではなく、始まりだ。今、一つの物語が終わり、そして今、新たな物語が始まった、と・・・。

最終話（後書き）

ラストに作者登場！。という訳で、約一年かけて完結させることが出来ました。今後どうするかは未定です。一応続編を考えていますが、はたして皆さんが読みたいかどうかかわからないので・・・。では最後に。これまでこの小説をご覧になった皆さん、どうもありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8841c/>

モンスターハンターズサノオ

2010年10月11日05時15分発行